

京都府遺跡調査報告集

第131冊

1. 茶臼ヶ岳古墳群
2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡
 - (1) 鹿背山瓦窯
 - (2) 馬場南遺跡
3. 京都第二外環状道路関係遺跡

2009

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 鹿背山瓦窯跡全景（北西から）



(2) 古墓S X 18 遺物出土状況（東から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成19年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部（現建設交通部）の依頼を受けて実施した茶臼ヶ岳古墳群の発掘調査報告、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて実施した関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査報告及び国土交通省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した京都第二外環状道路建設に関する発掘調査報告の3本を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた概要は下記のとおりである。
 1. 茶臼ヶ岳古墳群
 2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡（平成 19 年度）
 3. 京都第二外環状道路関係遺跡（平成 19 年度）
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	茶臼ヶ岳古墳群	京丹後市久美浜町橋爪	平 19.10.29～平 20. 1.30	京都府土木建築部 (京都府建設交通部)	黒坪一樹
2.	関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡	木津川市大字鹿背山小字須原 大字木津小字糠田	平 19.10. 9～平 20. 2.26	独立行政法人 都市再生機構	竹原一彦 柴嶋彦 渡辺理気 大谷博則
3.	京都第二外環状道路関係遺跡	長岡京市下海印寺、 奥海印寺、調子、 友岡	平 19. 4.24～平 20. 2.29	国土交通省 近畿地方整備局	戸原和人 中川和哉 竹井治雄 高野陽子

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第 6 座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
茶臼ヶ岳古墳群については、新座標を、その他については、継続調査のため旧座標を用いている。
4. 本書の編集は、調査第 2 課調査担当者の編集原案をもとに、調査第 1 課資料係が行った。
5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第 1 課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 茶臼ヶ岳古墳群発掘調査報告	1
2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成19年度発掘調査報告	27
3. 京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告	83

付表目次

3. 京都第二外環状道路関係遺跡	
付表1 平成19年度調査次数一覧	85

挿図目次

1. 茶臼ヶ岳古墳群	
第1図 調査地位位置図	2
第2図 調査前地形図および遺構（古墳、弥生墓、経塚）検出状況	3
第3図 土留め柵設置状況	4
第4図 ベルトコンベヤー設置状況	4
第5図 墳丘（古墳、弥生墓含む）土層断面図（東西方向）	5
第6図 墳丘（古墳、弥生墓含む）土層断面図（南北方向）	6
第7図 5号墳埋葬施設ST05-1および土器棺墓1と出土土器	8
第8図 5号墳土器棺墓2と周辺出土土器	9
第9図 5号墳埋葬施設ST05-2および供献土器	10
第10図 5号墳丘3層出土土器	11
第11図 経塚および埋納遺物（土器・石製品）	12
第12図 天王山B-1号墳丘の経塚石材（参考資料）	13
第13図 6号墳埋葬施設ST06・棺内鉄製品および小土坑	14
第14図 6号墳土器溜まり・溝平面図及および個体復元状況	15
第15図 6号墳土器溜まり出土土器	16
第16図 7号墳埋葬施設ST07-1・2および有袋状鉄斧（ST07-2棺外）	18
第17図 8号墓埋葬施設ST08-1および遺物（鉄製品・甕形土器・管玉）	20
第18図 8号墓ST08-2・3および遺物（ガラス玉・甕形土器）	21

2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

第1図	調査地位位置図……………	29
第2図	トレンチ配置図……………	31
第3図	鹿背山瓦窯跡検出遺構図……………	32
第4図	掘立柱建物跡S B 35、S D 23実測図……………	33
第5図	通路遺構S F 27、S F 28実測図……………	35
第6図	S F 28石敷き実測図……………	37
第7図	粘土採掘場S X 39実測図……………	39
第8図	粘土採掘坑S X 45実測図およびもっこ出土状況……………	41
第9図	土坑S K 16実測図……………	42
第10図	土坑S K 30・32、S X 38実測図……………	44
第11図	土坑S K 41、42、19、S X 24実測図……………	45
第12図	S D 21、S X 41実測図……………	46
第13図	古墓S X 18実測図……………	48
第14図	S D 23出土遺物実測図……………	50
第15図	S F 27出土遺物実測図……………	51
第16図	土坑S K 16出土遺物実測図……………	52
第17図	土坑19、30、32、41、S B 35、S X 38出土遺物実測図……………	54
第18図	土坑S K 26出土遺物実測図……………	55
第19図	S D 21出土遺物実測図1……………	56
第20図	S D 21出土遺物実測図2……………	57
第21図	古墓S X 18出土遺物実測図1……………	59
第22図	古墓S X 18出土遺物実測図2……………	60
第23図	瓦実測図1……………	61
第24図	瓦実測図2……………	62
第25図	金属器実測図……………	64
第26図	石器実測図……………	64
第27図	馬場南遺跡調査トレンチ配置図……………	66
第28図	検出遺構平面図……………	68
第29図	第16トレンチS R 01実測図……………	70
第30図	灯明皿、土師器皿実測図……………	72
第31図	土師器、須恵器実測図……………	73
第32図	三彩実測図……………	75

第33図	墨書土器実測図1	76
第34図	墨書土器実測図2	77
第35図	木筒、木製品実測図	78
第36図	軒先瓦実測図	79
第37図	弥生土器、石器実測図	80

3. 京都第二外環状道路関係遺跡

第1図	調査地位置図	84
第2図	右京第902次荒堀地区調査地位置図	86
第3図	右京第902次荒堀地区トレンチ配置図	87
第4図	右京第902次荒堀地区1・4トレンチ断面図	87
第5図	右京第902次尾流地区調査地位置図	88
第6図	右京第902次尾流地区トレンチ配置図および周辺調査区	89
第7図	右京第902次尾流地区1・2トレンチ断面図	90
第8図	上内田地区調査地配置図	91
第9図	右京第901次上内田地区遺構平面図	92
第10図	右京第901次上内田地区調査区断面図	93
第11図	流路S D 04断面図	94
第12図	流路S D 04土器・木製品出土状況図	95
第13図	右京第902・928次上内田地区遺構配置図	97
第14図	右京第902・928次上内田地区調査区断面図	98
第15図	竪穴式住居跡S H 2実測図	99
第16図	土坑S K 19・土坑S K 20実測図	100
第17図	土坑S K 9・落ち込みS X 8実測図	101
第18図	右京第926次上内田地区1トレンチ遺構平面図	102
第19図	右京第926次上内田地区1トレンチ断面図	103
第20図	土坑S K 05実測図	103
第21図	右京第926次上内田地区2トレンチ遺構平面図	104
第22図	右京第926次上内田地区2トレンチ・溝S D 10断面図	105
第23図	上内田地区出土遺物実測図(1)	107
第24図	上内田地区出土遺物実測図(2)	108
第25図	上内田地区出土遺物実測図(3)	110
第26図	上内田地区出土遺物実測図(4)	111
第27図	上内田地区出土遺物実測図(5)	113
第28図	上内田地区出土遺物実測図(6)	114

第 29 図	右京第 926 次友岡地区調査地位位置図	115
第 30 図	右京第 926 次友岡地区遺構平面図	116
第 31 図	井戸 S E 01 実測図	116
第 32 図	右京第 926 次友岡地区調査区土層断面図	116
第 33 図	調子地区調査地位位置図	117
第 34 図	右京第 902 次調子地区遺構平面図	118
第 35 図	右京第 902 次調子地区断面図	119
第 36 図	右京第 926 次調子地区調査遺構平面図	120
第 37 図	右京第 926 次調子地区トレンチ断面図	120
第 38 図	右京第 928 次調子地区遺構平面図	121
第 39 図	右京第 928 次調子地区トレンチ断面図	122
第 40 図	土坑 S K 03 実測図	123
第 41 図	調子地区出土遺物実測図 (1)	125
第 42 図	調子地区出土遺物実測図 (2)	126
第 43 図	上内田地区遺構平面図	127

図版目次

1. 茶臼ヶ岳古墳群

図版第 1	(1) 調査地全景 (伐採後、南から)	
	(2) 調査地全景 (遺構検出後、空中写真、東から)	
図版第 2	古墳・台状墓検出状況 (東から、空中写真)	
図版第 3	(1) 5号墳全景 (南東から)	(2) 5号墳埋葬施設 S T 05 - 1 (西から)
図版第 4	(1) 5号墳土器棺墓 1 (東から)	(2) 同上 (南から)
	(3) 同上 (西から)	
図版第 5	(1) 5号墳土器棺墓 2 (口縁部分、東から)	(2) 同上 (北西から)
図版第 6	(1) 5号墳埋葬施設 S T 05 - 2 出土土器 (墓壁上、東から)	
	(2) 5号墳埋葬施設 S T 05 - 2 (北から)	
図版第 7	(1) 経塚検出状況 (5号墳丘上、北から)	(2) 同上 (東から)
	(3) 埋納土器・石製品	
図版第 8	(1) 6号墳埋葬施設 (東から、空中写真)	(2) 6号墳埋葬施設・小土抗 (北から)
図版第 9	(1) 6号墳土器溜り (南から)	
	(2) 6号墳土器溜り、複合口縁壺 (北西から)	
図版第 10	(1) 7号墳埋葬施設 (西から、空中写真)	(2) 7号墳埋葬施設 S T 07 - 2 (東から)

- 図版第 11 (1) 8号墓検出状況 (南西から) (2) 同上 (東から)
- 図版第 12 (1) 8号墓棺上土器 (2) 8号墓棺内鉄鍔
(3) 8号墓埋葬施設 S T 08 - 1 (北から)
- 図版第 13 (1) 8号墓埋葬施設 S T 08 - 2 (北から) (2) 8号墓埋葬施設 S T 08 - 3 (南から)
- 図版第 14 (1) 8号墓・9号墓 (東から、空中写真)
(2) 9号墓埋葬施設 S T 09 - 1・S T 09 - 2 手前 (南から)
- 図版第 15 (1) 9号墓埋葬施設 S T 09 - 1、中間断面 (南から)
(2) 9号墓埋葬施設 S T 09 - 1 墓竈内出土弥生土器 (南から)
- 図版第 16 (1) 9号墓埋葬施設 S T 09 - 1 (北から) (2) 9号墓埋葬施設 S T 09 - 2 (東から)
- 図版第 17 5号墳土器棺墓 1・2、S T 05 - 2 出土土器 (番号は挿図 No.)
- 図版第 18 経塚および 6号墳土器溜り出土遺物 (番号は挿図 No.)
- 図版第 19 (1) 8号墓出土玉類 (上 2段 S T 08 - 1、下段 S T 08 - 2)
(2) 8号墓出土弥生土器 (左 S T 08 - 1、右 S T 08 - 3)
- 図版第 20 6・7号墳および 8号墓出土鉄製品

2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

- 図版第 1 (1) 鹿背山瓦窯跡第 2 次調査地遠景 (北西から)
(2) 第 2 次調査地遠景 (南東から) (3) 第 2 次調査地全景 (左上が北)
- 図版第 2 (1) 第 2 次調査地東部全景 (左上が北)
(2) 通路 S F 27・S F 28 東部と鹿背山 1 号窯・2 号窯 (左上が北)
- 図版第 3 (1) 掘立柱建物跡 S B 35 全景 (南西から) (2) S B 35 全景 (西から)
(3) 溝 S D 23 東部遺物出土状況 (北東から)
- 図版第 4 通路遺構 S F 27 (左)・S F 28 (右) 全景 (西から)
- 図版第 5 (1) 第 2 次調査地西部全景 (左上が北) (2) S F 27・S F 28 全景 (北西から)
(3) S F 27・S F 28 全景 (南東から)
- 図版第 6 (1) S F 27・S F 28 検出状況 (北西から)
(2) S F 28 B - B' 地点埋土断面 (北西から)
(3) S F 27 D - D' 地点上下路面石敷き断面 (北西から)
(4) S F 28 石敷き鞆調査状況 (北西から) (5) S F 27 東端部 (東から)
(6) S F 27 西端部 (北東から) (7) S F 28 石敷きの鞆 (東から)
(8) S F 28 石敷きの鞆 (北西から)
- 図版第 7 (1) 粘土探掘穴遺構 S X 39・S X 45 (北西から)
(2) S X 45 の壁面に残る粘土検出状況 (北西から)
(3) S X 45 内もっこ出土状況 (北西から)
- 図版第 8 (1) 土坑 S K 16 遺物出土状況 (南西から) (2) 土坑 S K 19 遺物出土状況 (南東から)

- (3) S X 26 検出状況 (南から)
- 図版第 9 (1) 土坑 S K 30 焼土・遺物出土状況 (南東から)
 (2) 土坑 S K 41 遺物出土状況 (南から) (3) S K 32 検出状況 (南西から)
- 図版第 10 (1) 丘陵部 S X 38 周辺遺物出土状況 (南から)
 (2) 土坑 S X 38 遺物出土状況 (南から) (3) 近世墓 S X 24 (東から)
- 図版第 11 (1) 溝 S D 21 北部遺物出土状況 (北西から) (2) S D 21 内集水溝 S X 44 (北から)
 (3) S D 21 内軒丸瓦出土状況 (北から)
- 図版第 12 古墓 S X 18 全景 (南から)
- 図版第 13 (1) S X 18 調査状況 1 (南から) (2) S X 18 北部埋土断面 (南から)
 (3) S X 18 調査状況 (南から)
 (4) S X 18 木郭・棺内遺物出土状況 (東から)
 (5) S X 18 棺内北小口遺物出土状況 (南から)
 (6) S X 18 棺内南小口遺物出土状況 (北から)
 (7) S X 18 木棺北小口部東側墓壇掘形断面 (南から)
 (8) S X 18 中央西側墓壇掘形断面 (南から)
- 図版第 14 出土遺物 1 (土器)
- 図版第 15 出土遺物 2 (土器)
- 図版第 16 出土遺物 3 (土器)
- 図版第 17 出土遺物 4 (土器・瓦・埴)
- 図版第 18 (1) S X 18 出土釘 1 (2) S X 18 出土釘 2
- 図版第 19 (1) 馬場南遺跡調査前 (南西から) (2) 馬場南遺跡調査前 (西から)
 (3) 馬場南遺跡全景 1 (南西から) (4) 馬場南遺跡全景 2 (東から)
 (5) 第 7・第 8・第 10 トレンチ全景 (南から)
 (6) 第 1 トレンチ全景 (西から) (7) 第 2 トレンチ全景 (西から)
 (8) 第 3 トレンチ全景 (西から)
- 図版第 20 (1) 第 4 トレンチ全景 (東から) (2) 第 6 トレンチ全景 (東から)
 (3) 第 8 トレンチ全景 (東から)
 (4) 第 8 トレンチ S R 01 土層断面 (北西から)
 (5) 第 10 トレンチ全景 (西から)
 (6) 第 10 トレンチ S R 01 検出状況 (南西から)
 (7) 第 11 トレンチ全景および S D 02 (西から)
 (8) 第 12 トレンチ全景 (南東から)
- 図版第 21 (1) 第 13 トレンチ全景 (南東から) (2) 第 14 トレンチ全景 (北から)
 (3) 第 15 トレンチ全景 (東から) (4) 第 16 トレンチ全景 (北西から)
 (5) 第 16 トレンチ S R 01 (右下が北) (6) 第 16 トレンチ S R 01 (北から)

(7) 第16トレンチSR01木簡出土状況（北西から）

(8) 第16トレンチSR01三彩出土状況（南西から）

図版第22 (1) 掘立柱建物跡SB01（左上が北） (2) SB01（南西から）

(3) SB01柱穴P11柱根検出状況（南東から）

図版第23 (1) 井戸SE01井戸内堆積土断面（南東から）

(2) SE01井戸内堆積土中層下面（南東から）

(3) SE01井戸内三彩壺頸部出土状況（北から）

図版第24 (1) 出土遺物1（須恵器・瓦） (2) 出土遺物2（灯明皿）

図版第25 出土遺物3（三彩陶器）

図版第26 出土遺物4（墨書土器）

図版第27 出土遺物5（木簡）

図版第28 出土遺物6（木簡・木製品）

3. 京都第二外環状道路関係遺跡

図版第1 上内田地区<長岡京跡右京第901・902次> 調査地遠景（東から）

図版第2 (1) 荒堀地区<長岡京跡右京第902次>調査前全景（東から）

(2) 荒堀地区<長岡京跡右京第902次>1トレンチ全景（北から）

(3) 荒堀地区<長岡京跡右京第902次>4トレンチ全景（西から）

図版第3 (1) 尾流地区<長岡京跡右京第902次>1トレンチ全景（北から）

(2) 尾流地区<長岡京跡右京第902次>1トレンチ流路跡SD05・SD07（南から）

(3) 尾流地区<長岡京跡右京第902次>2トレンチ（北東から）

図版第4 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>調査地近景（北西から）

(2) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>調査区全景（上が東）

図版第5 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第901・902次>調査地近景（西から）

(2) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>調査区西壁土層（東から）

(3) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>流路SD04-2区西部土層断面（南東から）

図版第6 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>流路SD04木製品・自然木出土状況（北西から）

(2) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>流路SD04木製品出土状況（上が南）

(3) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>流路SD04土器出土状況（上が西）

図版第7 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>流路SD04木柱検出状況

(2) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>溝SD02土層断面（東から）

(3) 上内田地区<長岡京跡右京第901次>作業風景（東から）

図版第8 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第928次>調査前風景（南西から）

(2) 上内田地区<長岡京跡右京第902次>トレンチ全景（南から）

- (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 902 次>トレンチ北壁土層 (南から)
- 図版第 9 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>調査区全景 (北から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>竪穴式住居跡 S H 2 (北東から)
- 図版第 10 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 902 次>竪穴式住居跡 S H 2 上層石材検出状況 (南から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>竪穴式住居跡 S H 2 (東から)
 (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 902 次>竪穴式住居跡 S H 2 中央土坑 K 1 (南から)
- 図版第 11 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>竪穴式住居跡 S H 2 土坑 K 2 (北西から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>竪穴式住居跡 S H 2 土器出土状況 (上が北)
 (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>土坑 S K 20 (東から)
- 図版第 12 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>土坑 S K 9 (東から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>落ち込み S X 8 (北西から)
 (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 928 次>調査区南壁土層 (北から)
- 図版第 13 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>1-1 トレンチ全景 (南から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>1-2 トレンチ全景 (西から)
 (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>2 トレンチ全景 (北から)
- 図版第 14 (1) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>1-1 トレンチ土坑 S K 05・S K 07 (北東から)
 (2) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>1-1 トレンチ土坑 S K 07 土器出土状況 (上が南)
 (3) 上内田地区<長岡京跡右京第 926 次>2 トレンチ溝 S D 08 全景 (西から)
- 図版第 15 (1) 友岡地区<長岡京跡右京第 926 次>調査前全景 (南東から)
 (2) 友岡地区<長岡京跡右京第 926 次>トレンチ全景 (北から)
 (3) 友岡地区<長岡京跡右京第 926 次>井戸 S E 01 (南西から)
- 図版第 16 (1) 調子地区<長岡京跡右京第 902 次>調査前全景 (西から)
 (2) 調子地区<長岡京跡右京第 902 次>1 トレンチ全景 (東から)
 (3) 調子地区<長岡京跡右京第 902 次>2-1・2 トレンチ全景 (西から)
- 図版第 17 (1) 調子地区<長岡京跡右京第 902 次>3-1・2・3 トレンチ全景 (南東から)
 (2) 調子地区<長岡京跡右京第 926 次>調査前全景 (南から)
 (3) 調子地区<長岡京跡右京第 926 次>トレンチ東部全景 (北東から)
- 図版第 18 (1) 調子地区<長岡京跡右京第 926 次>トレンチ西部全景 (北西から)
 (2) 調子地区<長岡京跡右京第 926 次>トレンチ中央断ち割り (北西から)
 (3) 調子地区<長岡京跡右京第 926 次>溝 S D 01 土器出土状況 (上が東)
- 図版第 19 (1) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>調査地全景 (南から)
 (2) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>溝 S D 01 (東から)

(3) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>溝 S D 02 (南から)

図版第 20 (1) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>土坑 S K 03 (西から)

(2) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>土坑 S K 06・07 (南西から)

(3) 調子地区<長岡京跡右京第 928 次>柱穴 P 10・11・12 (北西から)

図版第 21 上内田地区出土遺物 (1)

図版第 22 上内田地区出土遺物 (2)

図版第 23 (1) 上内田地区出土遺物 (3)

(2) 上内田地区出土遺物 (4)

図版第 24 (1) 上内田地区出土遺物 (5)

(2) 上内田地区出土遺物 (6)

図版第 25 調子地区出土遺物 (1)

図版第 26 調子地区出土遺物 (2)

1. 茶臼ヶ岳古墳群発掘調査報告

1. はじめに

この発掘調査は、京都府土木建築部が京都府京丹後市久美浜町橋爪の国道312号線において計画する、交通安全施設の建設に先立って実施したものである。

茶臼ヶ岳古墳群は、5基からなる古墳群として京都府遺跡地図に登載されている。今回の調査にかかる5号墳、北側の矢田八幡神社境内にある1～3号墳とそこからさらに北西にのびる尾根上の4号墳である(第1図)。今回の調査地は、南側の国道312号線にはほぼ平行する丘陵地で標高25～45mを測る。今回予定されている工事で削られるため、調査範囲にある5号墳の調査、さらにその他の古墳・遺構の確認も含めた本格的な調査となった。

調査の結果、5号墳が確実な古墳であると判明しただけではなく、5号墳をはさんで上位に古墳時代前期の古墳2基(6号墳・7号墳)、下位に弥生時代後期の台状墓2基(8号墓・9号墓)が新たにみつかった。さらに5号墳の墳丘上に経塚1基の存在も明らかとなった(第2図)。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課第1係長小池寛、同専門調査員黒坪一樹、調査第2係専門調査員石尾政信が担当した。調査面積は610㎡で、調査期間は平成19年10月29日から平成20年1月30日までである。調査にあたっては、京都府教育委員会、京丹後市教育委員会をはじめ、作業員、調査補助員、整理員の方々から御協力を得た。心より御礼申し上げます。

2. 位置と環境

久美浜町は京丹後市の最西端にあつて、西から久美谷川、川上谷川、佐濃谷川が流れ、各流域の狭い平野部や小高い丘陵上には多くの遺跡が存在している。茶臼ヶ岳古墳群は、川上谷川の中流域にあつて、その上流の須田というところに金銅製の環頭太刀で有名な湯舟坂2号墳(7世紀初頭)が、さらに今回の調査地に近い島の集落に前方後円墳である茶白山古墳(4世紀後半)などがある。また茶臼ヶ岳古墳群の北西には、集落遺跡として著名な橋爪遺跡(弥生時代後期～古墳時代)がある(第1図)。

ここで茶臼ヶ岳古墳群の古墳および台状墓に関連する遺跡を周辺地域において概観したい。丹後地方の弥生時代における墓には、丘陵尾根上に土を削ったり盛ったりして階段状に造られた台状墓が圧倒的に多い。調査地周辺における台状墓の調査例は、他の丹後地域や、但馬地方と比較して少ないが、弥生時代中期前半からの遺跡が知られる。佐濃谷川流域における豊谷遺跡の台状墓がそれで、2基のうちの1号埋葬施設からは、22点にもおよぶ石鏃や折れた石剣などがみついている。当時の「戦い」を示す事例と考えられている。兵庫県但馬地方でも中期初頭の舟隠墳墓群(豊岡市)から複数の石鏃が出土した木棺墓が確認され、当時における社会情勢の一端を



第1図 調査地位位置図

(国土地理院 1/50,000「城崎」・京都府遺跡地図第3版第1分冊)

この期にみる。

弥生時代から古墳時代への移行期、丹後では弥生時代の台状墓・墳丘墓と同じように丘陵上に古墳が造られる。大田南古墳群（峰山・弥栄町）はその最古（3世紀中葉）に位置付けられるが、茶臼ヶ岳古墳群周辺には、現在のところ本時期の古墳は見つかっていない。

次の布留式土器を指標とする古墳時代前期になると、久美浜町では3世紀中頃に蔵谷遺跡が、4世紀の中頃から後半に北谷1号・5号、南谷、権現山、堤谷などの古墳群が造られる。茶臼ヶ岳古墳群も前方後円墳築造以前の古墳群のひとつで、これらの古墳群と何らかの関係があったと思われる。

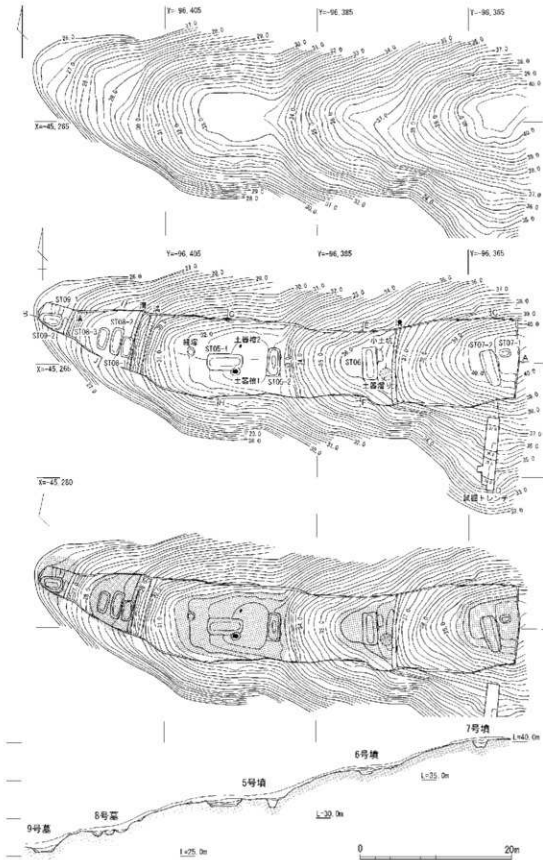
さらに茶臼ヶ岳古墳群の周辺では但馬地方とはほぼ同時期に前方後円墳が出現する。4世紀後半の茶臼山古墳をはじめ、岩ヶ鼻古墳、陵神社12号墳、芦高神社古墳などが築造され、次第に丹後地方は巨大古墳の時代となっていく。

3. 調査経過

今回の調査でまず直面した問題は、掘削により大量に出る土砂処理であった。丘陵直下の国道に沿う南側は現住の民家が建ち並び、反対の北側斜面下は民地となっていた。そのため、大量の

うかがうことができる。

さらに弥生時代中期後半から後期にかけては、方形台状墓の規模が大きくなり、複数埋葬の人数・割合が多くなる傾向がある。そして、今回の調査でもみられた土器を破砕して墓壇内・棺外に入れる、いわゆる破砕土器^(注2)供献は中期後半には出現し、後期に入って盛行する。これは丹後および但馬に共通する現象で、ガラス玉・鉄製品の多量副葬とともに、この時期の重要な特徴である。そして後期末には、赤坂今井墳墓（峰山町）や大風呂南1号墓（岩滝町）などの大型の墳丘墓が出現し、首長の強大な力のピークを



第2図 調査前地形図および遺構（古墳、弥生墓、経塚）検出状況



第3図 土留め柵設置状況



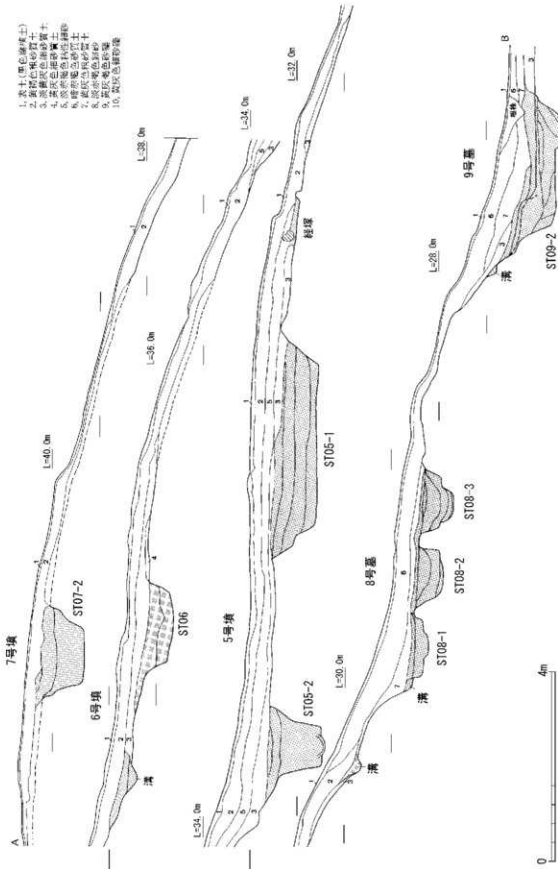
第4図 ベルトコンベヤー設置状況

掘削土を急斜面地に棄てたり、あるいは周囲に盛って留め置く事は、大雨の際などに土砂の流出・崩落で民家や畑に甚大な被害を及ぼす危険もあり、回避する必要がある。協議の結果、民家の範囲から外れる東端の南斜面にすべての土砂を捨てる方針をたて、土砂で埋まる部分に調査トレンチを設定し、遺構の確認作業を急いだ。遺構がなかったため、この部分に掘削土を集積することにしたが、万が一のことを考え、伐採範囲ぎりぎりに頑丈な防護柵の設置工事（第3図）を施し、さらに国道から段差をもって拓けている畑地（丘陵裾）にも土留め柵を巡らせた。

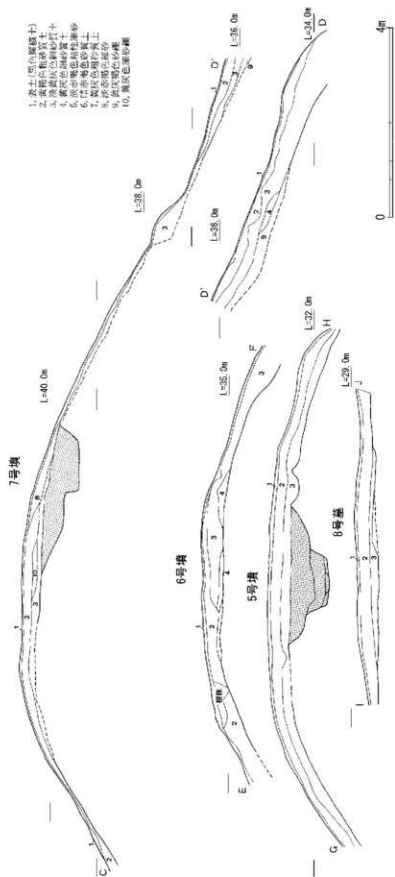
次に、急斜面と民地に囲まれているため、表土掘削のための重機を入れることができず、掘削はすべて作業員の人力で行った。先の経緯から、下の古墳の掘削土もすべて東側に運び上げて投棄しなくてはならず、そうした労力

を軽減するためにベルトコンベアーを導入した（第4図）。これにより迅速な土砂搬出が可能となった。

掘削は最高所の7号墳から開始し、6号墳、5号墳、8号墓、9号墓の順で掘り進めた。根株起しには難渋したが、花崗岩の風化した細砂粒を主体とする覆土は掘削しやすく、また埋葬施設の識別も比較的容易であった。表土・覆土の掘削と同時に、埋葬施設の掘削もすすめ、11月中には7号墳と6号墳の掘削をほぼ終え、12月にはいって5号墳および経塚の調査をすすめた。それらをほぼ掘り終えたその年の終了間近、古墳はないと考えていたさらに下の狭い尾根部に、弥生時代後期の台状墓の存在を明瞭に捉えた。8号墓とし、3基の埋葬施設を確認するとともに、それらの墓壇内および棺内からは、土器、玉類、鉄器などが出土した。8号墳の掘削・記録をすすめつつ、今回の調査地西端で、最も低位にある尾根部を掘り進めた結果、そこからも弥生時代後期の台状墓（9号墓）を確認した。9号墓の狭い平坦地から2基の埋葬施設がみつかった。遺構掘削と並行して土層断面や埋葬施設などの実測および写真撮影を順次すすめた。1月24日にラジコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、27日には現地説明会を実施し、56名の参加を得た。そして1月30日、記録作業のすべてを終了した。



第5図 墳丘(古墳、弥生墓含む)土層断面図(東西方向)



第6図 墳丘(古墳、弥生墓含む)土層断面図(南北方向)

4、土層

丘陵部は花崗岩の風化砂質土から成る地盤で、それを削り出して平坦面を作り、そこに埋葬施設を設ける。盛土は基本的に施されない。薄い表土(1層)の下は、黄褐色粗砂質土(2層)、淡黄灰色細砂質土(3層)、黄灰色細砂質土(4層)、淡赤褐色粘性細砂(5層)、暗赤褐色砂質土(6層)など、いずれも砂質土や細砂が堆積している(第5・6図)。

5、遺構と遺物

検出遺構は、3基の古墳時代前期の古墳(5・6・7号墳)、2基の弥生時代後期の台状墓(8・9号墓)、1基の平安時代の経塚である。古墳と台状墓からは、それぞれ1基または複数の埋葬施設が見つかった(第2図)。出土遺物は、古墳・台状墓からの土師器、弥生土器、玉類、鉄製品、経塚からの土器類と石製品である。

以下、5号墳から9号墓まで、①墳形・規模・外表施設、②埋葬施設と出土遺物、③その他の遺構と遺物

について説明する。なお、①の規模はいずれの古墳、台状墓とも墳頂部の規模ということで、墳丘の全体の大きさについては正確に判断できなかった。

(1) 5号墳

①墳形・規模・外表施設

墳頂平坦部の形と大きさは、隅丸長方形で南北6.5m、東西14.5mを測る(第2図)。墳頂部のみ整形され、裾部の基底ラインは不明瞭で人工的な地形の変更は認められない。土層断面の観察から盛土は存在していない。

②埋葬施設と出土遺物

埋葬施設は、木棺を納めるもの2基(ST05-1、ST05-2)と、土器棺墓1・2を合せた計4基である(第7～9図)。

埋葬施設 ST05-1 (第7図上)

平坦部のほぼ中央に掘り込まれている。東西に主軸をもち、長辺4.2m、短辺2.8m、墓壇最下底までの深さ(以下深さとする)1mを測る。平面形は隅丸長方形である。

墓壇は二段に掘り込まれている。二段目の最下面にわずかな土色の変化がみられ、東側が細く尖ることから舟底状のくり抜き式の木棺(推定長さ2.75m、同幅50～60cm)が納められていた可能性が高い。墓壇内および棺内から遺物の出土はみられなかった。

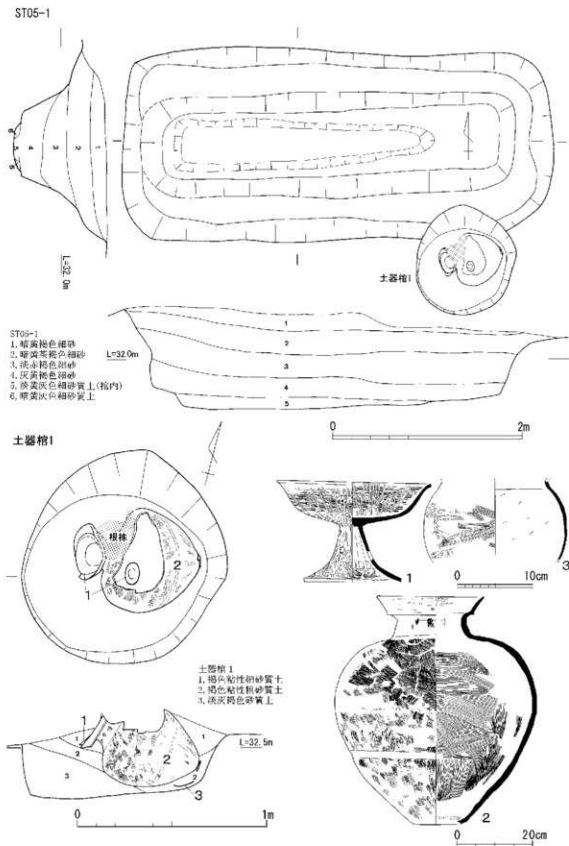
土器棺墓1 (第7図下)

埋葬施設ST05-1の南東隅の一部を壊して造られる。平面形はほぼ円形で、直径1.1m、深さ35cmを測る。中に大型の複合口縁壺(第7図2)が、口を西側斜め上にして埋納されていた。口縁部は土師器の高杯(同図1)で塞がれていた。高杯の脚柱部は壺の体部内に側に落ち込んでいた。壺の底は直径10cmほどの穴が内側から開けられ、別個体の土師器片(同図3)でその穴を外側から塞いでいたとみられる。

出土遺物は、土師器3点である(第7図1～3)。1は高杯である。器高13.4cm、杯部の口縁部径20cm・同深さ5.3cm、脚部底径12.8cmを測る。暗赤褐色および橙褐色の精良な胎土・焼成である。杯部は深く口縁端部はのびやかに外反し、内外面とも細かなハケ目調整や、暗文状のミガキ痕がみられる。孔を3か所に開けられ滑らかなカーブで聞く脚柱部も細かなミガキで調整されている。類例としては、布留I式期(古墳時代前期中頃)とされる北谷1号墳出土の高杯があげられる。2は、土師器の壺または甕の体部片である。外面ハケメ、内面ケズリの調整がみられる。3は、器高60.6cm、口縁部径28.5cm、体部最大径53.5cmを測る大型複合口縁壺である。砂粒を多く含む淡黄褐色の胎土である。外形は、明瞭な抉りをもつ山陰系の特徴を備えた口縁部、肩が大きく張り出す体部、そこから滑らかにすぼまる平底の底部となる。底部は意図的に内側から割り貫かれている。口縁部および体部の調整はナデおよびハケ目である。体部外面は幅のつまった右下がりの短いハケ目が、内面は幅広の長いハケ目が縦横に施されている。

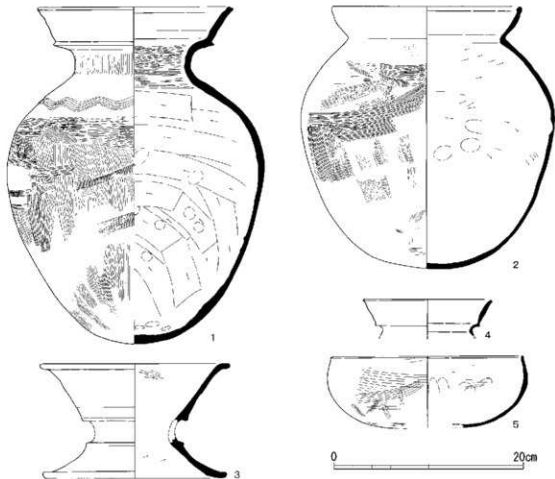
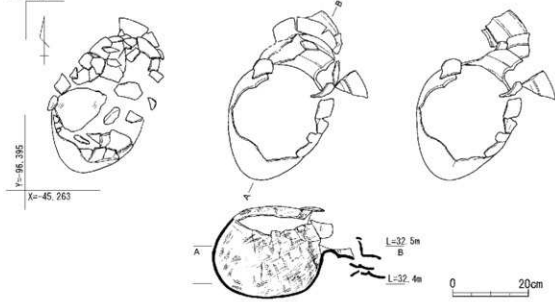
土器棺墓2 (第8図)

埋葬施設ST05-1の北東約2mの地点に設けられ、土師器の複合口縁壺と甕を組み合わせた



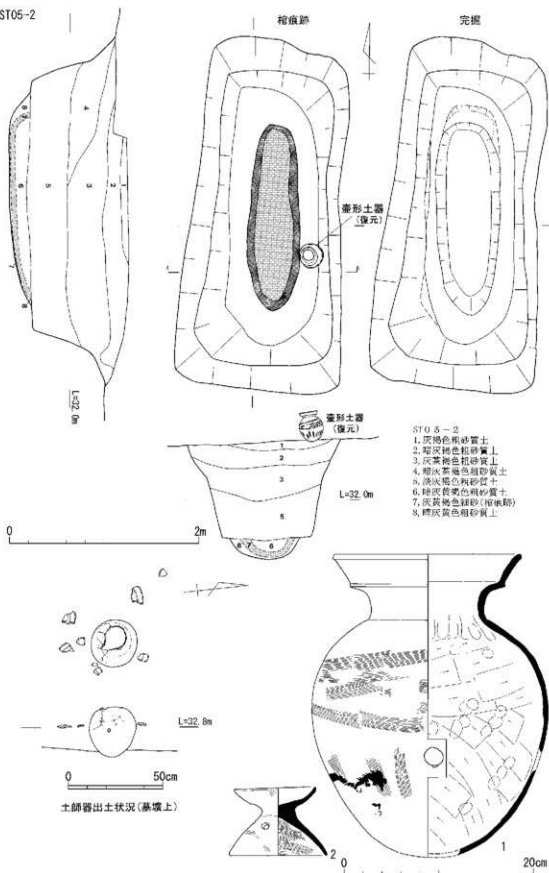
第7図 5号墳埋葬施設ST05-1および土器棺墓1と出土土器

土器棺2



第8図 5号墳土器棺墓2と周辺出土土器

ST05-2



第9図 5号墳埋葬施設ST05-2および供献土器

ものである。横倒しになった完形の複合口縁壺(第8図1)の口縁部に、布留式の特徴をもつ甕(同図2)の破片(体部上半から口縁部)を被せている。合せ口の組み合わせに際し、甕をこの場で破砕し、不必要な破片を複合口縁壺上に散布している。壺の中に流入した土を丁寧に洗い出したが、人工的な遺物、自然遺物ともなかった。これら2個体で構成された土器棺墓2は古墳時代前期前半の布留I式期のものである。

周辺から鼓形器台と複合口縁壺および碗が出土した(第8図3~5)が、これらは土器棺墓2に伴うものであるかは不明で、特に碗は新しい時期のものであろう。

出土遺物は、土師器3点である。第8図1の複合口縁壺は、口縁部径20cm、頸部径12.2cm、体部最大径27.2cm、器高35.5cmである。外反する口縁の屈曲部は、稜が非常にシャープある。橙褐色で砂粒の多い胎土である。頸部内外面および体部外面はハケメ、肩部には縞波状文が施される。体部内面は頸部のハケメが終わる部分からヘラケズリ調整される。2の布留式甕は、丸底で、口縁端部を肥厚させ、やや張る体部をもつ。口縁部径19.8cm、体部最大径27cm、器高27.6cmである。淡褐色を呈し0.5~3mmの砂粒を多く含む。3は鼓形器台である。脚台部に比して受け部が長いタイプで、頸部の稜は明確に付けられている。復元ながら口径19.5cm、底部径18.8cm、器高12cmを測る。淡黄褐色の胎土をもつ。4は山陰系複合口縁壺の口縁部で、口径13.7cmを測る。5は赤く焼かれた土師器の碗で、口径20cmを測る。3および4とは時期を異にし、5世紀以降のものであろう。

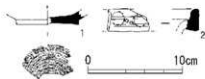
埋葬施設 ST05-2 (第9図)

東側上位の6号墳との境に造られた木棺墓である。南北を主軸にもち、長辺3.7m、短辺1.5~1.8m、深さ1.25mを測る、北辺をやや狭くするが隅丸長方形に近い。上位からの土砂が厚く堆積するが盛土はない。

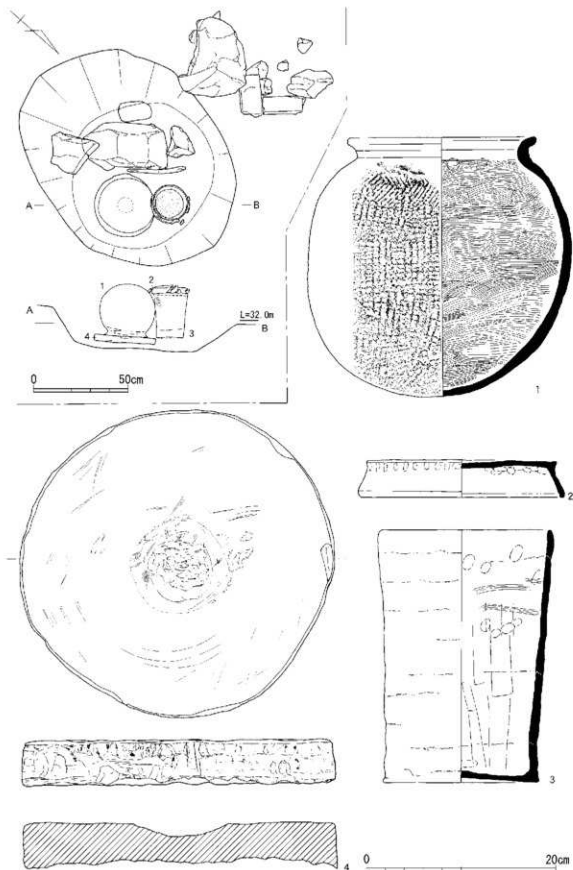
墓壇は、急角度で底まで掘り込まれ、平坦にした底面をさらに掘り込んで木棺を納める。土に置き換わった棺材の部分が明瞭に観察されたが、棺底面の識別はできなかった。棺形態は、くり抜き式の舟底状木棺⁽⁸³⁾で、南側の先端が舟の舳先のように尖る。木棺の大きさは、およそ長辺2m、短軸60~45cm、深さ20cmの残りである。墓壇内および棺内に、副葬品とみられる遺物はなかったが、墓壇の上面から土師器2個体が出土した。複合口縁壺と器台である(第9図1・2)。壺は口を上にして半分埋められた状態で、口縁部を意図的に打ち欠かれ、破片を散布させていた。埋葬儀礼に伴う破砕供獻とみられる。壺の中の土を丁寧に洗浄したが、人工・自然遺物とも認められなかった。

器台は複合口縁壺とほぼ同じか所から破片で出土し、接合作業により完形品となった。

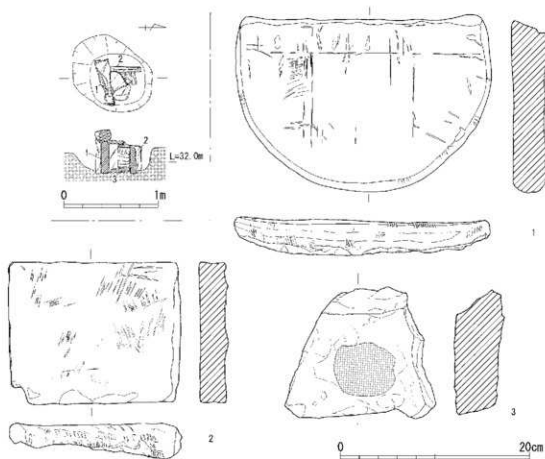
出土遺物は、土師器2点である。第9図1の複合口縁壺は、口縁部径19.6cm、頸部径12.6cm、体部最大径25cmを測る。淡橙褐色で長石などの砂粒を多く含む胎土で、薄い器壁をもつ。外反する口縁端部、中間に最大径がくる球形に近い体部、丸底の外形である。口縁部の稜など、シャープなつ



第10図 5号墳丘3層出土土器



第11図 経塚および埋納遺物（土器・石製品）



第12図 天王山B-1号墳丘の経塚石材(参考資料)

くりである。体部外面はハケ、内面は屈曲部よりやや下からのケズリで調整される。なお、体部下半の一か所に、径約2cmの穿孔がみられる。

同図2の器台は口縁径8.5cm、器高7.3cm、底部径10cmを測る。橙黄褐色で石英・長石などの粒を含む胎土である。上部の小さく浅い受け部と、ややふくらみをもって開く脚部をもつ。脚部には孔が2か所にあけられている。5号墳では、2基ある埋葬施設の墓壇および棺内に副葬品を納めず、2基の土器棺墓や供献土器の配置にみられるように、墓壇上や周縁部を手厚くする葬法が特徴的である。

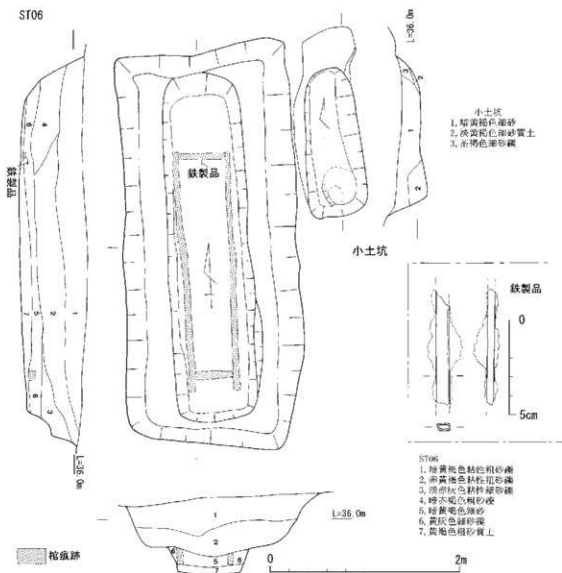
③ その他の遺構と遺物

3層中から出土した平安時代の糸切り痕をもつ須恵器碗の底部片と、弥生時代後期の高杯または壺の口縁端部が出土した(第10図)。さらに経塚1基がある(第11図)。

経塚

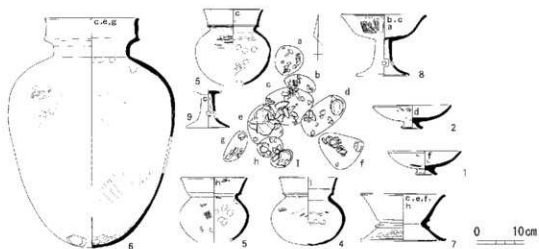
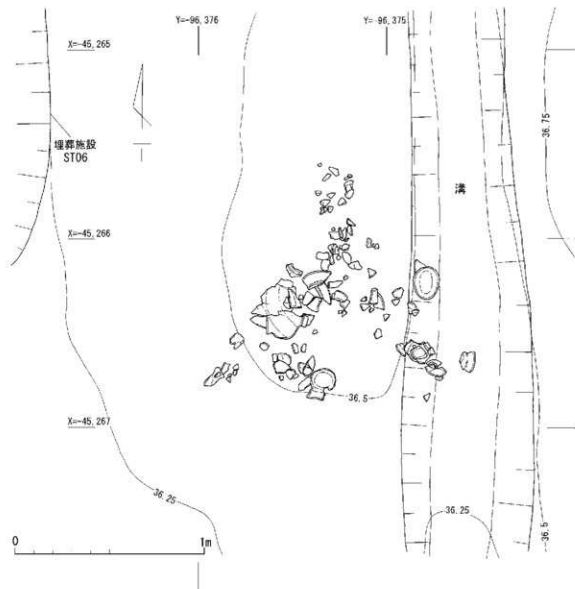
5号墳頂部の西端にあり、平面形は長径1.3m、短径0.9m、深さ20cmを測り、平面形は楕円形である(第11図)。中には、須恵器質の壺(第11図1)と、土師器質の蓋と筒形容器(同図2・3)が並んで納められていた。周辺に大小の角礫が散乱し、小規模な石組みがあったとみられる。しかし原位置をとどめるものは、壺と筒形容器に接して並ぶ3個の礫のみである。

出土遺物は、須恵器壺、土師製筒形容器一口および石製の台である。第11図1の壺は器高

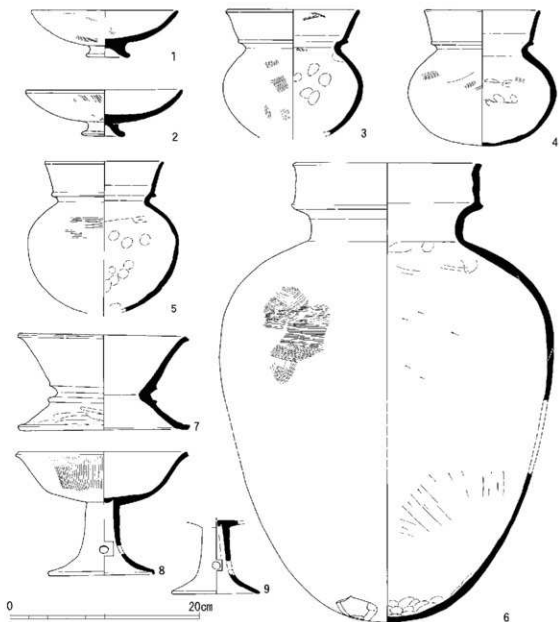


第13図 6号墳埋葬施設ST06・棺内鉄製品および小土坑

27cm、口縁部径20cm、体部最大径27.5cmを測る。短い口縁部に球形に近い体部をもつ。須恵器質ながら瓦質のような焼成である。体部外面に細かな格子目タタキ痕、体部内面に横方向のハケ目調整が顕著である。2は頂部が平坦な土師器質の蓋である。最大径21.3cm、器高4cmを測る。3は、土師器質の筒形容器である。ほとんど未調整の粗い造りで内外面とも橙褐色である。器高26.6cm、口縁部径17.6cm、底径16.2cmを測る。4は、凝灰岩製の台である。ここに1の須恵器壺が口縁部を下にして伏せ置かれていた。素材を割り出して扁平な正円形に整形し、表面および側縁の全周を丹念に研磨している。丹精込めた逸品といえる。さらに表面中心部を直径10cm、深さ1.5cmで凹ませている。以前、センターで調査した久美浜町天王山古墳群B-1号経塚の石組みを構成する礫に、同じく凝灰岩製で線刻の施された半円形の扁平礫があり、今回のものに類似することから参考資料として掲載した(第12図)。



第14図 6号墳土器溜まり・溝平面図および個体復元状況



第15図 6号墳土器溜まり出土土器

(2) 6号墳

①墳形・規模・外表施設

墳頂平坦部の形と大きさは、台形に近い方形で南北7m、東西6.5mを測る(第2図)。土層断面の観察から、盛土は施されていない。東端に7号墳との区画を示す溝が1条掘られていた。ほぼ直線的で、断面形はU字形を呈している。長さは10m、幅1m、深さ30cm。

②埋葬施設と出土遺物

平坦部の中央部に1基の埋葬施設(ST06)と、その棺内より鉄製品が1点出土した。

埋葬施設 ST06 (第13図)

長方形の掘形で、長辺4.2m、短辺1.9m、深さ0.8mを測る。主軸は南北方向である。

二段に掘り込まれた墓壇の底に箱形木棺が納められたとみる。棺材が木質に置き換わった痕跡(厚さ約7cm)から推すと、棺の大きさは長さ25m、幅0.55mを測る。

出土遺物には、棺内からの鉄製品が1点ある(第13図右)。意図的に破損されたヤリガンナの断片とみられる。残存長6cm、幅7mm、厚さ4mm、重さ7gを測る。

③その他の遺構と遺物

小土坑(第13図)

北東部に隣接して小土坑が1基ある。長さ1.6m、幅0.6m、深さ20～40cmを測り、南側が深く掘られている。棺痕跡や遺物もなく用途・性格は不明である。

土器溜り(第14・15図)

7号墳との境にあたる墳丘東端で、破損した状態の土師器が多量にみつかった(第14図)。南北13m、東西1.5mの範囲である。埋葬儀礼に伴い破砕供献された土器群と考えられる。互いに離れている破片の接合例も多い点から、意図的に破砕して散らされたものといえる(同図下)。土師器は合計10個体に接合・復元された。内訳は、低脚杯2点、小型の複合口縁壺3点、中型の複合口縁壺1点、鼓形器台1点、高杯3点(うち2点を図化)である(第15図)。完全な形を留めるのは低脚杯の1点(同図2)だけである。

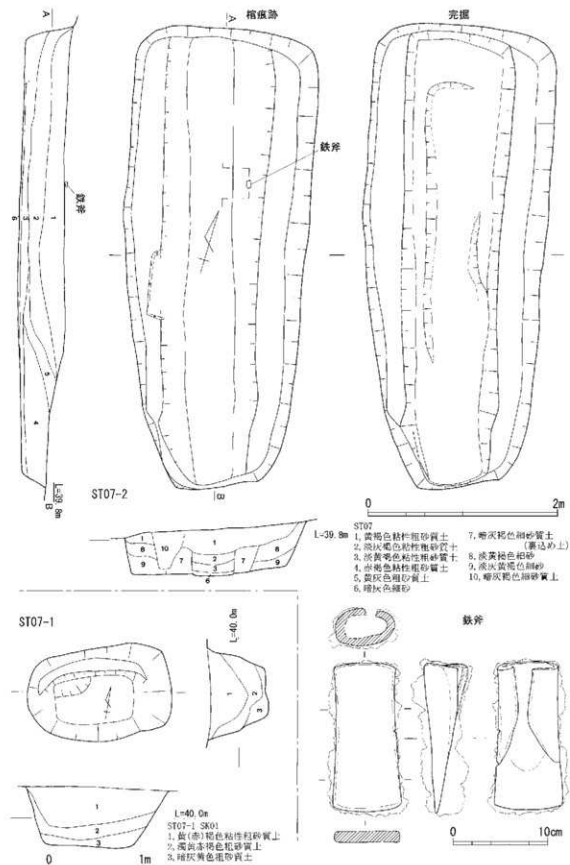
出土遺物は、土師器10点である。第15図1・2の低脚杯は、蓋との見方もあるが、弥生時代からの系譜が追えることから杯とみるのが主流である。橙褐色の色調で1.5mm以下の砂粒が多い胎土である。杯部の口縁部径は1が15.7cm、2が16.8cm、底径は1が4.7cm、2が4.6cm、器高は1が5cm、2が5cmを測る。3～5は丸底の複合口縁壺である。口縁部から山陰系の特徴をもつ。いずれも淡橙褐色で、2mm以下の白色の砂粒が多く含まれる。口縁部径・体部最大径・器高は、復元値も含めて3が13.7・14.7・14cm、4が12・15.6・14.3cm、5が12.6・16・16cmを測る。体部は最大径がその中間にくる球形に近いもので、外面をハケメ調整する。6は、やや長胴で口縁端部が直に立ち上がる中型の複合口縁壺である。口縁部径18.8cm、体部最大径35.4cm、器高(推定)48.5cmを測る。張り出す肩部が最大径となり、体部中間にくるものよりも古式の様相を示している。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリの調整がある。丸底の底部に内側からの穿孔がみられる。7は鼓形器台である。淡橙黄褐色で、口径17.6cm、頸部径9.8cm、裾部径17.4cm、器高10cmを測る。受け部の突帯の稜は鋭い。8と9は高杯である。ともに脚部は裾部から滑らかに屈曲する形である。8の深い杯部は口径17.7cm、深さ5.5cmを測り、外面に縦方向のハケメがみられる。暗橙褐色で砂粒の多い胎土である。

(3) 7号墳

①墳形・規模・外表施設

今回調査地の最高所(標高45m)に造られた古墳である。南北8m、東西7m以上を測る台形状である(第2図)。墳丘盛土はみられず、岩盤(花崗岩質)を削り出して整形している。裾部の地形変化はみられない。

②埋葬施設と出土遺物



第16図 7号墳埋葬施設ST07-1・2および有袋鉄弁(ST07-2棺外)

埋葬施設は土坑状のもの1基（ST07-1）と、木棺を納めたもの1基（ST07-2）である。

埋葬施設 ST07-1（第16図左下）

最高所である7号墳頂部に掘られ、平面形は楕円形で、長軸1.5m、短軸1m、深さ60cmを測る。木棺の痕跡や、土器などの出土は確認されなかったが、西側の埋葬施設 ST07-2 と同時期で、埋葬に伴うものであろう。

埋葬施設 ST07-2（第16図上）

南北を主軸にもつ木棺墓である。墓壇の平面形は隅丸長方形に近いが、南側にむかって狭くなっている。南北4.7m、東西は北側で2m、南側で1.4m、深さは北側で45cm、南側で30cmを測る。二段に掘り込まれた墓壇の底に、木棺が納められたものと考えられる。棺の大きさ・構造については、土層断面観察から、長さ3m、幅55cmほどの組み合わせ式の箱形木棺であった可能性が高い。遺物は墓壇内から有袋状鉄斧が1点出土した。棺内から遺物は出土していない。

出土遺物は有袋状鉄斧（第16図右下）1点がある。長さ15.5cm、最大幅7cm、厚さ4.6cm、素材の厚さ6mm、重さ89gを測る。袋状内の装着部には、柄の木質部が明瞭に付着している。高木清生氏の分類^(註7)によると、II a-2類（無肩鉄斧で刃部幅が基部幅の2倍未満）に相当する。弥生時代からの系譜をひき、有袋状鉄斧では最も出土量の多いタイプである。

（4）8号墓

①墳形・規模・外表施設

5号墳頂部から下へ、約2.5mの段差をもつ位置に造られている。墳頂平坦部は南北7m、東西8mを測る台形である（第2図）。狭い平坦部ながら、南北方向に主軸をもつ埋葬施設が3基みつかった。地山削り出して盛土はないが、埋葬施設を被う土が薄く残存している。また、直線的な区画溝が5号墳との境に2条掘られ、そのうちの西側の溝は埋葬施設 ST08-1 で壊されている。

②埋葬施設と出土遺物

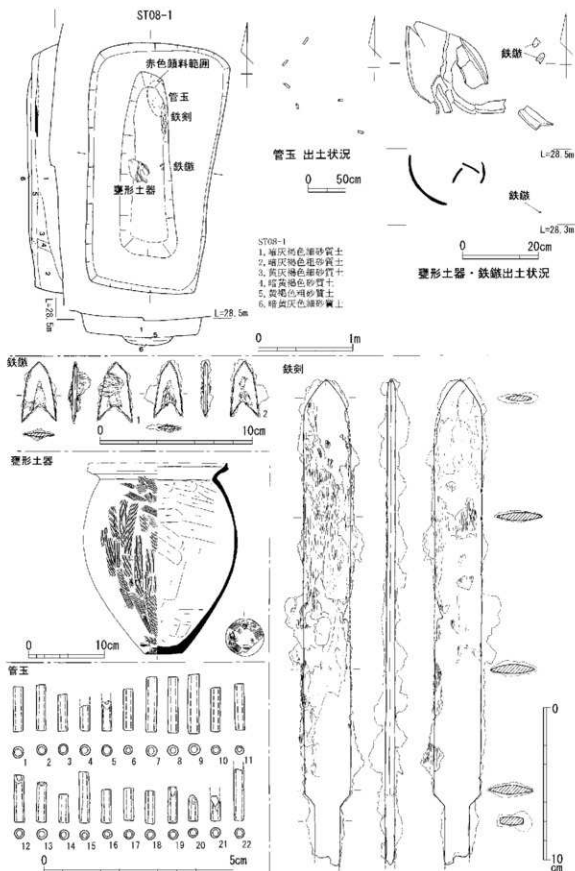
3基の埋葬施設（ST08-1・ST08-2・ST08-3）がある。出土遺物および土層の観察から、築造順は ST08-2 → ST08-3 → ST08-1 と考えられる。

埋葬施設 ST08-1（第17図）

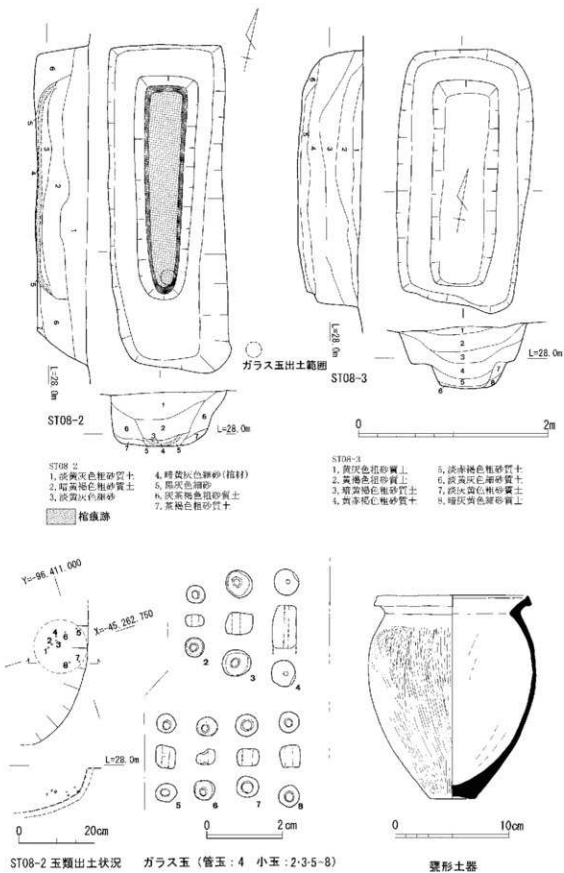
平坦部の最も東側、5号墳の裾部との境に設けられた埋葬施設である。長辺2.7m、短辺1.2～1.4m、深さ0.3mの大きさで、平面形は、北辺がやや広い隅丸長方形である。墓壇の浅さから、かなり削平が進んだものとみられる。棺の形態は掘形の幅が北側でやや狭くなるため、くり抜き形の舟底状木棺が納められていたと推察される。なお副葬された遺物のあり方から、頭位は北側と考えられる。

棺上から弥生土器の甕1個体と、棺内から鉄鏃2点、鉄剣1点、管玉22点がある（第17図下半）。鉄剣は切っ先を南に向け、その剣の茎部付近と一部重なる範囲から管玉が集中的に出土した。そして管玉と剣の上には少量ながら赤色顔料の散布が認められた。

出土遺物には、弥生土器甕、鉄鏃、鉄剣および管玉がある。第17図の弥生土器の甕は、口縁



第17図 8号墓埋葬施設ST08-1および遺物(鉄製品・環形土器・管玉)



第18図 8号墓埋葬施設ST08-2・3および遺物(ガラス玉・変形土器)

部径18cm、器高25.2cm、体部最大径20.5cm、底部径5cmを測る。釣鐘形の体部で、頸部～口縁部は「く」の字状、口縁端部は上方にやや拡張させている。調整は体部外面をハケ、内面をヘラケズリし、底部にも細かなハケメがみられる。

第17図の鉄鏃1と鉄鏃2は、無茎凹基式の三角形鏃で、逆刺の先端は鋭く尖り、鏃身とも鋭利で精美な仕上がりをみせる。類例として大宮町三坂神社墳墓群3・4号墓から出土したものがある。2点とも矢柄との装着部分に木質が残り、特に鉄鏃1は断面円形の矢柄が良好に観察される。さらに鉄鏃1の片面には棺材とみられる木質部が大きく付着している。鉄鏃1は長さ4cm、幅2.3cm、厚さ0.28cm、重さ5g、鉄鏃2は、長さ3.6cm、幅1.9cm、厚さ0.22cm、重さ3.4gを測る。剣は、茎の端部を欠く。残存長32cm、幅3cm、厚さ0.6cmで、剣身部の長さ27.8cm、胴から茎の残存長4.2cmである。鞘に納められていたため、両面に顕著な木質が付着している。

管玉は合計22点である(第17図左下)。緑色凝灰岩製で淡緑色を呈し、細身の繊細なものである。長さは0.74～1.4cm、径2.1～2.9mm、重さ0.06～0.11gを測る。穿孔は両面とみられるものが多いが、15・20・21は片面穿孔とみられる。

埋葬施設 ST08-2 (第18図左上)

3基ある埋葬施設の中央に位置する。長辺3.45m、短辺1.25m、深さ0.55mの方形である。墓壙の底には舟底状のくり抜き式木棺が納められ、長さ2.2m、幅0.2～0.4m、深さ20cmの残存値を測る。棺材の木質と土の置き換わった部分の厚さは約6cmである。棺内からはガラス製玉類8点がおおよそ直径20cmの範囲にまとまって出土した。頭位は南側であろう。

出土遺物には、ガラス製玉類8点がある(第18図2～8)。種類の内訳は管玉1点(4)、小玉7点(2・3・5～8)である。なお小玉の1点(1)は風化がすすんでおり、取り上げ時に粉化してしまったため図示できていない。7点はこれを含めた点数である。小玉はすべて淡青色、管玉は透明度の高い淡青緑色である。管玉は残存長さ1.1cm、直径6mm、重さ0.7g、小玉は高さ3～6mm、直径5～7mm、重さ0.09～0.44gを測る。

埋葬施設 ST08-3 (第18図右上)

3基並んだ西端に設けられた木棺墓。掘形の平面形は、長辺2.8m、短辺1.4m、深さ0.65mを測る隅丸方形で、南東隅がやや不整形に張り出す。棺痕跡は断面観察などから、くり抜き式の木棺であると判断した。墓壙内・棺外から弥生土器の細かな破片が散布したように出土し、破片の接合によりほぼ1個体の甕となった。墓壙内破砕土器供献の一例である。

出土遺物は、甕1点である(第18図右下)。端部をやや肥厚させて面を作り出した口縁部や、釣鐘形の体部をもつ。口縁部径13.2cm、器高17.9cm、体部最大径14.3cm、底部径4cmを測る。体部外面をハケ目、内面をヘラケズリ調整する。

(5) 9号墓

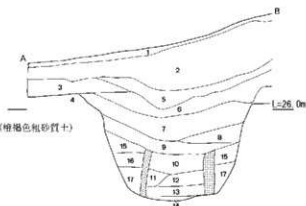
①墳形・規模・外表施設

今回の調査範囲で最も低位の尾根上にある。掘削前の地形から埋葬施設の有無を判断することはできない。尾根の上位から流れてきた土砂が約80cmの厚さで堆積しているが、墳丘は地山の

9号墓第1・第2主体部

ST09-1

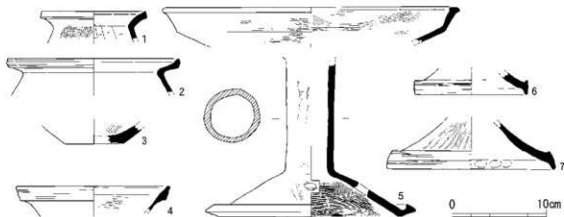
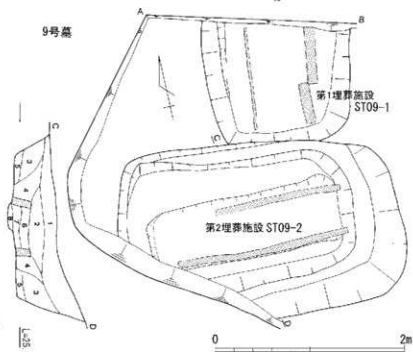
- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1. 黄土 (黒色腐植土) | 15. 灰褐色粗砂質土 |
| 2. 灰褐色粗砂質土 | 16. 暗褐色粗砂質土 |
| 3. 暗褐色粗砂質土 | 17. 暗褐色粗砂質土 |
| 4. 黒灰色粗砂質土 (地山) | (15~17は墓込め土) |
| 5. 黒色細砂質土 | スクリーントーンは樫材部 (暗褐色粗砂質土) |
| 6. 黄灰色粗砂質土 | |
| 7. 淡褐色粗砂質土 | |
| 8. 淡褐色粗砂 | |
| 9. 淡黄褐色粗砂質土 | |
| 10. 淡黄褐色粗砂 | |
| 11. 淡褐色粗砂 | |
| 12. 暗褐色粗砂 | |
| 13. 黄褐色粗砂質土 | |
| 14. 淡黄褐色粗砂質土 (10~14は棺内) | |



9号墓

ST09-2

- | |
|-------------------|
| 1. 暗褐色粗砂質土 |
| 2. 淡褐色粗砂質土 |
| 3. 黄褐色粗砂質土 |
| 4. 灰褐色粗砂質土 (墓込め土) |
| 5. 淡褐色粗砂質土 |
| 6. 淡褐色粗砂質土 |
| 7. 淡褐色粗砂質土 |
| 8. 淡褐色粗砂質土 |
- スクリーントーンは樫材部 (暗褐色粗砂質土)



第19図 9号墳埋葬施設ST09-1・2平・断面図と出土土器

削り出しにより整形され盛土は施されない。墳頂平坦部の規模・形状は南北6m、東西4mの台形と推測される(第2図)。また、8号墓との境界を示す区画溝が1条掘られている。溝の規模は長さ3.5m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。

②埋葬施設と出土遺物

主軸方向を南北にとるST09-1と東西とするST09-2の2基がある。

埋葬施設ST09-1(第19図上)

墓壇規模は調査区北壁より全体規模は不明であるが、長辺1.3m以上、短辺1.55m、深さ1mを測る。墓壇の底に、組み合わせ式の箱形木棺が納められていたと考えられる。東辺の木棺痕跡が中間部で断裂しているのが観察された。棺材の厚さは東側板でみると約10cmと厚く、立ち上がりは50cmを測る。棺内からの出土遺物はないが、墓壇中から弥生土器の破片が出土した。墓壇内破砕土器供献とみられ、土器の器種は甕、器台、高杯である(第19図下)。

出土遺物は弥生土器7点である。第19図1は、くの字形口縁で端部に面をもつ小型の甕である。2は、くの字口縁の端部を上へ拡張し、端面に2条の凹線をとどめている。3は甕の底部である。4は器台の口縁部で、拡張させた端面に擬凹線が施されている。5は杯部と脚注部に接点はないが、2点が近接して出土したことから同一個体とみる。口縁部径30cm、脚柱部径5.3cm、底径19.3cmを測る。暗赤褐色の精良な胎土である。弥生時代後期(第V様式中葉)の京丹後市丹後町大山墳墓群に類例がある。6・7は内面にわずかにケズリの痕跡がみとめられることから器台の脚部とした。弥生時代後期中葉の時期を示す一群である。

埋葬施設ST09-2(第19図上)

墓壇規模は長辺3.1m、短辺1.9m、深さ0.5mを測る。墓壇の底に組み合わせ式の木棺が納められたとみられる。棺痕跡の立ち上がりは20cmで、長辺1.8m、短辺0.6mである。棺内から遺物は出土しなかったが、墓壇内から弥生土器の細片がわずかに出土した。

6、まとめ

今回の調査により、茶臼ヶ岳5号墳をはきんで、高所に古墳2基(6・7号墳)、低所に弥生時代台状墓2基(8・9号墓)が新たにみつきり、さらに平安時代の経塚1基の存在も明らかとなった。

茶臼ヶ岳5・6・7号墳からは木棺を納めた埋葬施設が5号墳から2基(くり抜き式の舟底状木棺)、6号墳と7号墳から各1基(組み合わせ式の箱形木棺)みつかった。5号墳では、埋葬施設ST05-1に接して2基の土器棺墓も検出している。墓壇および棺内から遺物が出土したのは、7号墳と6号墳だけで、6号墳では破損したヤリガンナとみられる鉄製品1点が棺内から、7号墳では有袋状鉄斧1点が墓壇内から出土した。墓壇・棺内からの遺物が少ない反面、墓壇周縁部で、破砕土器供献が5号墳第2埋葬施設と6号墳の墳頂部東側の土器溜まりなどで確認された。6号墳の土器溜りは10個体におよぶ多量の土器破砕供献である。5号墳と6号墳のように、棺内の副葬品を極端に少なくする反面、墓壇上やその周縁での儀礼を重視する傾向は、古墳時代

前期中頃の奈良古墳群(弥生町)でも確認されている^(註9)。破砕供献の土師器類の形態(布留Ⅰ～Ⅱ式)から、5・6・7号墳は古墳時代前期前半(4世紀前半)に築かれたといえる。

弥生時代台状墓の8号墓と9号墓は、8号墓から3基の埋葬施設、9号墓から2基の埋葬施設がみつかった。8号墓の3基はくり抜き式木棺、9号墓の2基は組み合わせ式の箱形木棺であった。8号墓の埋葬施設ST08-1の棺内外からは、比較的豊富な遺物・副葬品が出土した。弥生時代後期中葉とみられる甕が棺上から、鉄剣・鉄鎌・管玉が棺内から出土した。

また8号墳埋葬施設ST08-2の棺内からはガラス玉類が出土した。しかし、8号墓埋葬施設ST08-3および9号墓の2基の埋葬施設については、棺内に遺物を入れず、墓室内破砕土器供献のみられた。丹後・但馬地方における当該期の埋葬施設の多くにみられる事象である。8号墓と9号墓の築造年代は、出土遺物からほぼ弥生時代後期中葉としておきたい。なお、舟底状木棺としては数少ない古い事例となる。

経塚は、構造を示す石室はほとんど全壊しているが、埋納された須恵器壺と土師器質の筒形外容器の残りは良好であった。近隣では多数の経塚を出した久美浜町佐濃谷川流域の豊谷経塚(平安時代末から鎌倉時代)がある^(註10)。この豊谷経塚から、最初に掘られた主土坑と、これに付随し横穴、石組などを設けるために掘られた埋納土坑との区別のない形態のものが検出されている。今回の経塚に類似する形態で、このことから本経塚もほぼ同時期としておきたい。なお、本経塚の墳墓としての可能性については、火葬骨の残存がまったくないこと、埋葬空間をもつ墳墓としては覆土があまりにも薄いことなどから疑問がある。

今回の調査でみつかった弥生時代後期から古墳時代前期の台状墓と古墳、さらに平安時代末から鎌倉時代の経塚は、当地域における歴史を考古学的に研究するための貴重な資料となった。今後とも周辺におけるさまざまな遺跡の調査に期待したい。

注1 京都府教育委員会編「3埋蔵文化財包蔵地地名表(1)久美浜町」(「京都府遺跡地図」第3版第1分冊)8頁)2001

注2 作業員 岡田道彦 小森明美 佐々木司郎 多田定子 田中忠男 田中靖彦 田中富男 辻岩男 壺昌子 寺田範明 西田けい子 松田久美子 保田広美 吉谷千秋
調査補助員・整理員 奥田栄吉 岡田代志乃 中島恵美子、川村真由美

注3 肥後弘幸「墓室内破砕土器供献—北近畿弥生墳墓土器供献の一樣相—」(「みずは12・13号」大和弥生文化の会)1994、松井敬子「破砕土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—」(但馬考古学6)但馬考古学研究会 1991などに詳しい。

注4 田代弘「9.北谷古墳群」(「京都府遺跡調査概報 第65冊」106頁(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1995

注5 石崎善久「舟底状木棺考—丹後の剥抜き式木棺—」(「京都府埋蔵文化財論集 第4集—創立二十周年記念誌」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2001

京丹後市久美浜町内では南谷1号墳の埋葬施設で確認されている。

石尾政信「南谷古墳群」(「京都府遺跡調査概報 第89冊」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1998

- 注6 森島康雄・村田和弘「天王山古墳群B支群1号墳経塚」(「京都府埋蔵文化財情報 第91号」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004
- 注7 高木清生「第2節 古墳出土の有袋鉄斧-無肩鉄斧の型式を中心に-」(「白米山西古墳群発掘調査報告書 奈良女子大学考古学研究報告1」奈良女子大学文学部)2000
- 注8 肥後弘幸・橋本勝行・今田昇一他「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群」(「京都府大宮町文化財調査報告書 第14集」大宮町教育委員会)1998
- 注9 河野一隆「2. 奈具墳墓群・奈具古墳群」(「京都府遺跡調査概報第65冊」)37頁 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1995
- 注10 肥後弘幸「(3) 豊谷経塚」(「埋蔵文化財発掘調査概報1992」京都府教育委員会)1992

2. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成 19 年度発掘調査報告

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、独立行政法人都市再生機構の依頼を受けて、昭和 59 年度以来（当時は住宅・都市整備公団）継続して実施しているものである。平成 19 年度は、鹿背山瓦窯跡・馬場南遺跡の 2 遺跡について発掘調査を実施した。

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。過去、丘陵上で耕作中に焼土が検出され、重圓文軒丸瓦と重郭文軒平瓦も採集されていたことから、瓦窯跡の存在が推定されていた^(注1)。鹿背山瓦窯跡の発掘調査は平成 18 年度に試掘調査を実施し、丘陵南側斜面から瓦窯跡 2 基、窯跡下の水田部から灰原、丘陵上で柱穴等の遺構を検出した^(注2)。

今年度は、丘陵部平坦面で検出した柱穴等の遺構が、瓦窯に関連した工房跡であることが予想されるため、丘陵上の平坦地を対象として面的な調査を実施した。現地調査は、平成 19 年 4 月 24 日～平成 20 年 2 月 26 日までの期間で実施した。調査面積は約 4,800㎡である。

馬場南遺跡は、京都府木津川市木津糠田に所在する。馬場南遺跡は、過去の分布調査で丘陵斜面と谷部（水田）周辺から奈良時代の須恵器や土師器が採集され、窯跡存在の可能性が考えられていた遺跡である^(注3)。今回の発掘調査は、遺跡の性格や範囲の確認、遺構や遺物の状況把握を目的として実施したトレンチによる試掘調査である。現地調査は、平成 19 年 10 月 9 日～平成 20 年 2 月 22 日までの期間で実施した。調査面積は約 1,800㎡である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第 2 課調査第 3 係長石井清司、同主任調査員引原茂治・竹原一彦・岩松 保・森島康雄、同専門調査員石尾政信、同主査調査員柴 暁彦、調査員村田和弘が担当した。発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力^(注4)をいただいた。本報告は、竹原と柴のほか、渡辺理気（奈良大学大学院卒）、大谷博則（奈良大学大学院）が分担して執筆した。なお、報告図面に使用している座標は、世界測地系座標である。

調査期間中は、京都府教育委員会・木津川市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所などの関係諸機関、網 伸也氏、上原真人氏、大脇 潔氏、奥村茂樹氏、小澤 毅氏、金子裕之氏、高 正龍氏、狭山真一氏、鵜柄俊夫氏、巽淳一郎氏、坪井清足氏、中井 公氏、西崎卓哉氏、林 正憲氏、菱田哲郎氏、藤原 学氏、藪中五百樹氏、山本清一氏からご教示・ご協力をいただいた。

なお、調査にかかる経費は、全額、独立行政法人都市再生機構が負担した。

（竹原一彦）

位置と環境

木津川市は、京都盆地の最南端に位置する。京都盆地は旧巨椋池を境に京都市域を中心とする北山城と南に位置する南山城に区分することができる。南山城地域は南北約14km・東西約2～3kmの狭長な地形で、その中央には木津川が流れている。木津川は、三重県布引山地を源流とし、西流して南山城地域南部の木津川市木津付近で流れを北に転じ、大山崎町で宇治川・桂川と合流し、淀川となり大阪湾に注ぐ。木津平野では井関川・鹿川・山松川・山田川など木津川の支流があり、これらの河川によって沖積平野を形成している。盆地の周囲には、標高100m前後を最高所とする丘陵地形がみられる。

木津平野とその周辺部では古くから人々の活発な生活が営まれ、平野や丘陵上に数多くの遺跡が存在している。

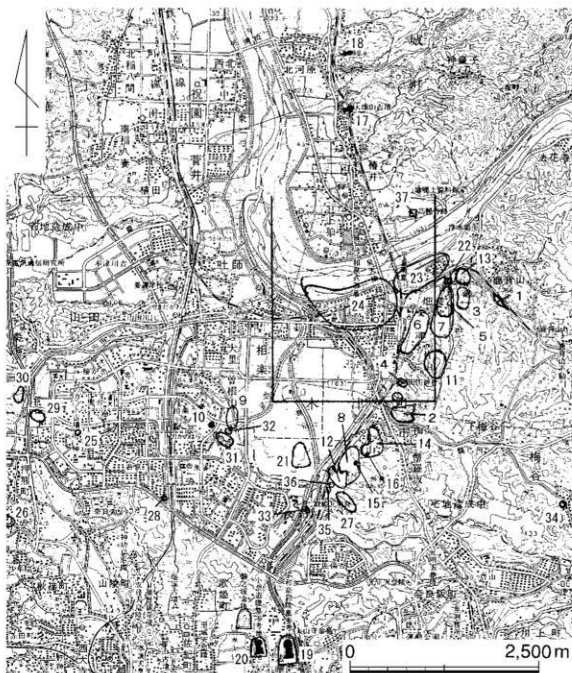
旧石器時代では、東側丘陵に岡田国遺跡の1例が知られる。遺跡はJR木津駅の南方に位置し、木津川市域における最古のサヌカイト製彫器が出土している。

縄文時代では、木津平野の東側丘陵に後期から晩期にかけて遺跡が形成される。同丘陵北部では燈籠寺遺跡・片山遺跡・内田山遺跡が知られ、土器・石器などの遺物が出土している。内田山遺跡では落し穴遺構が検出されている。晩期では、同丘陵の南方に位置する瓦谷遺跡で土壙墓が検出されている。

弥生時代では、木津平野の西側丘陵に扁平鈕式袈裟文銅鐸出土地として知られる相楽山遺跡と、その母村と考えられる大畠遺跡（中期）が存在する。東側丘陵上には赤ヶ平遺跡（前・中期）・燈籠寺遺跡（中・後期）・木津城山遺跡（後期）・内田山遺跡（後期）・上人ヶ平遺跡（後期）・西山遺跡（後期）などが知られる。なお、各遺跡と平野部との比高差はおおむね20m前後であるが、木津城山遺跡のみは比高差約70mを測る。東側丘陵裾から平野部にかけて片山遺跡（後期）・白口遺跡（後期）などの集落遺跡が分布する。

古墳時代では、前期に木津川を挟んだ対岸の木津川市山城町で椿井大塚山古墳（全長約175m）・平尾城山古墳（全長約110m）などの大型前方後円墳が築造される。前期から中期にかけて、奈良山丘陵の南側では佐紀陵山古墳（全長約207m）・ウナバ古墳（全長約255m）・コナバ古墳（全長約204m）に代表される大型前方後円墳で構成される佐紀盾列古墳群が存在する。木津平野では、前期後半に、前方後円墳である瓦谷1号墳（全長約51m）が築造される。以後、中期から後期にかけて、瓦谷古墳群・内田山古墳群・上人ヶ平古墳群・西山塚古墳などに代表される中小規模の古墳群が順次築造される。この他、同丘陵部に瓦谷墳輪窓跡群・上人ヶ平墳輪窓跡群が築造される。古墳時代の集落はこれまでほとんど確認されていないが、後期の集落跡として弓田遺跡が知られる。

奈良時代では、平城宮・京に近い関係から多くの同時期の遺跡が集中する。また、市域東部の瓶原の地には短期間ではあるが慈仁宮が造営され、木津平野の北東部が京城（右京）に含まれる。木津平野は都と諸国を結ぶ交通の要衝の地でもり、平城京から奈良山を越え、南山城の地を四通八達して北陸・東山・東海・山陰・山陽を結ぶ古道や、水運の要でもある泉津などが知られる。



1. 鹿背山瓦窯 2. 馬場南(文廻池)遺跡 3. 赤ヶ平遺跡 4. 岡田園遺跡 5. 灯籠寺遺跡
6. 片山遺跡 7. 内田山遺跡・内田山古墳群 8. 瓦谷遺跡・古墳群・埴輪群 9. 大畠遺跡
10. 相楽山遺跡 11. 木津城山遺跡 12. 上人ヶ平遺跡・古墳群・埴輪密跡群 13. 白口遺跡
14. 西山遺跡 15. 瓦谷1号墳 16. 西山塚古墳 17. 椿井大塚山古墳 18. 平尾城山古墳
19. ウナバベ古墳 20. コナベ古墳 21. 弓田遺跡 22. 燈籠寺廃寺 23. 上津遺跡 24. 木津遺跡
25. 石のカラト古墳 26. 中山瓦窯跡 27. 瀬後谷瓦窯跡 28. 山稜瓦窯跡 29. 押熊瓦窯跡
30. 乾谷瓦窯跡 31. 歌姫西瓦窯跡 32. 音如ヶ谷瓦窯跡 33. 歌姫瓦窯跡 34. 梅谷瓦窯跡
35. 五領池東瓦窯跡 36. 市坂瓦窯跡 37. 高麗寺

第1図 調査地位置図
(国土地理院「奈良」1/50,000に加筆)

奈良時代の遺跡としては、特に、奈良山丘陵から東側の丘陵にかけて、瓦窯跡や瓦工房跡などが多数分布し、奈良山瓦窯跡群として知られるところである。同瓦窯跡群は、当初、平城京の北側奈良山丘陵に築窯されたようで、中山瓦窯跡・歌姫西瓦窯跡・山陵瓦窯跡などが知られる。以後、時期が下がるにしたがって瓦窯跡は次第に東へと移り、木津平野の東側丘陵部に築窯されていく。東側丘陵では、平城宮・京に供給した瀬後谷瓦窯跡・市坂瓦窯跡、興福寺に供給した梅谷瓦窯跡、法華寺に供給した音如ヶ谷瓦窯跡・五領池東瓦窯跡などが知られる。音如ヶ谷瓦窯跡では、最古の有牀式^{ゆうせきしき}平窯が検出されている。瓦工房跡では、市坂瓦窯跡の北東側に隣接する上人ヶ平遺跡が知られており、市坂瓦窯跡で焼成される瓦を製作していた。

木津川市域では、白鳳期創建の古代寺院として高麗寺跡・蟹満寺の2寺が知られる。法起寺式の伽藍配置である高麗寺跡は、大きく蛇行する木津川の北岸河岸段丘上に立地する。また、市域北部にやや離れて蟹満寺が所在する。多種多様な遺跡が多数存在する木津平野とその周辺部は、弥生時代から古墳時代にかけては大和と地方を、奈良時代は都と諸国を結ぶ交通路の要衝であり、古代より人々の活動が盛んな地であったことを物語っている。

(大谷博則・竹原一彦)

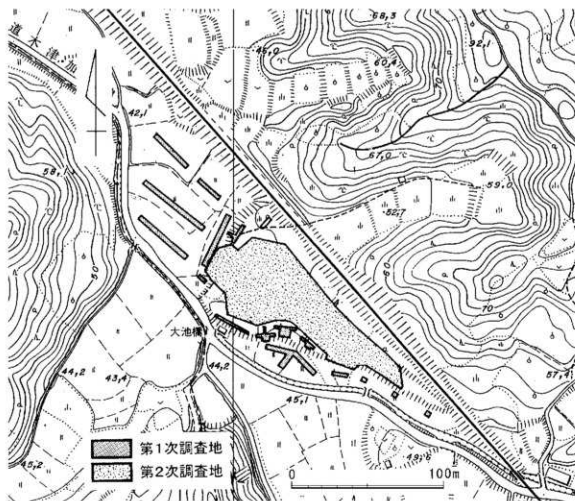
(1) 鹿背山瓦窯跡第2次調査

1. はじめに

鹿背山瓦窯跡は、京都府木津川市鹿背山須原に所在する。瓦窯跡は、木津川の支流である大井手川右岸の合流部から約800m遡った右岸丘陵部にあり、大井手川によって南東から北西方向に開析された狭長な谷筋の低い舌状台地上に存在する。当該地は、平城宮・平城京などの瓦を焼いた官窯が密集する奈良山丘陵のなかでも、最も北東端に位置する。鹿背山瓦窯跡は、過去に丘陵部から重圏文軒丸瓦や焼土塊が採取されたことから、瓦窯跡の存在が推定されていたところである。

鹿背山瓦窯跡の本格的な発掘調査は、当センターが実施した平成18年度試掘調査(第1次調査)に始まる。この試掘調査では、JR西日本軌道敷地以南の丘陵部に11か所、丘陵裾と大井手川間の水田部11か所、合計22か所の試掘トレンチを設けて調査を行った。調査の結果、丘陵南側斜面から1号窯・2号窯の2基の瓦窯を検出したほか、窯跡下部の水田下で多量の瓦が堆積する灰原の存在を確認した。一方、丘陵西裾では、大井手川の氾濫原や湿地堆積を確認したほか、丘陵裾の平坦地では中世土器を含む包含層や溝・柱穴を僅かに検出した。丘陵上のトレンチでは、埋没した谷地形や奈良時代の土器や瓦を含む遺物包含層を検出したほか、小規模な柱穴の存在を確認した。なお、2基の瓦窯は上面での平面輪郭のみの調査にとどめ、窯体内の構造等を確認するための調査は実施していない。

今年度の発掘調査は鹿背山瓦窯跡の第2次調査として、丘陵上で瓦窯関連の遺構の検出を目的に丘陵上を調査の対象とした。発掘調査では、表土層の除去には重機を使用した。その後の遺構



第2図 トレンチ配置図

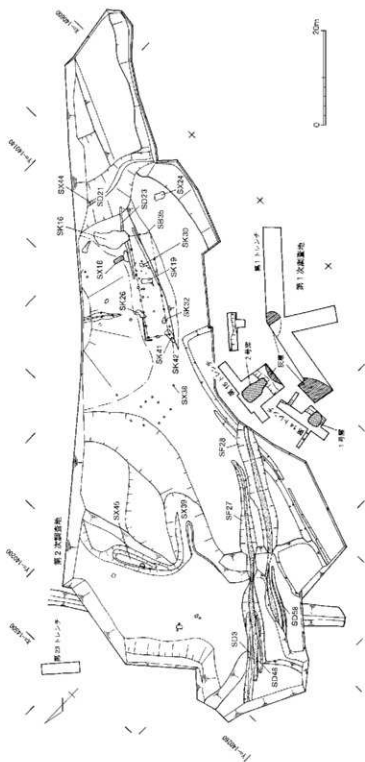
検出と遺構内の調査では、人力による掘削作業を行った。

2. 調査概要

第2次調査の対象地は、北東から南西方向に向かって緩やかに舌状に張り出す2本の丘陵にまたがり、北東側はJR西日本大和路線（関西本線）敷地境界によって区画されている。今回の調査で検出した主要な遺構は、この2本の尾根のうち規模の大きな南側尾根に分布していた。一方の北側尾根は痩せ尾根であり、顕著な遺構は検出できなかった。調査対象地の地山層は、川原石による砂礫や砂・粘土が堆積した大阪層群で、比較的軟弱な地盤である。

今回の調査では、南側尾根の東部から、遺跡の東側を区画する大溝（SD 21）を検出した。また、この大溝の西側から掘立柱建物跡（SB 35）1棟・土坑（SK 16・19・26・30・40・41）・溝（SD 23）の他、平安時代の古墓（SX 18）1基と江戸時代の火葬墓（SX 24）1基を検出した。丘陵の西部では、通路遺構（SF 27・28）や粘土探掘遺構（SX 39・SK 45）などのほか、中世以降に土砂の堆積が進んだ谷地形を検出した。以下、検出した主要遺構・主要遺物について報告する。

(1) 遺構



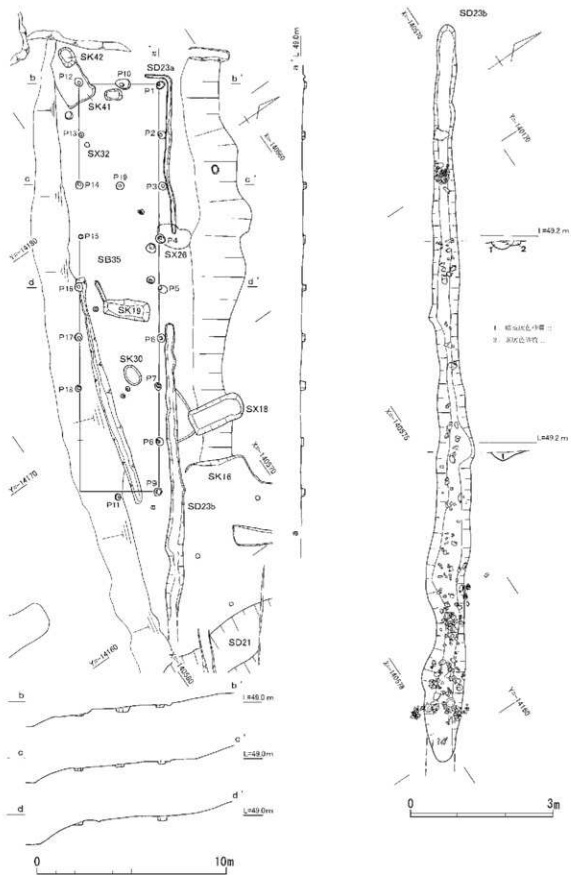
第3図 鹿背山瓦窯跡検出遺構図

①建物関連遺構 掘立柱建物跡1棟と溝を検出した。

掘立柱建物跡S B 35(第4図) 2号窯の東側丘陵上から検出した掘立柱建物跡である。丘陵南側斜面部で検出した2号窯とは、およそ20m離れた位置関係にある。南に緩やかに下がる丘陵尾根の南東斜面は、ほぼ建物跡S B 35が取まる範囲で一回り大きい平地を削り出し、その場にS B 35が建てられている。S B 35は、東西の桁行が8間(全長約21.6m)、南北方向の梁間2間(幅約4.5m)の規模を測り、建物軸は北から西に約35°振っている。建物跡の南側桁行柱列では、南東隅とその西側の柱穴2か所が既に後世の削平で失われている。柱穴掘形は円形を呈し、直径は0.3~0.5mを測る。柱穴掘形の深さは、多くの柱穴が検出面から0.25m前後と浅い。柱穴掘形の底面は、全体的に北東側桁行柱穴が南西側より標高が高い位置に

ある。各柱穴掘形の深さに極端な差が認められないことから、建物の立地する平地は水平ではなく、もともと南側に下がる傾斜があったと推測される。

S B 35における柱穴の心々間は、桁行がほぼ9尺(2.7m)の等間隔を測るが、梁間は4.2~4.3mを測るもので、片流れの屋根であったとも考えられる。建物内部では、柱穴P 3とP 14を



第4図 掘立柱建物跡SB35、SD23実測図

結ぶ中間地点に柱穴P 19が存在する。また、柱穴P 7とP 18を結ぶ中間付近にも、P 25とP 26の2基の柱穴が存在する。柱穴のP 19とP 25・26は、ともに東西の妻側から2目目の柱筋と、棟柱であるP 10とP 11を結ぶ交差点に位置している。SB 35は桁行の長い建物でもあり、P 19とP 25・26は建物内の棟柱と考えられるが、建物内の区画を意図した柱の可能性も残る。柱穴P 25とP 26は、近接する位置関係や規模が同じ状況から、建物の改修に伴う柱の建替えとみられるが、柱穴の先後関係は不明である。

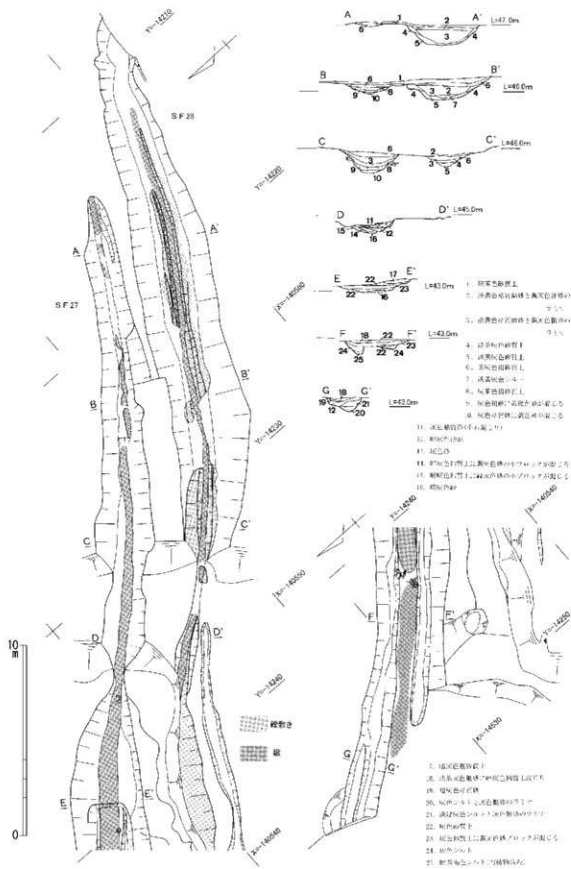
検出したSB 35の柱穴の深さが浅い状況は、遺構面が後世に削平された可能性も考えられる。SB 35は規模の割に柱穴内の柱痕跡の直径がいずれも0.2mを越えず、細い柱が使用されている。このような状況から、SB 35は、規模や形状から瓦の整形や乾燥の場として使用された素素な建物跡の可能性が高い。

柱穴に伴う遺物は少なく、掘形内から須恵器の破片が出土したが量的には僅かである。

溝SD 23 (第4図) 掘立柱建物跡SB 35に沿う状況で検出した、L字に屈曲する素掘り溝である。この建物北東側のSD 23は、建物中央付近で一旦溝が途切れる状況にあるが、約28mにわたって溝を検出した。SD 23の東端はSB 35の東妻部を越えて直線的にSD 21に注いでいる。建物の西妻側は、建物跡北隅の柱穴P 1北側を屈曲点として南西方向に約1.2m延びた後、後世の削平でその先は失われている。溝は幅約0.2～0.3m、深さは0.1m前後を測る。SD 23は、SB 35に対してほとんど距離をとることがなく、近接して存在している。SD 23と建物柱穴柱当たりの心々間は、平均で約0.3mの距離を測る。SD 23はSB 35の雨落ち溝と考えられるが、特に桁行側の柱穴と溝間の間隔が狭く、この場合、建物の軒の張り出しが僅かしか得られない。また、建物南西側には雨落ち溝が確認できない。このような状況からみて、SD 23は建物に付属する雨落ち溝とみるよりも、上方丘陵斜面からの雨水がSB 35に入るのを防ぎ、SD 21へ排水する排水溝としての役割が主目的と考えられる。建物北東側のSD 23は、SB 35の柱穴P 3から柱穴P 4にかけてやや外側に膨らみ、ほぼ建物の中央付近となる柱穴P 4から柱穴P 6にかけて一旦途切れている。この部分では溝底が緩やかに上がっていく状況から、後世の削平で高所部分が失われたとみられる。SD 23は丘陵側の雨水を排水するには規模があまりにも小さく、排水機能も貧弱であることから、当初は現状より規模が大きかったとみられる。SB 35とSD 23を検出した地山面は、瓦窯廃絶後に削平された可能性が高い。

SD 23溝内から、須恵器(第14図1-36)・平瓦・丸瓦の破片や鉄製刀子(第25図249)が出土した。遺物の大半は、SB 35の南東側に位置する柱穴P 6付近からSD 21にかけて集中している。

②**通路遺構**(第5図) 丘陵の南西部から、2本の平行する通路跡SF 27とSF 28を検出した。SF 27とSF 28は、第1次調査で検出していた丘陵西側の平地と、建物跡(SB 35)や窯跡(1号窯・2号窯)の存在する丘陵上を結んでいる。2本の通路は、丘陵斜面部を大規模に削り下げ、底面には石敷きを施している。なお、この通路遺構の西裾部は通路が機能停止したのち、大井手川の土砂が堆積していた。通路遺構の西側には平坦部が存在し、平安時代から鎌倉時代に属する



第5図 通路遺構 S F 27・S F 28 実測図

溝SD3や柱穴等を確認していることから、何らかの利用が行われたと思われるが、その性格については明らかでない。

通路遺構SF 27 2本の通路のうち北側のSF 27は、丘陵部で上面幅約3m、深さ約1mの規模で切り通して整形している。底部には石敷きによって路面を整形し、一部では石敷きの両側に溝を設けている。SF 27の東端部は丘陵上の平坦地中程で終わっている。検出したSF 27は全長約48mを測るが、通路を更に東に延長すると建物跡SB 35が存在する。SF 27の東端からSB 35まで約25mの距離を測るが、SF 27の方向性や周辺の状況等から、SF 27はSB 35付近まで延びていたことも考えられる。

SF 27の西端は、丘陵北部を北東から南西に延びる谷の開口部を介して、丘陵西裾の平坦地につながり、谷口部の平坦地で通路の両側に側溝(SD3・SD 48)を設けている。側溝間の通路面は0.9m前後を測り、路面西端部の石敷きは細かな石が使用されるが、丘陵西裾の平坦地に達したところで石敷きが終わっている。

溝SD3は検出長約24mを測る通路の北側側溝であり、その西端は第1次調査の第6トレンチから更に西方に延びる状況にある。第6トレンチの西には大井手川の氾濫原が存在し、雨水を排水したと考えられる。SD3の溝底は西に向かうほど深さを増し、第6トレンチ西端では溝幅1.3m、深さ約1mを測る。南側溝であるSD 48は、全長約13m、幅約0.8m、深さは0.2m前後で浅い。

SD 48の西端部は丘陵西裾に達した地点で終わり、平坦地を越えてさらに西方の氾濫原に達する状況にはない。SD 48の西端から約8m南東の地点は、SF 27の路面傾斜の変換点にあたり、それより西側は路面がほぼ水平になる。同一地点のSF 27の路面はちょうど0.6mの幅で石敷きが途切れ、路面部が窪んだ状況が認められる。この窪みはSD3とSD 48を結ぶ状況から、SD 48を溢れた雨水は窪みを経由してSD3に流れていたようである。

SF 27は、SF 28と同様に通路部分底面に小石が敷詰められており、石敷きの中央部が幅約0.3～0.4mの範囲で特に硬く踏み固められて凹み状となっている。この石敷きの硬化部分は周辺部の小石に比べて小さな小石が多く、石敷き面は平坦で硬く締り、あたかもタイル張りに近い様相を呈している。この石敷きの硬化部分については、一輪の荷車等の輓跡と考えられた。この石敷きの小石は、丘陵を形成する大阪層群中に同種の礫層の堆積があることから、通路の掘削に伴って得られた小石を利用しているようである。

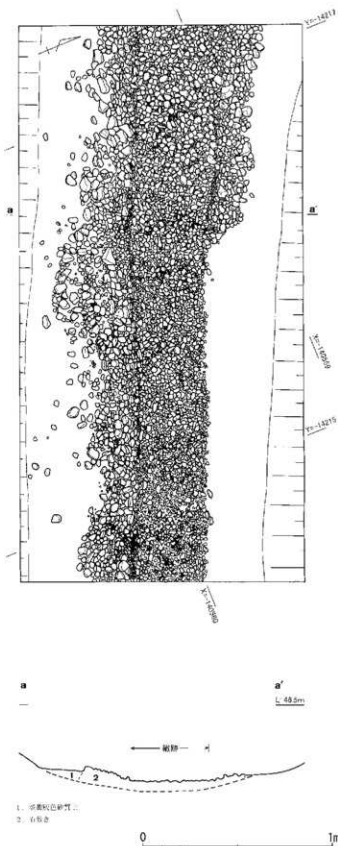
SF 27の西部は谷部を横断することから、西半部の傾斜も丘陵部に比べ緩やかになる。この西部付近では路面上の土砂の堆積が顕著であったとみられ、第5図D-D'断面付近では輓路面の上に0.5m程土砂が堆積し、その上面に再度石敷きを行って通路を作り直している(下層通路SF 27 a・上層通路SF 27 b)。この嵩が上がったSF 27 bの通路は、西部の大半が平安時代末から鎌倉時代頃に造成された谷部平坦地の拡幅に伴い、大規模に削平されている。路面が作り直されたSF 27の西端部は、第5図D-D'以西の状況については不明な点が多いが、路面傾斜はSF 27 aに比べて緩やかになったとみられる。

S F 27 の堆積土の中層（第5図8・9層）から、多量の瓦に混じって須臾器（第14・15図37～57）・鉄製刀子（第25図250）などの遺物が出土した。瓦には軒丸瓦（第23図235・236）も含まれたが、平瓦と丸瓦の破片が大多数を占め、出土量は整理コンテナ20箱を超える。

通路遺構 S F 28 S F 27 の南側を蛇行しながら並走する通路遺構で S F 27 と S F 28 の心々間距離は約4 mを測る。西側丘陵裾部分を後世の削平で壊されているが、長さにおいて約34 mの範囲を検出した。S F 28 の東端部は調査トレンチ外に延びるが、東側に約4 m離れて2号室が存在することから、S F 28 の東端は2号室の手前で終わるものと考えられる。

S F 28 の西部は後世の削平により西端部の状況は不明である。S F 28 の西部では、谷の口付近の南側斜面部に沿って南西方向に延びる状況にあり、通路の斜面部を覆う石敷きを検出されている。S F 28 の西半部では路面は失われているが、通路は谷の南斜面に沿って丘陵西裾の平坦地に達していると考えられる。

路面の石敷きは、S F 27 より S F 28 のほうが格段に良い遺存状況にある。S F 28 の東部で路面の石敷きを部分的に図化（第6図）した。第6図にみる石敷きは、北東側（右



第6図 S F 28 石敷き実測図実測図

下)のラインが整った直線を示す。石敷き中央にはS F 27と同様に、幅35cm、深さ6cmの1条の凹みが平行して存在する。S F 27と同様に、この凹みは一輪車による轍の痕跡と思われる。轍の両側は石敷きが盛り上がるが、個々の石は簡単に剥がれる状況にあり、密着してはいない。S F 28の西側下方では、轍と石敷きとの高低差が15cmを越える地点も存在する。

通路の形状を最もよく残すS F 28は、上面最大幅約4m、深さ約1.1mを測る。横断面がU字形で、大規模に丘陵地山を掘り下げて切り通し状を呈している。

規模・形状が似かよるS F 27とS F 28は、唯一、路面の傾斜角度が大きく異なっている。北側のS F 27(第5図B-C間)の路面傾斜角は約9°であり、南側のS F 28(第5図B-C間)では約4°を測る。路面の傾斜角はS F 27は急勾配であるが、S F 28は逆に緩い勾配に仕上げられている。この路面傾斜が異なる状況は、物資の輸送や通行に関連して、S F 27とS F 28の使用状況が異なることに起因するのかもしれない。急勾配のS F 27は軽量物を、緩い勾配のS F 28は重量物の運搬に使用された可能性もある。

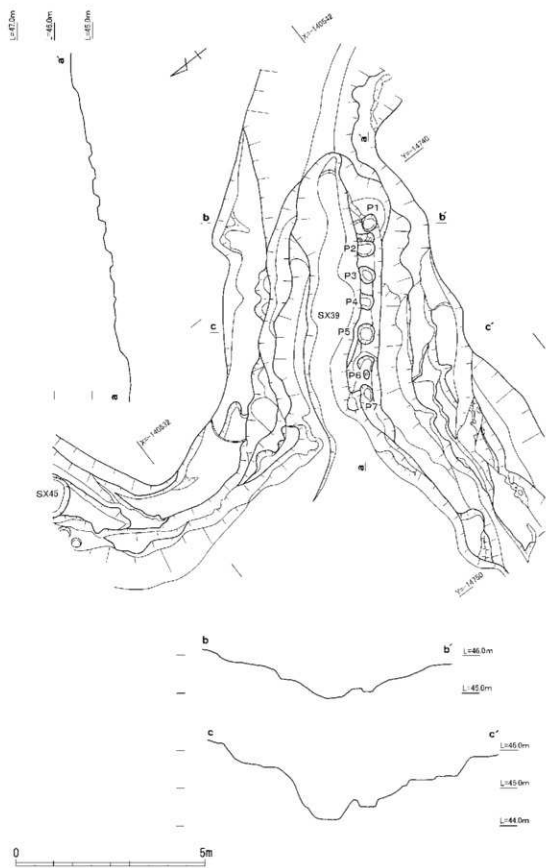
溝S D 58 S F 28では、第5図D-D'付近以西の南側路肩斜面に石敷きが存在し、その南側に近接して浅い溝S D 58が併走している。S D 58は幅約0.5～0.8m、深さ約0.05mで、検出全長は約14mを測る。溝底には顕著な石敷きが存在しないことや、S F 28との並走関係等からみて、S F 28に付属する排水溝の可能性が高い。ただ、S F 28のC-D間での路面の方向性が素直に続く状況は、S D 58がS F 28の旧路面とみることも可能である。

③粘土採掘穴遺構 丘陵の西部には、北東から南西方向に延びる小規模な谷地形(上端幅約20m)が存在している。この谷の東側斜面の調査において、粘土層・砂層・砂礫層の路頭面がみられた。これら地層は一般的に大阪層群と呼ばれる比較的軟弱な地質である。標高46m付近に2～10cm大の丸みを帯びた小石が約0.3mの厚さで堆積し、その下に黄色身を帯びた灰白色の粘土層が堆積する。粘土層の厚さは斜面の路頭で最大約1m前後(S X 39)を測る。この灰白色の粘土を採掘し、混和材を加えて生瓦を整形した可能性が考えられる。

S X 39(第7図) 通路S F 27から北東側に約10m離れた谷の東側斜面から、粘土採掘場とみる幅約10m、奥行き約12mの大規模な切り通し状の凹みS X 39を検出した。

S X 39は、粘土の露頭する谷斜面を逆漏斗形に南東方向に掘り進めている。北西側開口部の丘陵上からの深さは、底部まで約2mを測る。底面には硬い緑灰色の粗砂が広がり、粘土層は無くなっている。調査に伴って埋土の掘削を進めた結果、S X 39の両斜面には丘陵上部から中央底にかけて階段状に下る小さな平坦面が存在した。粘土中には薄い細かな砂層が存在し、その砂層によって水平方向の粘土の摂理が確認された。このような斜面部の階段状に残る粘土面の状況は、粘土採掘の際に摂理に沿った採掘を行っていたことを示している。粘土面での精査では採掘工具の痕跡は確認できなかった。

S X 39の南西側面には、0.4～0.5m幅で西から東方向に緩やかに上る粘土の摂理面がみられ、0.3～0.5mの間隔をあけて小規模なピット列(断面図a-a')が存在する。各ピットは直径0.5m前後、深さは0.1～0.2mを測り、底は平坦である。粘土採掘後のピットとも考えられるが、



第7図 粘土採掘場S X 39実測図

ピットの底面が東側丘陵上に向かって次第に上がる状況は足場とみることも可能である。この a-a' 間を使った、丘陵上と粘土採掘場を結ぶ通路が存在した可能性も考えられる。

SX 39 から東側の丘陵部は、建物跡 SB 35 の北側尾根筋が西に下る先端部にあたり、粘質の強い砂質土が堆積した緩やかな平坦地が存在する。平坦地の中央付近には、東から SX 39 にかけて浅い谷状の窪みが存在する。SX 39 はこの窪みを対象に掘削された状況にもあり、ここに良質な粘土が存在していたと考えられる。この浅い谷状部では奈良時代から平安時代前期にかけての土器破片が出土した。

SX 45 (第8図) SX 39 の北側に位置し、SX 39 から丘陵斜面を東に回り込んだ、谷地形の南側斜面の裾に存在する土坑である。SX 45 の南西斜面上部では、SX 39 にみられた階段状の粘土摺り面が存在し、ここでも粘土の採掘が行われている状況が確認できた。SX 45 は粘土採掘範囲の北東端に位置し、SX 45 から北東側斜面には粘土の堆積がみられない。

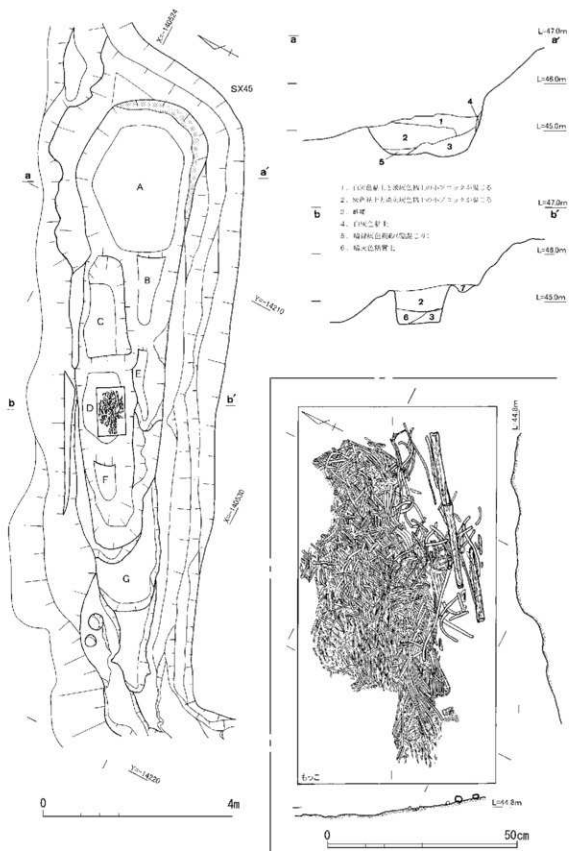
SX 45 は、平面形が細長い隅丸長方形の土坑であり、全長は約 10.8 m、幅 1～2.4 m の規模を測る。SX 45 は底面が一律に平坦ではなく、深さの異なる底面が 7 か所 (A～G) 存在する。良質な粘土を求めて掘削を進めた結果、底面の深さにばらつきが生じたとみられる。底面の高低差は 0.3～0.5 m を測る。

SX 45 の東端部に位置する A 区は、底面が 1.9 m × 2.7 m、深さは最大 (南西側) で 1.2 m の規模を測る。谷側の北東では、地山上端から底まで 0.7 m を測る。側面は地山の粗砂が広がるが、側面のほぼ中間付近において、東面から南面にかけて粒子の細かい粘土が壁面に残っていた。この粗砂土の壁面に張り付く粘土の存在から、特に良質な粘土が当地の地山の窪みに堆積していたものと考えられる。SX 45 は、当初、粘土貯蔵穴の可能性も考えられるが、土坑底の凹凸や他の遺構との位置関係等から、貯蔵穴とはし難いとみられた。

SX 45 の内部に土器等の遺物はみられなかったが、土坑中央部の D 区からもっこ (第8図) とみられる植物質の編み物が出土した。D 区は 2.3 m × 1.2 m、深さ 0.7 m の方形区画であり、編み物は埋土中層付近から出土した。編み物は竹と蔓状の植物で編まれており、土坑の南東側に 2 本の竹が平行して置かれ、北西側に網部分が重なる状態で置かれていた。この植物性編み物は、出土遺構や 2 本の竹と網の状況から、粘土の運搬の際に使用したもっこの可能性が高い。検出範囲でのもっこは、全長 0.9 m、幅 0.5 m を測る。2 本の竹は直径約 2 cm を測る。直径 0.5 cm 程の蔓状植物が竹の周囲に絡む状況にあり、このうちの幾つかの蔓は編み部にも骨材のように延びている。編み部では蔓と黒く変色した薄い植物 (幅約 0.5 cm) による編み目が一部に確認できた。もっこは脆弱であり、詳細な観察においても、これまでのところ編み目を復元することができない。

④土坑

土坑 SK 16 (第9図) 建物跡 SB 35 の東端付近から検出した土坑である。遺物廃棄土坑とみられる遺構であり、比較的浅い土坑内から大量の土器や瓦が出土した。土坑の平面形は不定形で、北東から南西方向の長軸は約 5.8 m、最大幅は約 4 m、深さは最大で 0.2 m を測る。土坑の



第8図 粘土採掘坑 SX 45 実測図およびもっこ出土状況



第9図 土坑SK16実測図

底面は緩やかに北東から南西方向に下っている。土坑の南部は、SK 16がSB 35の柱穴P 9と溝SD 23に切り勝つ。土坑内の遺物は南部に集中する傾向にあり、遺物の大部分は須恵器と瓦が占めている。須恵器には歪むものや焼成の悪いものが含まれることから、SK 16は土器や瓦の廃棄土坑と判断される。

土坑SK 19 (第11図) 建物跡SB 35の中央部付近から検出した長方形の土坑である。全長約2.5 m、幅約0.7～1.1 m、深さは0.25 mを測る。土坑の小口は南西側が北東側に比べて短い。土坑底はほぼ平坦である。土坑の主軸は北から東に約42°振っている。SK 19内の埋土は暗茶灰色粘質土であり、土器(第17図97～101)と瓦の破片が含まれていた。SK 16と同様に、SK 19も遺物廃棄土坑と判断される。

SX 26 建物跡SB 35の北西部、柱穴P 3とSD 23を覆う状況で検出した遺構で、土器と瓦が集中する範囲をSK 26とした。遺物の集中する範囲は、長さ約2.2 m、幅約1 mの規模である。

遺構下部の柱穴P 3とSD 23は、SK 26の遺物取り上げ後の精査で検出している。SK 26は浅い土坑が存在するとみているが、周辺部の掘削では明確な土坑の痕跡は確認できなかった。遺物廃棄土坑とみているが、地上面での廃棄遺物集積地の可能性も考えられる。

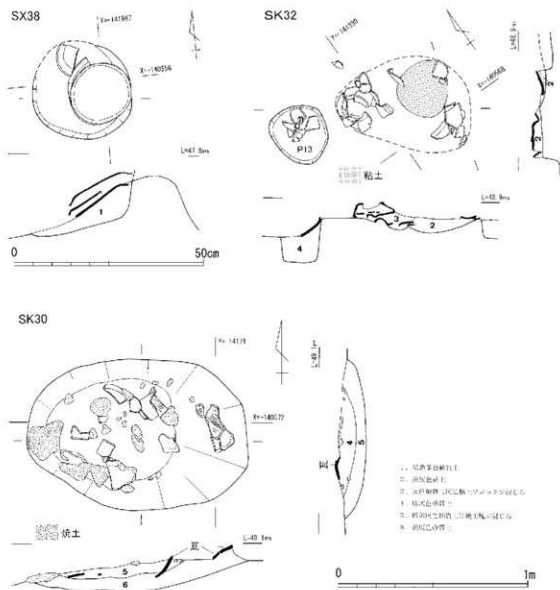
土坑SK 30 (第10図) 建物跡SB 35の内部、SK 19の東側に約2.3 m離れて検出した楕円形土坑である。土坑は、長さ1.15 m、幅0.8 m、深さ0.15 mを測る。土坑内埋土中には、須恵器の皿(第17図106)のほか、幾つかの赤褐色を呈する焼土塊が存在した。SB 35廃絶後の遺構とみられる。SX 26と同様、地上面での廃棄遺物集積地とも考えられる。

SX 32 (第10図) 建物跡SB 35の南西部、建物柱穴P 13の西側で検出した遺構であり、白灰色の粘土塊と須恵器と土師器が集中して存在した。粘土塊は浅い窪みに填まった状態で、直径約0.4 m、深さ0.07 mを測った。粘土塊の北西側に土器が集中して存在した。土器は土師器甕と須恵器の平瓶・甕である。平瓶は口縁と把手を欠くが、多くの破片が重なり合っていた。

土坑SK 41 (第11図) SB 35の南西隅柱穴P 12を切って存在する長方形掘形の土坑である。全長約3 m、幅約1.6 m、深さは最大で0.1 mの規模を測る。土坑の南西部は後世の削平で土坑壁を失っている。また、SK 41の北西角では、土坑42と重複する。SK 41の掘削時点ではSK 42の存在が確認できず、SK 41の底面でSK 42を検出したことから、SK 41はSK 42に切り勝っている。土坑内埋土中から、平瓶や直口壺・鉢などの須恵器(第17図110～113)が出土した。

土坑SK 42 (第11図) 土坑SK 41に切られた土坑である。土坑は方形に近い楕円形を呈し、長さ約1 m、幅約0.7 m、深さ約0.1 mを測る。土坑内から須恵器片が出土した。

土坑SX 38 (第10図) SB 35の西約10 m付近で検出した遺構である。SX 38は須恵器の蓋と皿が上下に重なって出土したが、当初は遺物の周囲に遺構掘形が確認できなかった。SX 38は完形品の蓋が最上部に存在し、その蓋を取り除いた下部と周辺から蓋と皿の破片が出土し、さらにその下には先の皿と接合する破片が存在した。破片を含む4点の土器が上下に重なる状況

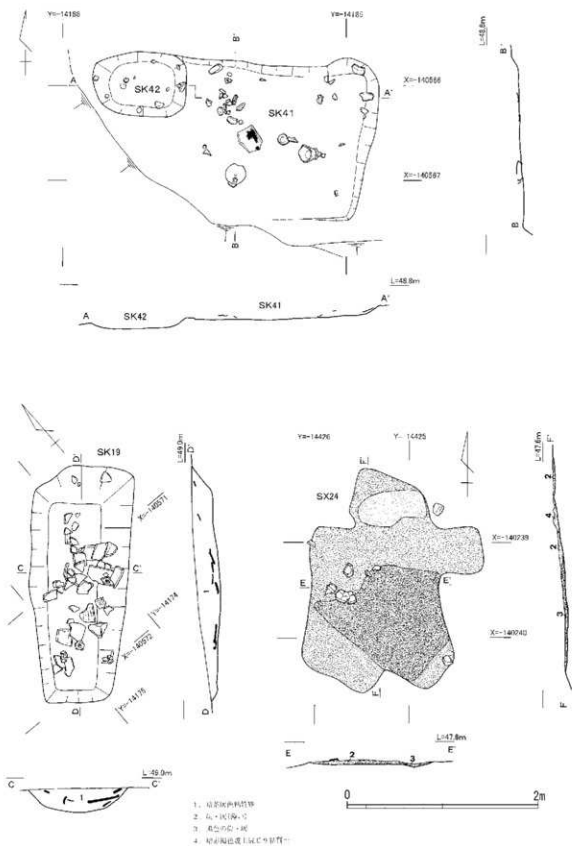


第10図 土坑SK30・32、SX38実測図

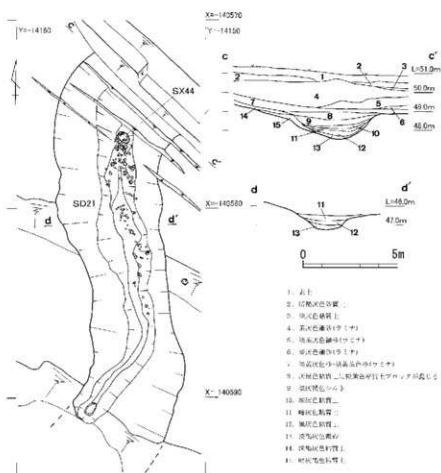
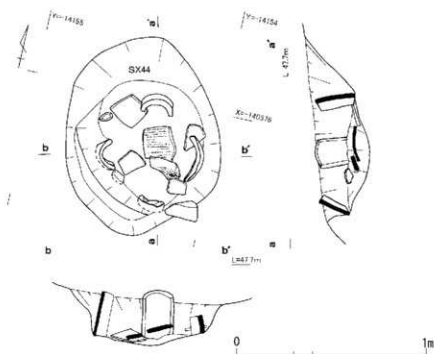
から、精査を繰り返した結果、最下部の皿破片の周囲の土が周辺部の土よりやや粘性が強いことが判明し、掘形の存在が確認できた。掘形の全様は確認できなかったが、直径約0.3m程の柱状状の掘形であったとみられる。SX38周辺部での遺構や遺物の出土が稀であるなかで、完形品や破片が集中する特異な状況から、祭祀に関連した遺構である可能性が高い。

⑤溝状遺構

溝SD21(第12図) SB35の東側で検出した幅3~5m、深さ約1mの素掘り溝である。溝は約16m分を検出したが、その短い範囲内にもかかわらず溝底は大きく蛇行している。溝は丘陵南側尾根の南斜面中腹に存在するとみられ、北から南流する溝の下流側はV字状の断面形を呈している。SD21は、水路の東側に遺構・遺物がほぼ存在しないことから、遺跡の東を区画する水路と考えられる。水路内には瓦以外に、多量の須恵器が含まれていた。特に須恵器は、重



第11図 土坑SK41、42、19、SX24実測図



第12図 SD21、SX41実測図

1. 土
2. 粘赤褐色土質
3. 灰褐色砂土
4. 灰褐色砂土(クマ)
5. 粘赤褐色砂土(クマ)
6. 灰褐色砂土(クマ)
7. 灰褐色砂土(粘赤褐色土質)
8. 灰褐色砂土(粘赤褐色土質)
9. 灰褐色砂土
10. 灰褐色砂土
11. 粘赤褐色土
12. 粘赤褐色土
13. 粘赤褐色土
14. 粘赤褐色土
15. 粘赤褐色土
16. 粘赤褐色土

ね焼きで数固体が融着したものの、焼け歪んだもの、焼成の悪いものなどが多数存在している。

SX44 SD21の溝北部(上流側)の溝底部分には、集水槽(SX44)が1か所存在した。SX44は、直径約0.5m、深さ約0.25mの規模を測り、丸瓦と平瓦で周囲を囲って楕形を作っている。

⑥その他の遺構

近世墓SX24(第11図)SB35の存在する平坦地の南側の1段下がった平坦地で検出した。この下段の平坦地では、SX24以外の遺構は存在していない。遺構は、地山上の北側に暗赤褐色の焼土が存在し、焼土の南側に炭と灰が薄いながらも広範囲に広がっていた。焼土は、長さ約0.7m、幅約0.35mの規模を測る。炭・灰の範囲は不定形ながらも方形に近い状態で、東西

約1.8 m、南北最大約2.35 mを測る。炭・灰層の中でも特に炭を多く含む範囲は、南側に集中する傾向にある。特に掘形は存在しない。出土遺物として、灰層を除去した地山面から寛永通宝1枚の出土をみたが、脆弱でもあり完全状態での取り上げが不可能であった。骨や他の遺物の出土をみないが、遺構の状況から、近世の火葬墓と判断される。(竹原一彦)

古墓(SX 18)(第13図) 立地は、丘陵南向き斜面にあり、墓の主軸は等高線に直交している。墓の位置する標高はおおよそ50 mである。調査地内で1基のみ検出した。墓の主軸は南北方向であり、国土座標軸に対してN11°Eである。灰軸陶器2点が北側から出土しており、遺物の出土状況から斜面上部にあたる北側が頭部と考えられる。

構造について述べる。鉄釘の出土状況および堆積土の土層観察により、木柩と木棺の二重構造となる木炭木柩墓と思われる。遺体の埋葬主体部の構造は、墓壇の底部全体に約5 cmの厚さで木炭を敷きつめ、その木炭床上に北側に子どもの拳大の円礫を木柩棺底に5石置き、その上に木棺を納めている。この礫は棺台と考えられる。木柩は鉄釘の出土状況から底板のない蓋状の構造と考えられる。木棺は鉄釘の出土状況から木柩の中央から西寄りに納められていた。木炭床上面から出土した鉄釘の位置から推定できる木棺の規模は、長さ1.9 m、幅0.45～0.5 mを測る。深さは検出面から0.4 mを測る。墓壇掘形規模は3.0×1.4 m、木炭床規模は2.35×0.75 m、木柩規模は2.3×0.65 mである。木柩に使用された鉄釘は長さが9 cm以上、厚さ0.5 cmでしっかりしている。鉄釘に残存する木質から推定する木柩木材の厚さは3.5 cm程度である。木棺は底板が3 cm、側板が3 cmと考えられる。

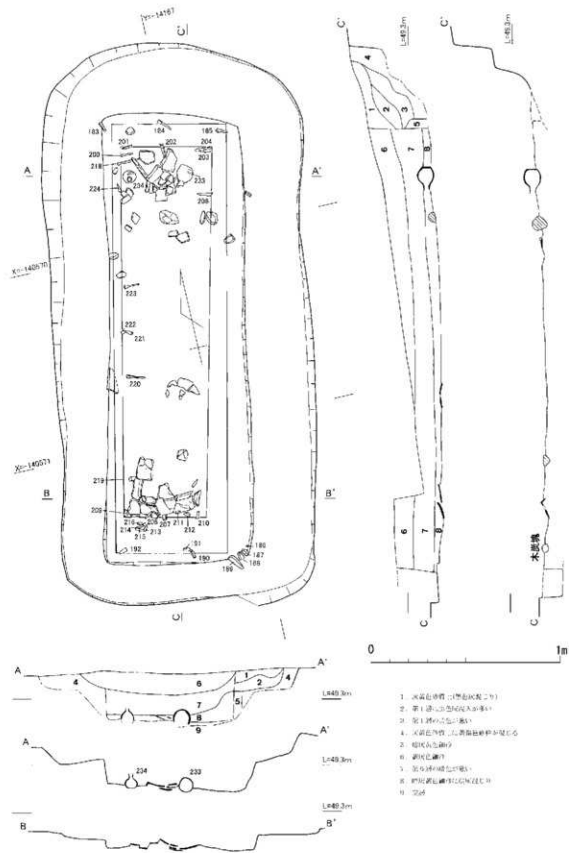
遺物の出土状況は次のとおりである。木柩内の遺物は北側の頭部付近および足元付近で出土した土師器甕がある。これらの甕は棺内に人為的に破砕して入れられたものと考えられる。また腰の付近で土師器(皿か)が1点出土した。供献土器には灰軸陶器の小瓶(瓶子)と手付瓶(水注)がある。いずれも頭部付近で出土した。小瓶は底部を棺底に向け土師器甕の西側、正位置で出土し、手付瓶は口縁部を足側に向け土師器の東側で横倒しの状態で出土した。小瓶は口縁部、手付瓶は口縁部、注口部と把手部分が破砕されていた^(B5)。墓内から灰軸陶器の破砕された部分の破片は見つかっていない。鉄釘は墓(SX 18)の検出時に8点、木炭床上面で41点(破片点数)出土した。鉄釘の出土位置は第13図の通りである。木柩は小口部分の中央部に1本、両端上下に各1本の計5本が打ち込まれていたと推定される。また木棺については小口部分に各4本、西棺側については北小口から南側に0.2 mのところを東西各1本、側板中央に約0.25 m間隔で計3本が遺存していた。人骨は出土していない。また堆積土を水洗洗浄したが微細遺物は見つからなかった。(柴 晩彦)

(2) 出土遺物

今回の第2次調査では、丘陵上や通路・溝・遺物廃棄土坑・古墓等から、瓦・土器^(B6)・金属器・石器・植物質もっこなど、多種の遺物の出土をみた。

①土器

S B 35 出土土器(第17図114・115) 建物柱穴掘形埋土から土器の細片が出土した。図示で



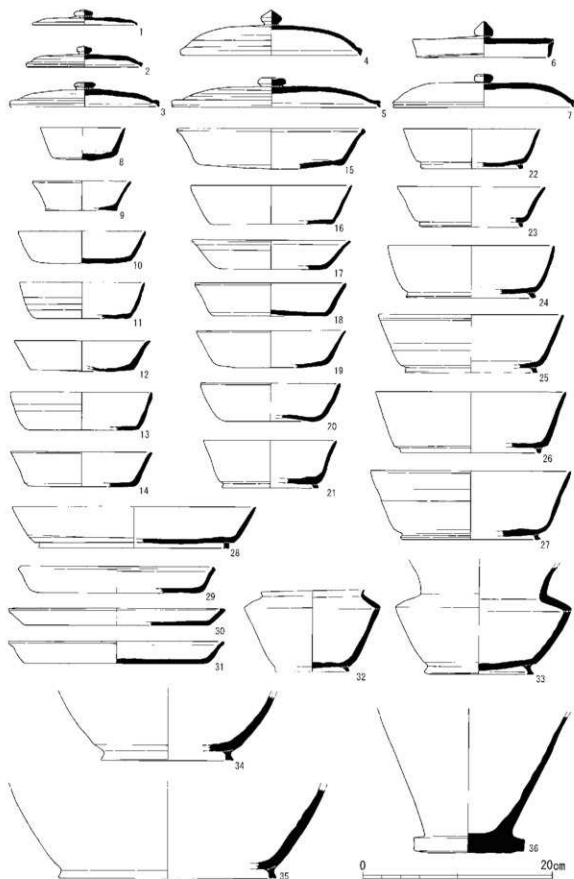
第13図 古墓SX18実測図

きたものは須恵器杯B 2点で、114は口径13.9cm、器高5.1cmである。115は口径20.6cm、器高6.3cmを測る。

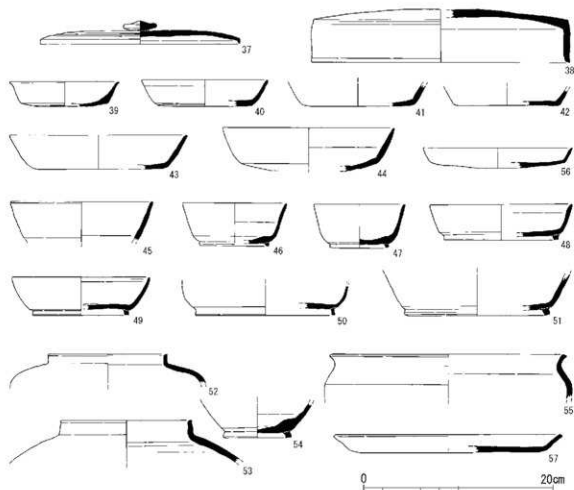
S D 23 出土土器 (第14図1~36) 掘立柱建物跡S B 35の排水溝S D 23の埋土から、須恵器と鉄製刀子が出土した。1~7は、宝珠つまみを有する杯Bの蓋である。1・2は、口径11~12cmで天井が低く、平坦な頂部はヘラ切り未調整である。4は、口径19.2cm、器高4.6cmで天井が高く、頂部は丁寧に回転ヘラケズりする。6は、壺Aの蓋であるが、焼成時の歪みが著しい。直径14.2cm、器高3.8cmである。8~20は杯Aである。底部外面はヘラ切り未調整である。軟質焼成や焼け歪むものが多い。21~27は杯Bである。貼り付け高台の内側底部外面は、ヘラ切り未調整である。28は皿Bである。29~31は皿Aである。32は壺Eである。口径11cm、器高8.6cm。33は壺Hである。36は鉢Fである。軟質焼成であり、白灰色の色調を呈する。

S F 27 出土土器 (第15図37~57) 37は杯B蓋である。口径21.2cmである。38は壺Aの蓋である。直径27.5cmを測る大型品である。頂部の中心部を失うが、つまみが伴うものとみられる。39~44は杯Aであり、底部外面はヘラ切り未調整である。39は口径11.6cm、器高2.5cmである。40は口径13.4cm、器高2.8cmである。43は口径18.7cm、器高3.5cmである。56は皿Aである。口径15.8cm、器高3.1cmである。45~51は杯Bである。小型の46・47は身も深く、46は口径10.9cm、器高4.4cm、47は口径9.6cm、器高4.5cmである。48は口径15.3cm、器高4.7cmである。49は口径14.6cm、器高4.1cmである。52・53は壺Aである。54は壺の底部である。55は甕の口縁である。口径は25.3cmである。57は皿Aである。口径24.3cm、器高1.9cmである。

S K 16 出土土器 (第16図58~96) いずれも須恵器である。58~63は杯Bの蓋である。58・59は頂部が丸く、傘形を呈し、縁部は屈曲する。58は宝珠形つまみが付く。58は直径12.5cm、器高3.1cmである。59は直径15.2cm、器高2.9cmである。60~63は扁平な頂部で縁部は屈曲する。ボタン形つまみが付く。61は直径21.9cm、器高3cmである。62は直径17.4cm、器高1.3cmである。64は壺Aの蓋である。直径4.2cm、器高1.4cmである。65は皿Eであり燈明皿でもある。口縁端部を大きく外反させる。口径9.6cm、器高2.4cmである。66~78は杯Aである。平坦な底部と斜め上方に延びる口縁は丸くおさまる。小型品である66は口径12.9cm、器高3cmを測る。大型の84は口径24.1cm、器高6.1cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整であり、焼成不良のものが多い。77は、内外両面に多数の竪溝を施しているが、文字・記号・絵画など判読はできない。79~84は杯Bである。小型の79は口径13.4cm、器高4.3cmを測る。大型の72は口径19.7cm、器高6.3cmを測る。85は碗Aである。口径14.5cm、器高5.6cmを測る。86は碗Bである。口径19.3cm、器高6.4cmを測る。87~90は皿Aである。平坦な底部に短い口縁を備える。底部外面はヘラ切り未調整の例が多い。87は口径17.4cm、器高2.2cmを測る。大型の89は口径22.6cm、器高1.8cmを測る。89・90は歪みが著しい。91~95は皿Bである。平坦な底部から外上方に延びる口縁は丸くおさまる。小型の91は口径17cm、器高3.2cmを測る。大型の95は口径28.1cm、器高5.4cmを測る。96は円面硯の脚部である。



第14図 SD 23 出土遺物実測図



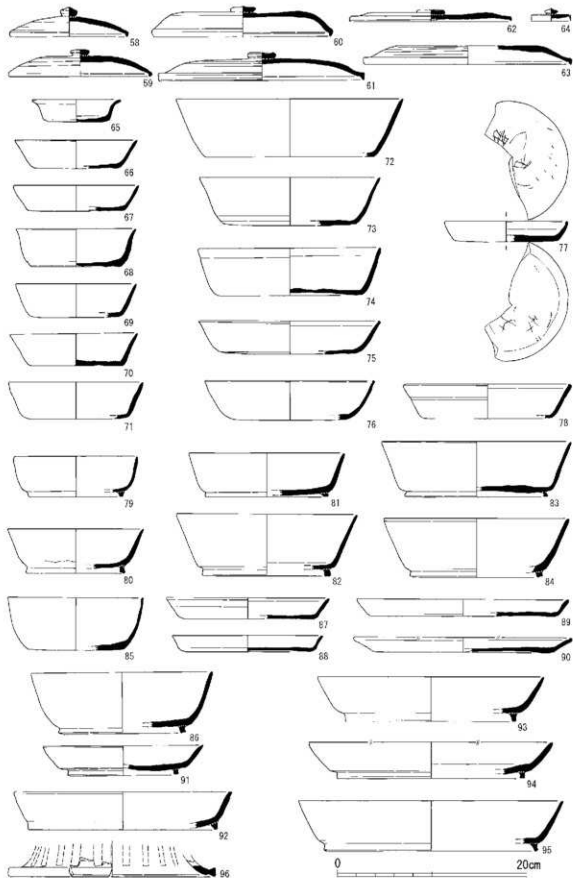
第15図 SF 27 出土遺物実測図

幅約1cmのスカシは長方形で、間隔はおよそ2cmを測る。

SK 19 出土土器 (第17図 97～102) 須恵器 (97～101) と土師器 (102) が出土している。97は蓋である。頂部は平坦で、縁部は面をもっておさめる。直径22.3cm、頂部高1.2cmを測る。98は杯Bである。口径10.8cm、器高3.6cmを測る。99は托であり、軟質焼成である。100は甕の底部である。101は盤である。体部外面に半環状把手(2か所)が付く。体部内面は斜めハケの後に上下に間隔をあけてヨコハケする。口径は34.4cmである。102は土師器の甕である。丸みの強い体部に2か所、三角形の粘土板を上に向けた把手をもつ。外反する口縁の端部は面をもっておわる。口径は12.4cmを測る。

SK 32 出土土器 (第17図 103～105) 土師器 (103) と須恵器 (104・105) が出土した。103は甕である。体部は長胴で張りが弱く、外面はユビオサエの痕跡を残してタテハケする。口径は22.4cmを測る。104は平瓶である。頂部には把手をもつ。105は甕である。口径は38.6cmである。

土坑SK 30 出土土器 (第17図 106) 106は、皿Aであり、土坑内から出土した唯一の遺物である。口径24.3cm、器高2.6cmである。焼成が悪く、色調は白灰色で軟質である。



第16図 土坑S K 16 出土遺物実測図

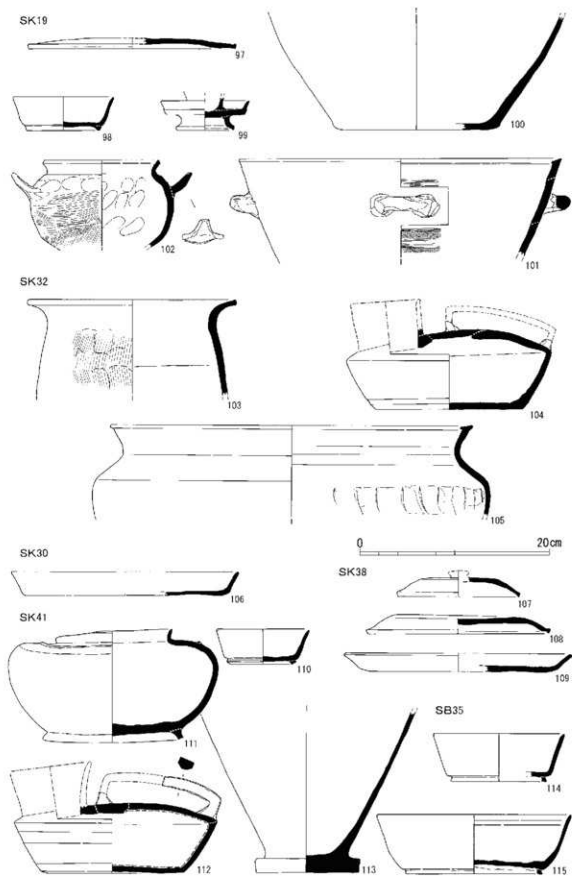
S X 38 出土土器 (第17図107～109) 2点の蓋(107・108)と皿C(109)が重なって出土した。いずれも須恵器である。蓋は大小あり、107は直径12.9cm、頂部高2cmで、つまみがつくとみられる。破片出土であり、全体の約4割前後である。108はつまみを持たない完形品の蓋である。頂部は平坦で緩やかにカーブする縁部は短く屈曲する。頂部は回転ヘラ切りした後、粗い回転マガキを施している。直径19.2cm、器高1.9cmである。109は、広く平らな底部と、口縁は外上方に短く立ち上がる。口縁端部は平坦に整える。大きな破片2片が接合した。接合した破片は全体の約7割を占める。108・109は大きく重む。

S K 41 出土土器 (第17図110～113) 全て須恵器である。110は杯Bである。口径9.4cm、器高3.8cmである。111は壺Aである。口縁から体部上半にかけて大きく焼け歪んでいる。口径12.4cm前後、器高は12cm以上である。肩部には窯着した蓋の縁部が残る。また、体部には胎土の火ぶくれもみられる。

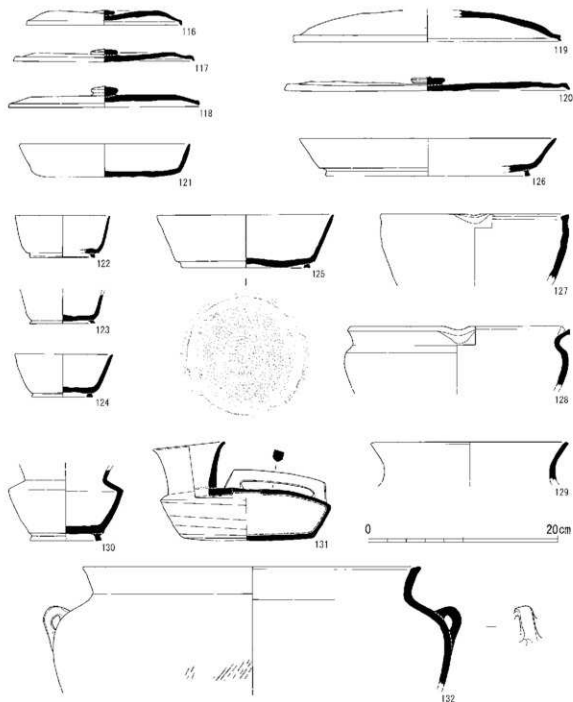
S K 26 出土土器 (第18図116～132) 129の甕以外は全て須恵器である。116～120は蓋である。蓋は、口径が16.1～20.1cm(116～118)と28～30.1cm(119・120)の大小がみられる。121は杯Aである。口径18.1cm、器高は3.2cmである。122～125は杯Bである。122～124は小型で身が深い。122は口径10cm、器高4.2cmである。124は口径10.1cm、器高4.5cmである。125は杯Bであり、底部外面を糸切りした後、中央部を残し回転によるナデ調整を行う。出土した須恵器のなかで、底部の糸切りは本例のみである。口径18.8cm、器高5.5cmである。126は皿Bである。口縁部は外上方に立ち上がる。口径27.3cm、器高3.9cmである。127はいわゆる鉄鉢形の鉢Aである。口縁部の内湾は緩いが片口をもつ。口径15.1cmである。128は鉢Dである。口縁は短く外反し、体部の上部で肩が張る。片口をもつ。口径は22.6cmである。129は土師器甕の口縁である。130は壺Qである。131は平瓶である。132は甕Cで、体部の上部で肩が張り、相対する肩部2か所に把手を付す。

S D 21 出土土器 (第19図133～168、第20図169～182) S D 21は遺跡の東を画する溝であり、多量の須恵器の出土をみた。須恵器には焼成不良・焼け歪み・窯融着等の不良品が多数存在する。唯一、第20図179は土師器である。

133～138は蓋である。133・134は、口径約20cm、器高3.1～3.8cmである。135～137は口径12.3～12.6cm、器高2.1～2.3cmである。頂部は平らでボタン状のつまみを付す。138は皿B蓋である。口径28.1cm、器高3cmである。139～141は壺A・壺C～壺Eに伴う蓋である。139は口径10.4cm、器高2.2cmである。141は口径15.1cm、器高3.5cmである。143～150は杯Aである。いずれも底部外面は回転ヘラ切りで未調整である。143は口径9.9cm、器高2.3cmである。149は口径17.5cm、器高5.5cmである。150は、4点の杯Aが焼成時の重ね焼きのまま融着したものである。最下部の杯Aは口径14.2cm、器高4.3cmである。151～163は杯Bである。153は器表面の火ぶくれが著しい。164は皿Cである。口径24.3cm、器高1.7cmである。165は皿Bである。口径28.1cm、器高4.2cmである。166は壺Eである。狭い肩部に外傾する短い口縁部をもつ。口径9.3cm、器高5.9cmである。167は壺Qである。口径11.9cm、器高7.9cmであ

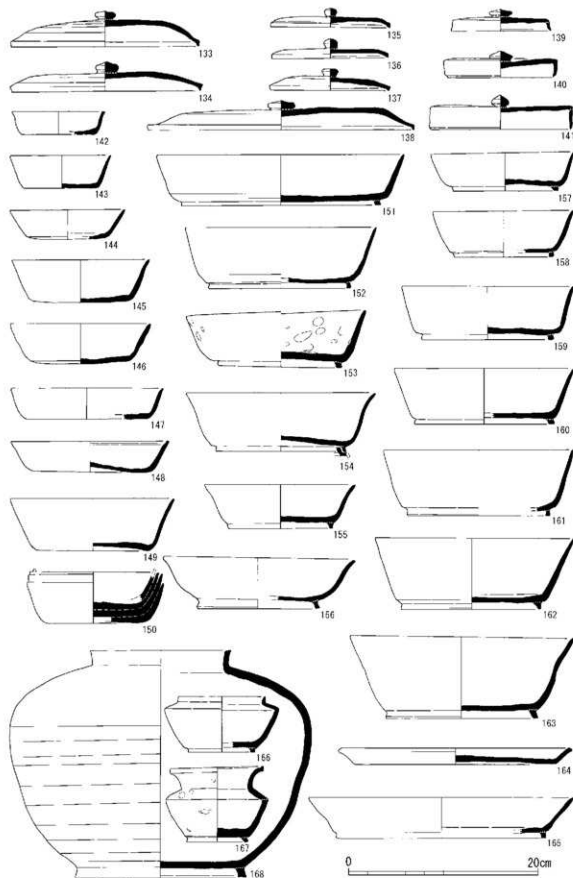


第17図 土坑19、30、32、41、SB35、SX38出土遺物実測図

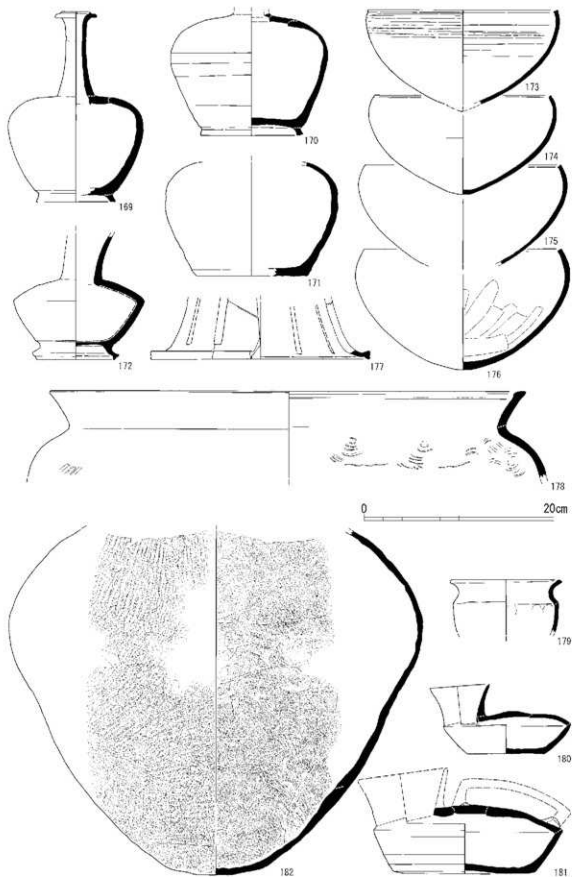


第18図 土坑SK 26出土遺物実測図

168は壺Aである。口径15.1cm、器高24.2cmである。169は水瓶である。金属器を模したもので、体部の上部で肩が張り、細長い頸部をもつ。頸部に沈線をもつ。大きく外反する口縁の内側上端部に、小さな立ち上がりをもつ。172は壺Kである。173～176は鉢Aである。尖底で口縁部は内湾しながら立ち上がる、いわゆる鉄鉢形である。口縁端部は面をもつ。体部上半の外表面は回転ヘラミガキを施す。口径は20.4～21.1cm、器高10.5～12.7cmである。177は円面碗の脚である。脚端部の直径は23.3cmである。178は甕である。口径は50.8cmである。179は土師



第19图 SD 21 出土遺物実測图1



第20図 S D 21 出土遺物実測図2

器壺Bである。口径11.4cmである。180・181は平瓶である。把手の無いもの(180)と、有るもの(181)がある。182は、甕Aの体部である。卵形の体部内面は同心円タタキをナデ消す。体部外面は平行タタキする (竹原一彦)

古墓S X 18 出土遺物 (第21・22図) 出土遺物には、土器と鉄製品がある。土器は、灰軸陶器小瓶と同把手付瓶及び土師器甕である。灰軸陶器小瓶(234)は残存高8.8cm、底径5cm、胴部最大径7.4cmを測る。軸調は黄褐色をなす。一見、緑軸陶器の釉のような滑らかさがある。口縁部は人為的に打ち欠かれ残存しない。底部には糸切り痕が残存する。胎土は灰白色で精良である。把手付瓶(233)は器高11.9cm、底径6cm、胴部最大径9cmを測る。軸調は緑灰色をなす。口縁部の一部、把手、注口部を欠損する。底部にはロクロから切り離した際の糸切り痕が残存する。胎土は灰色である。土師器甕は口縁端部を内側に折り曲げ断面三角形に肥厚している。細部の調整は磨滅のため不明である。

鉄製品として多数の釘が出土している。鉄釘(183～230)は、長さ、幅により2分類できる。長さ10cm程度、厚さ0.5cm程度のもの(183～193、199)(A類)と、長さ7cm前後、厚さ0.4cm程度のもの(200～230)(B類)がある。A類は木櫓に使用した釘、B類は木棺に使用したものと考えられる。しかし厚さが薄い先端部の残存度が低い。A類で最も残存度が良好な199は長さ12cm、B類では223が8.5cmである。釘はほとんどのものに板材痕跡(木質部)が残る。225は断面が三角形をなし、刀子の可能性が有る。232は断面方形の「L」字金具である。

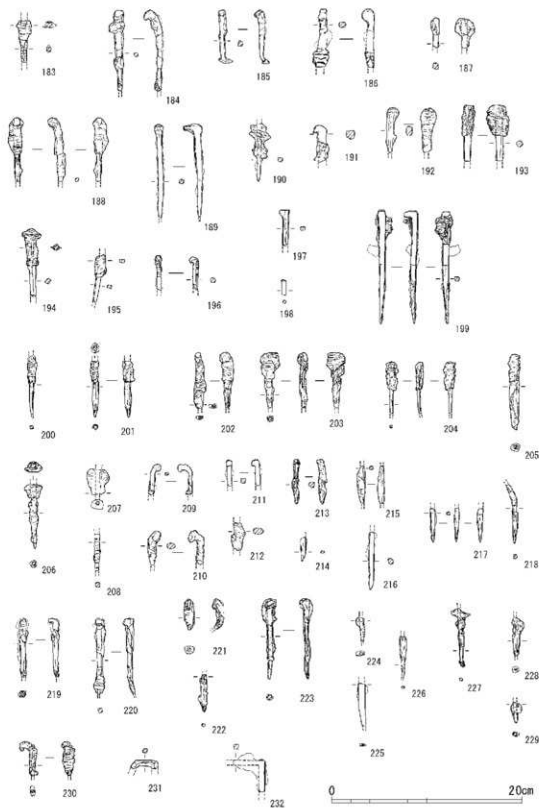
(柴 晩彦)

③瓦類・埴(第23・24図)

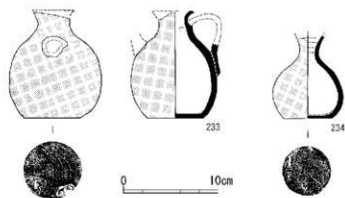
軒丸瓦(235・236) 今回の第2次調査では、平城6313 F型式のみ5点出土した^(註7)。235・236は、内区には中房に一つの大きな蓮子をもち、その外側に8単位の複弁蓮華文をあしらう。一見単弁に見間違いが複弁蓮華文であり、弁端は尖り気味である。外区は、内縁に15個の珠文を配し、外圏線の外に約8mm幅の無文帯をもつ。外縁は丸い傾斜縁で線鋸歯文を巡らす。236では、丸瓦凹面にみる接合粘土が瓦当裏面全体に広がり、瓦当部分の厚みを増している。ちなみに、瓦当の厚さは外縁から約4.6cmである。面径は235が15.4cm、236は15.1cmである。瓦当裏面は外区面より1.5cm程下がった位置に丸瓦を装着した窪みがあり、丸瓦の凹凸面両方に貼り付けられた接合粘土の一部が残る。出土した5点の同種の軒丸瓦のうち、瓦当裏面が良好なもの3点では、丁寧なナデにより平らに調整したもの、ユビオサエが残るもの、粗い指ナデを行うものなど様々である。

軒平瓦(237) 軒平瓦は3点が出土しており、いずれも平城6685 E型式である。内区は中心飾りが十字形で、左右にそれぞれ3回反転する唐草文を配する。上下の区と脇の区に珠文を配し、上区と脇区の境には杏仁形の珠文を置く。下顎部は斜めで無段である。平瓦凹面には布目を残し軽くなでている。凸面は瓦当側から後ろ側に向かって、縦方向ナデで仕上げている。焼成は軟質で色調は3点とも淡褐色を呈している。

丸瓦(238・239) 調査の中で出土した丸瓦はいずれも有段(玉縁)式である。出土した瓦の



第21图 古墓SX 18出土遺物実測図1



第22図 古墓S X 18出土遺物実測図2

中丸瓦の占める比率が少ない中であって、玉縁が伴うものはさらに少なく、わずか7点が確認できた。丸瓦の製作方法は、総じて模骨に布を被せ粘土板を巻きつけたのち、凸面を縦方向の縄目タタキを行い、ナデ調整を施している。凹面には布目痕跡をそのまま残し、ナデ消す等の調整は加えない。凹凸面両端部の面取りは、凸面に施される例は確認され

ないが、凹面では面取りを行うものを行わないもの両方が確認できる。丸瓦の分類は調整や寸法から行うことはできないが、玉縁の形状には変化が認められた。ただし、観察数が限られることから、ここでは大別し止めておく。

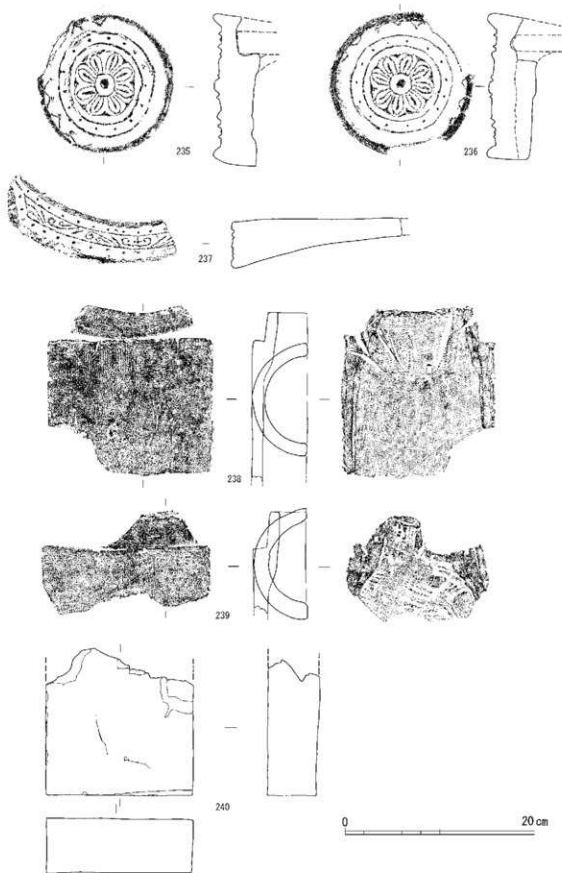
I類 (238) 玉縁の形状が方形で、両側面が水平であるもので、238が該当する。合計4点を確認した。玉縁の長さは全て4.2cmで、焼成が硬質で、灰色を呈している。

II類 (239) 玉縁の形状が台形を呈し、両側面も先端方行に向かって立ち上がるもので、239が該当する。玉縁の長さは5cm前後である。焼成が硬質で灰色を呈するもの(239)と、軟質で淡褐色を呈するものが存在する。合計3点を確認している。

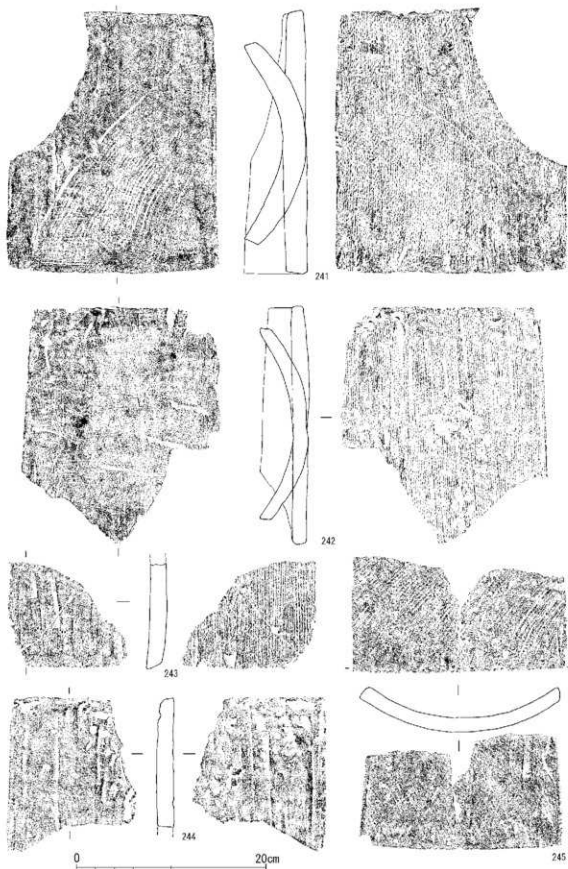
丸瓦では円筒部の器壁の厚さに若干の変化が認められたことから、出土資料の中から無作為に100点を抽出して計測をおこなった。器壁の厚さは1.4cmを最大多数として、1.1～2.0cmまでの幅が認められた。玉縁が残る7点では、I類に属するものは1.3～1.6cm、II類に属するものは1.8～2.0cmに分かれた。計測点数が少なく実態を反映しない可能性も残るが、器壁の厚さにおいてI類は1.7cm以下、II類は1.7cm以上とする傾向が読み取れた。丸瓦全体で見ればI類が優勢である状況から、鹿背山瓦窯ではII類よりもI類の丸瓦が多く生産されていた可能性が指摘できる。

平瓦 鹿背山瓦窯出土の平瓦は、凹面に糸切り痕跡がみられ、瓦の端部に縦った布端の圧痕が存在するものが多い。また、凹面には模骨の痕跡が全く存在せず、凹面中ほどに布織り痕を残すものは皆無である。このような状況から、鹿背山瓦窯跡では、平瓦は全て一枚作りで製作されていたようである。平瓦の分類については丸瓦と同じく完形ものがなく、特に良好としたものは一部が欠損したものの1点、半分以上が残るのが5点程度しかなく、他の大多数は破片資料である。分類に際しては、良好な資料が少ないこともあって、破片資料も含めて行った。

I類 (241～243) I類は、凸面に縦方向の縄目タタキを行い、凹面に布目の圧痕を残すものである。生瓦の整形台は表面が平滑な凸型台が使用されている。241では凹面に残る布目痕を部分的に縦方向にナデ消す。凸面中央部に残る縄目が潰れる例も多く存在する。これは生瓦の乾燥が進まない段階で当面を下にして生瓦を置いたことを示し、凹面のナデ消しの作業工程に伴う潰



第23图 瓦実測图1



第24图 瓦実測图2

れと考えられる。なお、凹面のナデ消しの範囲は固体によって様々であるが、凹面全体をナデで仕上げる例は認められない。焼成は硬質で灰色を呈するものが多い。また、胎土は砂を含み粗い傾向にある。241の凹面には布目痕跡の下に糸切り痕跡が残る。この糸切り痕は、生瓦を整形するにあたり、方柱状の素地粘土塊から生瓦1枚分の粘土板を切り取った痕跡と考えられる。凹面のナデは指頭等によるナデ(241・242)と、板状工具による縦方向のナデ(243)の2種が認められる。また、指頭ナデにも縦方向ナデ(241)と横方向ナデ(242)の2種が存在する。243にみる板状工具は幅約2.4cmであり凹面の下端から施されるが、部分的に端から離れた内側から始まる状況も観察される。ナデ自体は弱く、部分的に布目が残る。

Ⅱ類(244) Ⅱ類は凸面に縄目タタキをもたないものである。全体の中での出土量は僅かである。凸面にはユビオサエと縦方向に模骨様の段差痕が認められる。これは素地の粘土板をⅠ類と同じ凸型の整形台に置いて素手で押さえた後、板状工具による縦方向のナデで整形したものであろう。

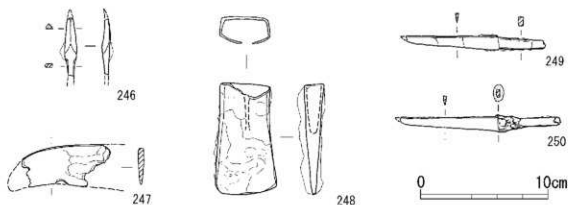
Ⅲ類(245) Ⅲ類は整形台が凹型と考えられるものである。凹面に布目痕跡が存在せず、凸面には離れ砂の付着が認められる。この離れ砂の存在から凹面の整形台の使用が窺われる。245は素地粘土板を切り取る糸切り痕を凹凸両面に残す。粘土板は常に連続して切り取られたようで、粘土板の一方の角から対角線方向に糸切りを行っている。糸切りの始点と終点は、粘土板の上下両面で同じ角で共通する。245の凸面は薄い離れ砂がみられる程度で、あまり手を加えてはいない。凹面は部分的に縦方向の指ナデを施している。

埴(240) 方形で厚みのある埴の出土をみている。出土量は瓦に比べ僅かであり、いずれも須恵質焼成である。隣接する2つの角が残り、一辺の大きさが判明するものは3点しかなく、なかでも良好なものを1点(240)を図化した。240は長方形の埴とみられるもので、短辺は約15.5cmである。長辺は破損資料であるため不明である。厚さは5.5cmである。胎土は良質であるが、僅かに5mm程の小石を含むものもある。素地の粘土には数種の粘土が使用されるが捏ねが不十分で、破断面に灰色粘土と白色粘土が縞状に残るものも存在する。表面は軽くヘラケズリして仕上げている。(渡辺理気)

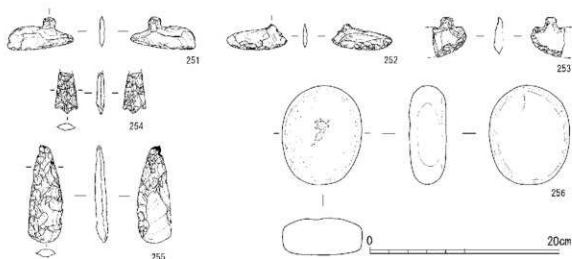
④金属器(第25図) 246～248の3点は、S B 35周辺部の遺物包含層から出土した遺物である。246は鉄製の鉋であり、刃部先端を欠く。247は鉄鎌である。248は鉄斧である。249はS D 23から出土した鉄製刀子である。残存長は11.2cmを測る。切先は失われていたが、茎には柄の木質が僅かに残る。研ぎ瘦せた刃部の状況から、頻繁な使用が窺われる。250は、S F 27の轍上面から出土した鉄製刀子である。切先は失われているが、残存長は12.7cmを測る。刃部は、頻繁な研ぎにより瘦せ細っている。茎の関付近に柄の木質が残る。関部の柄の断面形は楕円形である。

金属器ではその他、近世墓S X 24から寛永通宝1点の出土をみたが、脆弱であり図化できなかった。

⑤石器(第26図) 丘陵上と溝(S D 23・S D 48)から縄文時代の石器の出土をみた。ただ、



第25図 金属器実測図



第26図 石器実測図

同時期の土器の出土はみられない。251～253はサヌカイト製の石匙である。3点とも横長の刃部は曲刃である。刃部の長さは251が7.2cm、252が6.4cmを測る。254はサヌカイト製の有舌尖頭器であり、SD 21の肩部から出土した。先端部を欠くが残存長は4.3cmである。255はサヌカイト製の尖頭器であり、SD 48の溝底から出土した。基部の表面には主剥離面を残し、側面の刃部は丁寧な押圧剥離で整えている。先端部をやや欠く。残存長は10.3cmである。256は丘陵上の包含層から出土した花崗岩製の磨石である。側面部が特に摩滅しており、片面の中央部に人為的な窪みをもつ。敲き石としても使用されている。長さ10.3cm、幅8.5cm、厚さ3.9cmである。
(竹原一彦)

3. まとめ

今回の第2次調査では、丘陵上から瓦工房に伴う掘立柱建物跡・通路遺構・粘土採掘跡などを検出したほか、奈良時代のもっこや多量の須恵器の出土など、貴重な調査成果を得ることができた。今回、粘土採掘・瓦製作・運搬等に関連する遺構の検出をみたことから、前年度に検出した2基の瓦窯跡とあわせて、鹿背山瓦窯跡のほぼ全容を明らかにすることが可能となった。瓦窯の

時期は奈良時代中頃（平城土器編年のⅢ期）と考えられる。

鹿背山瓦窯は、丘陵尾根の南側斜面に瓦窯が築かれ、これまでに1号窯と2号窯の2基の窯跡を検出した。^(R9)瓦窯周辺部の斜面には未調査部分もあり、さらに数基の瓦窯が存在する可能性もある。2基の瓦窯跡は上面輪郭を確認したのみの調査であり、窯跡内部と窯跡南側直下の灰原の調査は実施していない。ただ、上面観察では第1次調査概要で報告したように、1号窯は平窯である。2号窯は、検出面で確認した焼成室の改築状況から、窯室から平窯に造り替えているようである。

掘立柱建物跡SB35は、2号窯から東に約20m離れた丘陵上に存在する。SB35は2間×8間の規模をもち、丘陵尾根南側斜面の一部を削った平坦地に築かれている。SB35の柱穴掘形は円形で、直径が0.3～0.5mと小規模であり、建物は細くて長い。上人ヶ平遺跡の瓦工房建物も2間×9間（兩庇）で細長く、3棟が整然と並んでいる。SB35は上人ヶ平遺跡の建物と同様な工房建物跡と考えられ、瓦製作・生瓦の乾燥等が行われたとみられる。SB35の南側は後世の耕作に伴い大規模に削平された空間が存在する。上人ヶ平遺跡と同様ならば、この空間にも同規模の工房建物が存在した可能性があるが、確証は得られない。

今回の調査では、丘陵西裾の平坦地と丘陵部のSB35と瓦窯を結ぶ2本の通路（SF27・28）を検出することができた。SF27とSF28はほぼ同規模で並走するが、路面の角度が大きく異なっている。瓦窯跡に近いSF28は傾斜が緩く、その東端は2号窯の焼成部付近に達する。北側のSF27はSF28より傾斜が急勾配であり、東側が削平の影響で失われるがその延長先にはSB35が存在する。SF27の東端は、ほぼSB35付近にまで続いていたものと推測される。SF27とSF28は、ともに路面部に石敷きが存在し、石敷き上に1条の轍が残る。轍の存在から、荷車を使用した物資の運搬が行われたと考えられる。この轍は1条であることから、1輪車を使用されたとみられる。急勾配のSF27は、西裾の平坦地から丘陵上（工房）に、比較的軽量の物資の荷揚げに使用された可能性が高い。焼成の完了した瓦は燃焼室天井を壊して取り上げ、一旦窯の近くに集積して検品したと考えられる。1号窯と2号窯の北側からSF28の間には平坦な空間が存在し、ここが瓦の集積地の一つとみられる。不良な瓦は窯跡前面の灰原に捨てられたと考えられる。瓦は重量物でもあり、窯跡から搬出の際には、主に傾斜の緩やかなSF28が使用されたと考えられる。

調査で出土した複弁蓮華文軒瓦（平城6313型式）と均整唐草文軒瓦（平城6685型式）は、平城宮内に出土例が認められ、鹿背山瓦窯の瓦は平城宮に供給されていたことが明らかとなった。

SD21から出土した須恵器は、割れや歪みなど不良な製品が数多く存在する。調査地内に窯跡は確認できないが、周辺部に奈良時代の須恵器の窯跡が存在する可能性が高い。

平安時代では尾根南側斜面に1基の古墓（SX18）が存在した。古墓の年代は平安時代に属する。^(R10)木炭木柩墓であり、その丁寧な造りや灰釉陶器の副葬から、被葬者は身分の高い役人と判断される。被葬者の特定には至らないが、鹿背山に墓所をもった橘氏一族の墓である可能性が高い。^(R11)

平安時代後期には通路S F 27・28の西部にある谷地形を大規模に削り、平坦地が築かれている。この平坦地には同時期の遺構が存在せず、平坦地の利用状況には不明な点が多い。

鹿背山瓦窯跡は、調査によって縄文時代から江戸時代にかけて、折りにつけ人々が活動した状況が明らかになった。なかでも、特に重要な位置を占めるのは奈良時代中期から後半にかけて採集した鹿背山瓦窯跡である。粘土採掘から瓦の焼成、その後の運搬までの一連の工程が検出遺構によって明らかになる成果を得ることができた。2基の窯跡を検出したが、内部構造等の詳細については内部調査が未実施のため不明な点が多い。2号窯では焼成部の平面形の変化から、窑室から平窯へ造り替えているようである。窑室から平窯に変わる時期を知る上で、鹿背山瓦窯跡は重要な位置を占める遺跡である。

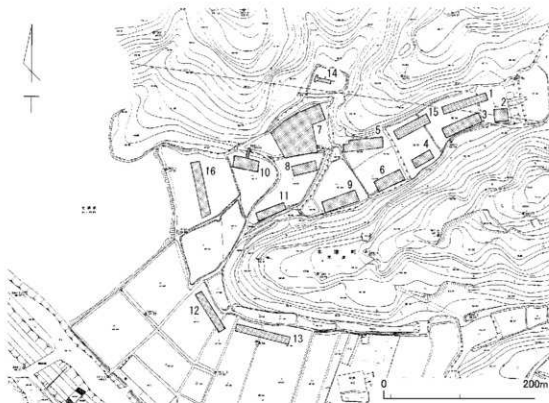
(竹原一彦・柴 暁彦)

(2) 馬場南遺跡

1. はじめに

馬場南遺跡は、JR木津駅の南約1kmにあって、木津平野の東部丘陵を東西に貫く井関川の右岸丘陵裾に位置する。遺跡範囲は、東と北にY字に分岐する谷部と井関川沿いの文廻池とその周辺部が含まれる。

今回の調査は、造成工事に先立ち、遺跡の性格・内容・範囲の確認を目的として、丘陵裾の水田部を中心に16か所の試掘トレンチを設けて試掘調査を実施した。また、第7トレンチについては遺構の性格を明らかにするために一部拡張を行い、面的調査を実施した。



第27図 馬場南遺跡調査トレンチ配置図

2. 調査概要

今回の調査では、谷筋の水田部を中心に丘陵裾に沿って14か所の試掘トレンチ（第1～第11・第14～第16トレンチ）を設定して試掘調査を実施した。谷部以外では東側丘陵裾に2か所（第12・第13トレンチ）の試掘トレンチを設けた。調査の結果、谷部の数か所のトレンチから弥生時代の溝や奈良時代の掘立柱建物跡・井戸・溝を検出したほか、同時期の遺物が多量に出土した。

（1）試掘トレンチ（第27・28図）

第1トレンチ 谷筋最奥部の丘陵南側裾部に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約25mの規模を測る。地表下約2mまで掘り下げて遺構・遺物の検出を目指したが、灰色系・淡緑灰色系の粘質土や砂の厚い堆積層のみであった。トレンチ最下部では湧水がみられ、土質も軟弱であることなどから、調査当初から壁面の崩壊が進む状況にあった。堆積土は丘陵裾方向から谷筋中央に向かってやや下がる状況にあり、自然堆積した土層と判断された。トレンチ内は無遺構・無遺物であった。

第2トレンチ 谷筋最奥部の丘陵北側裾に設けたトレンチであり、幅約6m×長さ約7mの規模を測る。第1トレンチと状況は大きく変わらず、無遺構・無遺物であった。

第3トレンチ 第2トレンチの西側、丘陵の北側裾に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約25mの規模を測る。第2トレンチと状況は大きく変わらず、無遺構・無遺物であった。

第4トレンチ 第3トレンチの西側、丘陵の北側裾に設けたトレンチであり、幅約4m×長さ約18mの規模を測る。地表下2.4mまで重機掘削を行ったが、地山の検出には至らない。堆積土の状況は、先述のトレンチと大きく変わらず、無遺構・無遺物である。

第5トレンチ 谷筋の分岐部に位置し、東側谷筋の北尾根南裾に設けたトレンチである。第1トレンチからは西側にやや離れる。幅約4m×長さ約25mの規模を測る。ここでは地表下0.4m付近に黄茶灰色系の砂質土が存在し、精査を実施したところトレンチ西端付近から奈良時代の井戸（SE01）を1基検出した。トレンチ内の調査では、須恵器と土師器に混じってサヌカイトの剥片等の出土もみられた。

第6トレンチ 第5トレンチ南側の丘陵北裾に設けたトレンチである。幅約6m×長さ約16mの規模を測る。トレンチは地表下約2mまでの掘削を行った。灰色系・淡緑灰色系の粘質土や砂の自然堆積がみられたが、第5トレンチで確認した。遺構面は検出できなかった。遺物の出土はみえていない。

第7トレンチ 第5トレンチの西側、谷筋北側丘陵裾に設けたトレンチである。トレンチは当初、分岐した北側谷筋を横断するように4m幅のトレンチを設定し調査を実施した。丘陵裾部では耕作土直下に淡黄灰色～黄灰色の硬い砂質土が広がり、柱穴を検出したほか遺物が出土した。トレンチの東端部では、奈良時代の土器を多数含む暗灰色粘質土の堆積層を確認した。

調査地内から掘立柱建物跡（SB01）1棟、トレンチ東端部で大溝（SR01）を検出したことから、建物跡の全容と周辺遺構の確認を目的に建物跡南部でトレンチの拡張調査を行った。拡

張を行ったSB01の南側は遺構面が緩やかに南東側を下る状況にあり、幾つかの柱穴や小規模な溝が存在したが遺構密度は薄い。SR01では溝の上層でもある暗灰色粘質土層中から、三彩の陶器片や土製品が出土した。

第8トレンチ 第7トレンチの南側、1段大きく下がった水田部に設けたトレンチである。谷筋の分岐部に位置している。東西方向のトレンチは、幅約6m×長さ約12mを測る。第7トレンチから続くSR01の南延長部の一部(南岸)を検出した。第7トレンチから南流するSR01は、第8トレンチ付近でその流れを大きく西に振る。また、小規模ではあるが、第8トレンチから第9トレンチ方向に続く流れも存在するようである。

第9トレンチ 第8トレンチの南東側、丘陵北側掘部に設けたトレンチである。トレンチは幅約7m×長さ約17mを測る。地表下約2mまで掘り下げたが無遺構・無遺物であった。

第10トレンチ 第7トレンチの南西側、第7トレンチのある平坦地から1段下がった水田に設けたトレンチである。第8トレンチの西に位置する。地表下約0.5mで淡灰色の粗砂層を検出し、トレンチ東端ではこの粗砂層を切って流れるSR01の北岸部を検出した。須恵器や土師器に混じって三彩陶器が出土した。

第11トレンチ 第10トレンチの南側に位置し、丘陵の北側掘部の水田に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約20mの規模を測る。トレンチ中央やや西側の地表下約0.4m付近で、弥生時代の素掘り溝(SD02)を検出した。

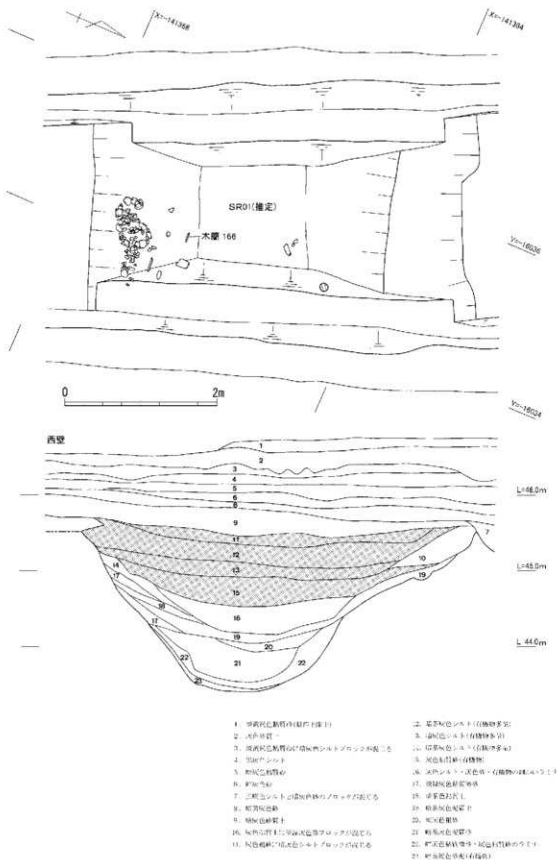
第12トレンチ 井関川右岸にあって、北に広がる丘陵部南裾に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約22mの規模を測る。耕作土直下から地表下約2.3mまでの間は、灰色系・黄灰色系の砂や砂礫が入り組んで堆積する。遺構の存在は確認できないが、古墳時代から近世まで遺物の出土をみた。遺物は須恵器や陶磁器であり、多くは器表面の摩滅が進む。トレンチ壁の土層観察から、当地は井関川の氾濫原とみられ、遺物は井関川上流部からの流入遺物と判断される。

第13トレンチ 第12トレンチの東側に設けたトレンチである。幅約4m×長さ約30mの規模を測る。地表下約1mまで掘削を行ったが、状況は第12トレンチと同じであった。

第14トレンチ 第7トレンチの北側、小規模な北側谷筋に設けたトレンチである。幅約2m×長さ約9mの規模を測る。当地は、最近まで溜め池であったとみられ、第7トレンチとの間に大規模な堰堤が築かれていた。トレンチ内では暗灰色粘質土の堆積がみられ、トレンチ西部から大溝SR01の北側延長部を検出した。特に土質が軟質であったことから完掘に至っていないが、須恵器や土師器の出土をみている。

第15トレンチ 東側谷筋の第1トレンチと第5トレンチの間に設けたトレンチである。幅約8m×長さ約21mの規模を測る。第5トレンチに近いトレンチ西端部から柱穴と判断した遺構を検出したほか、暗灰色粘質土の遺物包含層を僅かに検出した。トレンチ中央以東は砂と粘質土が自然堆積し、無遺構であった。

第16トレンチ 谷の口部にあたり、谷を横断する方向に設けたトレンチである。調査期間中の濁水排水溝の関係から、トレンチは谷の北半部にとどめた。トレンチは、幅約4m×長さ約



第29図 第16トレンチSR01実測図

21mの規模を測る。トレンチ南端部で大溝SR01を検出した(第29図)。このトレンチで検出したSR01については、トレンチ内で完掘を行った。当トレンチで検出したSR01は幅約5m、検出面からの深さは約2mを測り、護岸施設は確認できない。断面形は深いU字形を呈する。粗砂や砂・シルトや粘質土・有機物層が互層に堆積している。なかでも上層付近には葉を主体とした有機物を含むシルト層が堆積し、灯明皿・三彩陶器・墨書土器・木筒などの遺物も多量に含まれていた。木筒(166)はこの第15層の南岸部で、灯明皿群の下から出土した。

今回の試掘調査において検出した遺構は、検出もしくは部分調査に止めた。馬場南遺跡は平成20年度以降に面的調査を実施する予定であり、各遺構の詳細については割愛する。

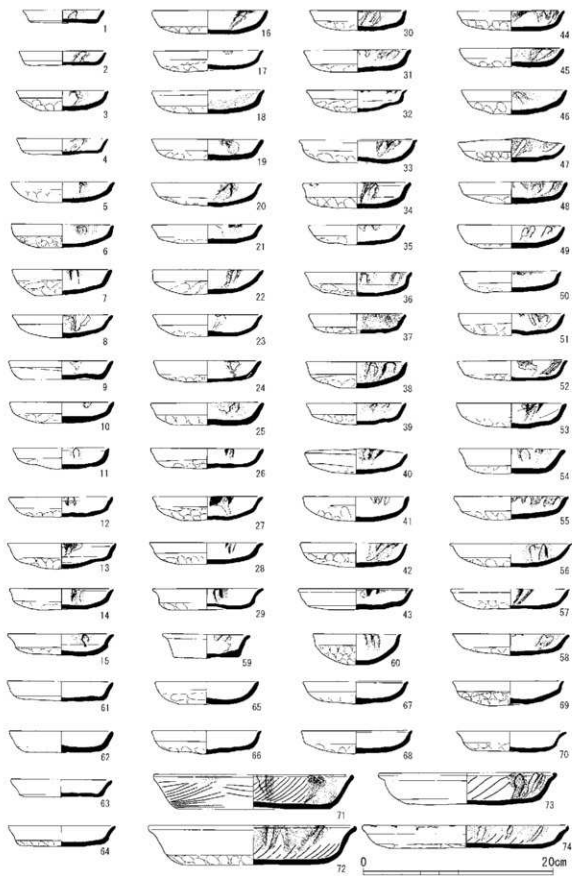
(2) 出土遺物

第30図1～74はSD01から出土した土師器の灯明皿と土師器皿である。第8トレンチからの出土が多数を占め、完形品の比率が高い。1～64は口径8.6(1)～13.1cm(56)の小型の皿で、底部へラ切りの59以外は全て手づくねである。皿は、口径が11cm前後と12cm前後を測るものが多い。1～58は灯明皿として使用され、口縁部に灰色から黒色の灯明痕(油煙痕)を残している。多くは1か所であるが、2～4か所みられるものも存在する。61～70は灯明痕のない皿である。内面中央部だけに薄茶色の汚れがみられる例がある。灯明皿には口縁部の外面から底部にかけて薄茶色の油煙の垂れ痕がみられるものがある。灯明痕のない皿の内面の汚れは灯明皿外底部の汚れと対応する状況からみて、灯明皿の台皿として使用された可能性が高い。

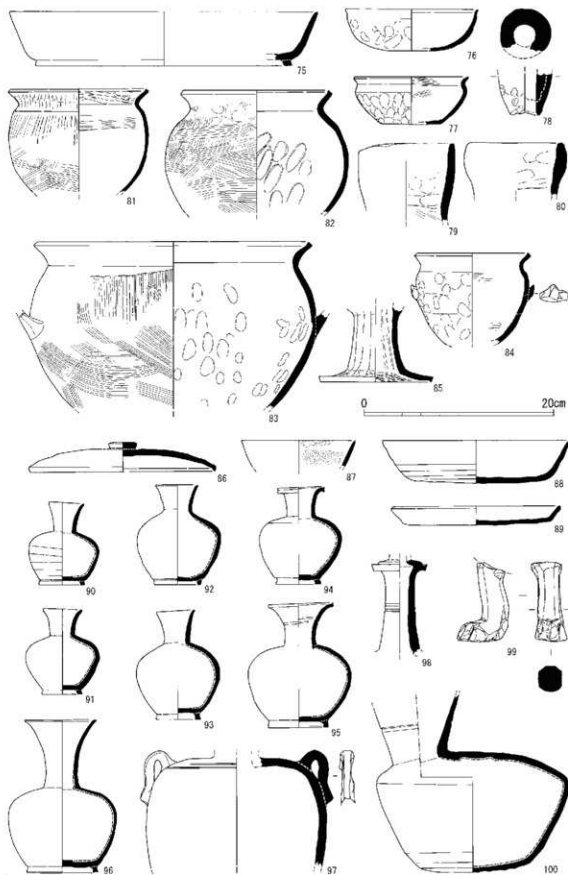
71～73は杯Aであり、灯明皿として使用されている。平らな底部は、71がヘラケズリ、72と73はナデである。口径19cm(73)と22cm前後(71・72)のものがみられる。74は皿Aであり、灯明皿として使用されている。底部はヘラケズリで口径は22cmである。小型の灯明皿は灯明痕が1～4か所であるが、71～74は口縁部の約半分から全周にかけて黒々としたタール状の固化した油煙が厚く付着している。71～74では灯芯の痕跡が10～20か所に上り、ことさらに灯芯数が多い。

第31図は土師器(75～85)と須恵器(86～100)である。75は杯Bである。口径22.6cm、器高5.5cmである。76は椀Cである。口径14.1cm、器高4.3cmである。77は壺Bで、広口である。底部は平底で、口縁部は短く外反する。口径12.2cm、器高5.1cmである。78はふいごである。先端部外面はガラス質化している。79・80は製塩土器である。口径は約10cmである。81・82は甕Aである。81は口径14.3cm、82は口径15.3cmである。83・84は甕Bである。相対する肩部2か所に把手をつける。84は口径11.9cm、83は口径29.3cmである。85は高杯の脚である。外面は面取りし、内部には絞り痕を残す。

86は壺である。直径19.8cmである。87は杯の口縁部である。内面には薄い朱が残る。88は杯Aである。口径19.9cm、器高4.4cmである。89は皿Aである。口径17.6cm、器高1.9cmである。転用甕でもあり、内底面は特に平滑である。90～95は壺Mで、外反する頸部は短い。器高は9.7～12.2cmである。96は壺Lで、長頸である。器高は16.2cmである。97は壺Nである。相対する肩部に耳状の把手を付ける。98は浄瓶である。細長い頸部には沈線をもつ。漏斗状の



第30图 灯明皿、土師器皿実測図



第31图 土師器、須恵器実測図

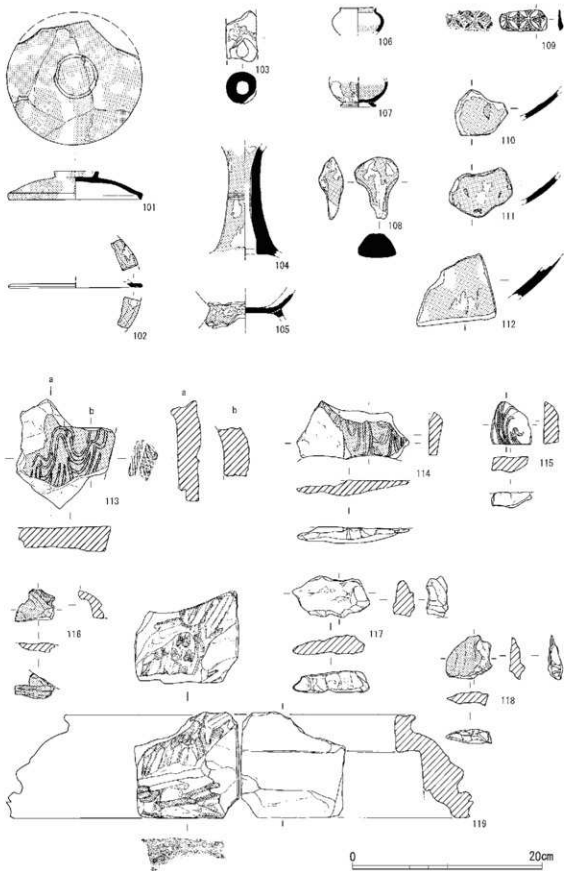
口縁部を欠く。99は須恵質の獸脚である。切込みによる指部の表現はリアルである。高さは8.3cmを測る。100は平瓶である。把手は付かない。

第32図101～119は奈良三彩の陶器である。多くの三彩陶器はS R 01の出土であり、還元作用によって三彩の発色は銀化してくすむ。奈良三彩の胎土は精良で白色を呈している。101・102は蓋である。101は頂部に輪状つまみをもつ。口径14.1cm、器高3.1cmである。103・104は水瓶の頸部である。胎土は軟質である。104はいわゆる二彩である。105は脚付の壺である。106・107はミニチュアの壺である。106は口縁が外反気味に短く立ち上がる。器表面の剥落が激しいが、緑色釉がみられる。口径は3.8cmである。体部径は5.5cmである。107の体部径は6.2cmである。108は脚である。胎土は軟質である。109はスタンプ文様のある土製品の一部であり、拓本も添付した。輪の中に花卉・子葉を配置したようにもみられるスタンプが連続する。元は施軸されていたとみられるが、素地のみが出土した。陶枕とも考えられるが、不明な点が多い遺物である。110～112は内外面の施軸状況や器壁のカーブから、鉢と考えられる。

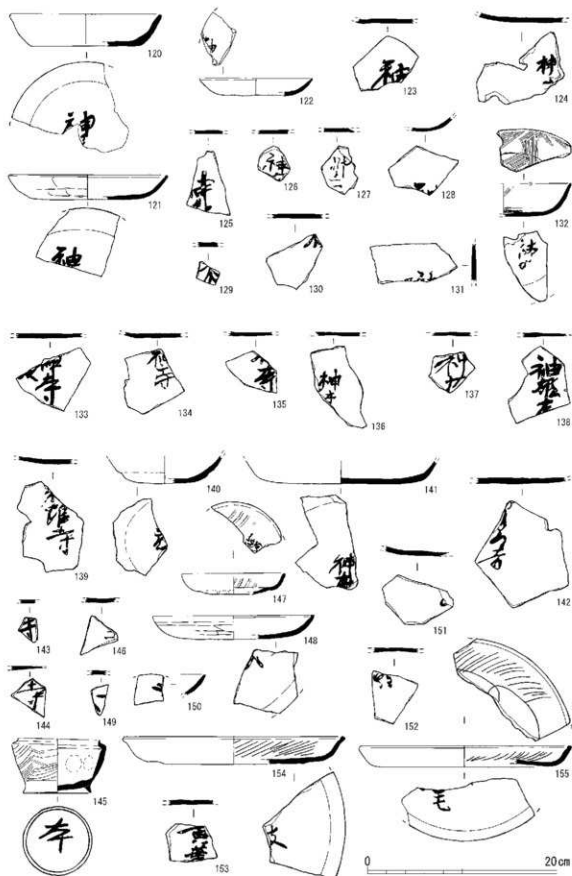
113～115は、水波文をもつ三彩の土製品である。表面にはヘラ状工具による平行する数本の沈線で水の流れが表現される。113は施軸部の左上端の胎土が盛り上がる（断面a）状況から、山河などを表現した立体感のある埴と推測される。水波文の沈線は深くシャープである。図面右側面は直線的に面取りされ、1本の太目の沈線とこの沈線に直行する3本の細い沈線が存在した。この沈線は埴の組み合わせ順の記号とみられる。残存長11.5cm、残存幅10.1cm、厚さは2.5cm以上である。素地粘土の焼きは硬い。114の水波文は影が浅く、113より不鮮明である。焼成はやや軟質である。図面下方の側面部は中央部に稜をもち、左右は緩やかなカーブを描いて面取りする。別部品との接合面と考えられる。残存幅は12.2cmである。115の水波文は影が深い。下端部は直線的に面取りする。116～118は表面の凹凸が著しく、山の一部分と考えられる。焼成は硬い。117の側面部は匙面取りしている。面取り部に薄い施軸が残る。焼成は軟質である。118は焼成が硬質である。119は円形の台座とみられる土製品である。台座は中空で、内面が階段状に上方にかけて窄まることから、木型の周囲に貼り付けられていたと考えられる。台座は数個の部品で構成されたとみられ、片方の側面に平滑な分割面がみられる。分割ラインは台座の中心を大きくはずしている。

上端側面のカーブは内径35.6cmを測る。表の側面は、饅頭形のカーブをもち、先の丸い円棒で側面から軽く突き刺したり、連続的に棒の側面を押し付けたような造形がみられる。凹面の幅は8mm程度である。所々に黒色銀化した施軸が残っている。下端部は約5cmの厚さがあり、端面には布目圧痕が残る。

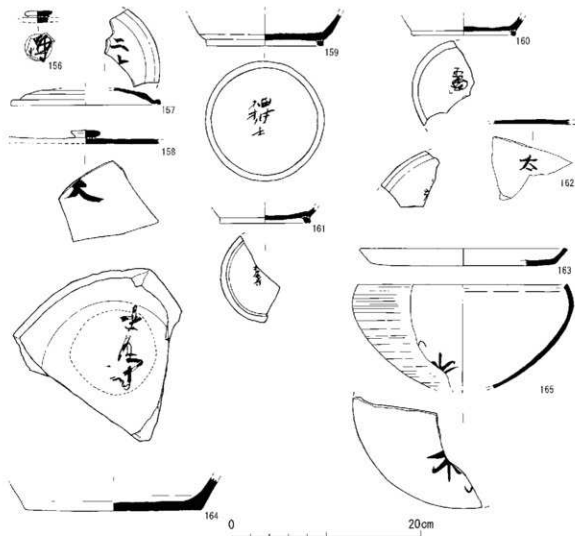
第33図120～155と第34図156～165は墨書土器である。墨書については奈良文化財研究所の赤外線写真の判定によるものが多い。120～155は土師器、156～165は須恵器に墨書が認められた。土師器では杯と皿の外面に墨書されるものが多いが、145のみ壺Eの底部高台内側に寺を墨書する。大多数の墨書は、120～145などにみる「神□寺」「神寺」「寺」が占めることから、寺院名を表したものとみられる。153は寺院名とは異なり、「黄葉」と判読できる。



第32図 三彩実測図



第33图 墨書土器実測図1

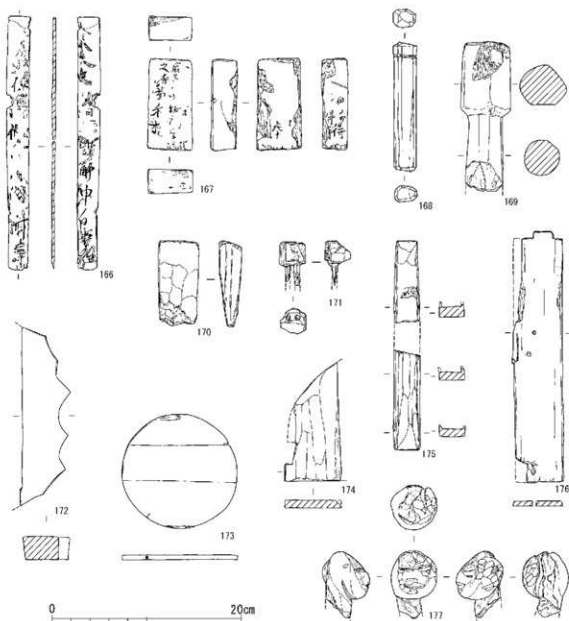


第34図 墨書土器実測図2

須恵器では蓋(156～158)・杯B(159～162)・皿(163)・壺(164)・鉢A(165)など各種の器に墨書が行われている。土師器にみられた「神□寺」・「寺」もみられるが、157の「二(カ)□」、158の「大」、162の「太」など、バリエーションが豊富である。なかでも、161は杯Bの底面に墨書されたものであるが、「□尾寺」と判読できる。164は壺の内底面に寺院名の墨書がみられる。第34図の破線内が特に平滑であり、転用硯として再利用されている。鉢Aの165は「鉢」とみられ、墨書は鉢を伏せた状態が文字の正位置となる。

第35図は木筒を含む木製品であり、SR 01から出土した。167のみ第8トレンチから出土し、他は全て第16トレンチからの出土である。木筒は2点(166・167)が出土した。166は第15層から出土した。長さ26.8cm、幅2.4cm、厚さ0.3cmの桎目板の両面に、墨書が認められた。木筒上端の小口面は面取りするが、下端はA面からB面方向に斜めに切り取られている。

赤外線判読では、A面には第1次墨書として「大(カ)大(カ)大(カ)大(カ) []」が認められ、更に下半部の第1次墨書の上に「謹解申日事」の第2次墨書が存在する。木筒の板面には刃物による削り痕がみられ、第1次墨書も肉眼観察では不鮮明ある。第1次の墨書は、第



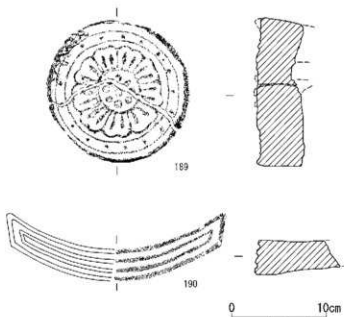
第35図 木筒、木製品実測図

2次使用に先立って削られたようである。A面の第1次木筒は習書木筒とみられ、第2次木筒は日時を上申する木筒である。B面の墨書は「[]」で判読し難い。A面の第1次の文字が板面の左側に偏り（B面では右側）、左側面に丁寧な調整が認められない。第1次木筒の当初の板幅は広く、再使用時に2枚の木筒材として分割したようで、第2次に伴う文字は木筒の中央に書かれている。

木筒167は、厚みのある角材であり、6面（A面～F面）のうち、5面に墨書や墨痕が存在する。角材は長さ9.5cm、幅4.8cm、厚さ1.6cmである。A面はほぼ全面に3行に渡って文字が墨書される。右から1行目は「□ □ □」、2行目は「麻呂□□□□□」、3行目は「之寺□□禾（カ）□」の墨書がみられる。側面Bには墨書・墨痕は存在しない。側面Cには中央下端付近に「奉」の一字がある。もう一つの側面Dには、下半部分に「得」の文字が縦1行に3文

字、左右2行の合計6文字の墨書がある。小口面のE面では角部の1か所、相対するF面にも2か所に墨痕がみられた。F面の墨痕のうち1つは、文字の可能性もある。この木簡も連続する同一文字の状況等から、習書木簡とみられる。

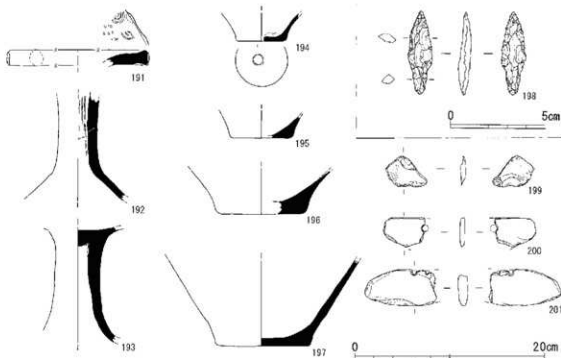
168・169は有頭棒である。168は全長13.8cm、幅2.3cm、厚さ最大1.8cmである。面取りした棒の断面形は楕円形に近く、片方の先端付近に切り込みを1周させて頭部を作り出す。切り込みは先端から1.5cmの位置にある。頭部の先



第36図 軒先瓦実測図

端は傘型に面取りする。棒の下端は縁を細かく面取りする。169は長さ8cm、幅4.2～5.3cmの頭部と、折損するが断面円形の棒部(残存長7.9cm)からなる。頭部の側面は約6面に面取りする。円棒部は直径約4cmで、頭部から棒端方向にやや太くなる。170は楔とみられる木製品で、厚みのある板の小口の一方を片面から斜めにカットして尖らせる。全長9cm、幅4.3cm、厚さ最大2.5cmである。171は、用途不明の木製品であり、小さな頭部の一方から、平行する2本の細長い棒が延びる。傘型に近い頭部は、長さ2.6cm、幅2.8cmである。細い棒状部は直径0.6cmである。細い棒状部は折損するが、残存長は2.2cmを測る。172も用途不明の木製品である。破片出土であるが、厚さのある円形の板の周縁部を連続的に匙面取りする。残存長は18.8cm、厚さ2.5cmである。173は曲物の底板である。直径12.2cm、厚さ0.5cmである。周縁部の端面に1か所、目釘穴が存在する。174は用途不明の部材である。折損しているが、半円形を呈する板の可能性もある。曲面に面取りした周縁部の下端付近に、長さ2.3cm×0.8cmの方形の切込みが存在する。残存長12.6cm、幅6cmである。175は、舟形木製品とみられる。細長い方柱板の、片方の板面中央部を0.6cm程削り込み、縁を残して舷側を作る。船底は平坦に仕上げる。軸先・艫は板小口のままである。破損品であり中央部を欠損している。欠損部を欠いた残存長は19.1cm、幅2.1～2.7cm、高さは1.4cm、舷側の高さは0.6cmである。176は、ホゾをもつ部材で、板は長さ26.6cm、幅5.2cm、厚さ0.5cmを測る。一方の小口に2cm×0.8cmの方形のホゾが存在する。中央付近に2か所、小さな円孔が存在する。円孔の間隔は2.4cmを測る。

177は、人形の頭部である。頭部は葛の瘤部分を、頸部は蔓をそのまま利用している。人形の頭部は蔓の一方をそのまま利用しているが、折損のため頭部以下は不明である。頭部は左側側頭部を中心に刃物で細かい調整を行い、頭部を丸く仕上げている。刃物による調整痕は右顔にも認められるが、その範囲は限定的である。顔は瘤の凸部先端を鼻に見立て、両目と口は鋭利な刃物



第37図 弥生土器、石器実測図

で切り込んでいる。切れ長の両目はやや吊上がる。頭部の高さは5.2cm、幅4.9cm、鼻から後頭部間は4.8cmを測る。人形の正面は円形に近いが、横顔は卵形である。

第36図189と190は調査の中で出土した軒丸瓦と軒平瓦である。189は複弁蓮華文軒丸瓦であり、平城6316型式に分類される。面径は15.7cmである。190は、重弁文軒平瓦である。平城6572型式に分類される。

第37図は、第11トレンチSD02と周辺部から出土した、弥生時代の土器(191～197)と石器(198～201)である。191は壺の口縁部である。口縁の周縁部に柳掻きの扇形文と列点文を施し、縁には円形浮文を付す。192・193は高杯の脚である。194は甌であり、底面の中央に円孔をもつ。195～197は底部である。

198はサヌカイト製の有茎石鏃である。全長3.9cm、鏃身部幅1.6cm、厚さ0.7cmである。199はサヌカイト製の削器である。刃部は両面から丁寧な押し剥離する。200・201は粘板岩製の石包丁である。

3. まとめ

今回の馬場南遺跡の試掘調査では、当初予想した須恵器窯は存在しないことが判明したが、当初予想していなかった遺構群を検出した。掘立柱建物跡と井戸、多量の灯明皿・須恵器・墨書土器の内容から、馬場南遺跡は、奈良時代後半期(土器編年平城IV期)の寺院関連の跡である可能性がある。遺跡は狭い谷筋にあり、伽藍建物の全てが、谷の中に存在するとは考えられず、多くの伽藍は調査地周辺の丘陵部に点在する可能性もある。周辺での地形観察では、第7トレンチの

背後の斜面部と東側尾根先端部に平地が存在するほか、さらに周辺部の尾根筋や斜面には幾つかの平坦地が認められる。このような平坦地に建物跡が存在する可能性が高い。このような状況から、馬場南遺跡は古代の山根寺院跡であると考えられる。

今回の調査では、多量の遺物が出土している。出土遺物は、一括廃棄されたとみられる多量の灯明皿のほか、多種多様な三彩陶器・須恵器・土師器・墨書土器・木簡・木器など、豊富な遺物の出土をみた。

馬場南遺跡の調査は、今回の試掘調査成果をもとに、現在、本格的な面的調査が実施されている。今年度検出した遺構の詳細を含め、今後の調査の成果に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

- 注1 中島 正「相楽郡木津町鹿背山瓦窯出土の古瓦」(『京都考古』第61号 京都考古刊行会)1991
- 注2 竹原一彦・柴 暁彦・他「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成18年度発掘調査報告(2)鹿背山瓦窯跡第1次」(『京都府遺跡調査概報』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注3 長谷川達他「5山城南部地区遺跡分布調査概要-日本住宅公団木津東部地区遺跡分布調査概要-」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1 京都府教育委員会)1981
- 注4 調査参加者(順不同)
調査補助員 渡辺理気・大谷博則・土屋菜摘子・田邊恵里香・金原裕美子・田邊恵里香・喜多萌夏・妻子拓也・鈴井宜雄・大江克己・宮澤まなか
整理員 山田三喜子・岡野奈智子・寺尾貴美子・清水友圭子・川村真由美・久米政代・藤井矢壽子・藤井聖名子・川端恵美・徳田千恵子
- 注5 小瓶、手付瓶の口縁部、把手が打ちかかれた類例は次のものがある。神木坂古墳群平安時代遺構SK03、丹切43号墳第3次床面遺物
- 注6 土器の機種呼称は、基本的に「平城宮発掘調査報告書XI」に準拠する。
 (『平城宮発掘調査報告書XI 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)1982
 松田真一ほか「神木坂古墳群」椋原町文化財調査報告 第2集 椋原町教育委員会 1986
- 注7 灰釉陶器については京都国立博物館尾野善裕氏に実現していただきご教示を得た。記して感謝の意を表す。手付瓶については越州窯の水注を模倣したものと考えられるが、小瓶への過渡的な器形と考えられ類例は少ないようである。年代は950～990年が与えられている。
 『北丘14号窯』(『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会)1981
 『北丘25号窯発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会 1984
 『大針4号窯発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会
 『北小木荻原2号窯地点遺跡』(『北小木古窯跡群発掘調査報告書』岐阜県多治見市教育委員会)1991
- 注8 参考文献
 『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』国立奈良文化財研究所 1996
 石井清司他「奈良山瓦窯跡群」(『京都府遺跡調査報告書』第27冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1999
- 注9 注2に同じ
- 注10 平安時代の古墓の集成を管見ながら末尾に付す。

- 注11 延喜式に嵯峨天皇の皇后橘嘉智子の父である橘朝臣清友の墓「兆城東西三町、南北二町守戸一畑」が山城国相楽郡加勢山墓として記されるが、場所について定かでない。木津川市鹿背山地区が候補地とされている。
- 注12 馬場南遺跡出土の墨書土器の一部と木簡については、赤外線写真撮影および判定にあたり、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所のご協力を得た。

No.	遺跡名	所在地	立地	発見の時期	掘の規模(長×幅[m])	掘の規模(m)	副葬品	時期
1	鹿背山瓦窯跡	京、木津川市鹿背山	丘陵南斜面	木炭窯	2.12×0.55	2.0×0.5(推定)	灰釉陶器2点、土師器壺1点	9c後~10c前
2	鳥居古窯	京、京丹波市御深町鳥居		木炭窯本窯			陶磁器、石巻、刀剣部、菓子 河原紙、奈良朝大佛	9c前
3	木塚墓54	京、右京区嵯峨野町	段丘下の平地	木炭窯本窯	掘径1.0×1.6(南北、東西)	1.9×0.5	須恵系滑石、緑釉陶器(白・黒)、土師器、鉄器(刀子等)	10c前
4	香取古窯	京、京都市西京区大枝		木炭窯		1.83×0.55	陶磁器、銅小銅、漆刀部小 銅、木品瓦片、木器瓦片	8c後
5	平安京跡、25340	京、中京区西ノ京御大寺町		木炭窯		1.65×0.4	土師器片、黒色土師器、古 子、銅製空三、銅鏡、漆器 部、骨、漆皮片、銅製鏡 (1枚のみ)	10c前
6	大日寺古窯	京、山科区藤森寺北大 日町		方形石籠内 木炭窯			緑釉系磁器	9c後
7	西野山古窯	京、山科区川田	盆地の中央部	木炭窯		2.7×1.35	陶磁器、石巻、金装大刀、刀 子、鉄部、漆器破片、黒色 土師、鉄器	9c前
8	安祥寺下寺古窯	京、山科区安来中小路 町、北郷敷町		木炭窯	外堀: 60×1.65、 内堀: 2.35×1.05	1.95×0.45~0.5	陶磁器、不明磁器製品、土 師器部、杯・碗、釘、不明 鉄部、銅部	9c後
11	長野古窯	京、向日市物集女		木炭窯			陶磁器、木品瓦片五、管状製 品、磁子	9c前
12	向井古窯	京、藤原郡宇治郡原ノ口		木炭窯			須恵系磁器	8c後
13	西山古窯	京、木津川市木津町	丘陵	木炭窯	2.7×1.3	2.0×0.45~0.5	棺内 冠	8c後
14	平吉古窯	京、高市郡明日香村	丘陵斜面	木窯	2.12×0.55	1.86×0.4	滑石土 磁器片、石巻、磁 石、須色陶磁子、黒色土師 部、漆器土器 土師器杯	9c前
15	御料南山1号墳	京、嵯峨町		木棺			刀子	9c末~10初
16	御料南山3号墳	京、嵯峨町		木棺			刀子、須恵系平皿	9c後
17	神木坂1号墳跡(30)	京、嵯峨町原京	丘陵南西斜面	木棺(説)	墓坑1.15×0.73		八層鏡、須恵系灰釉陶器	10c前
17	東中谷遺跡2号墳	京、高取町	丘陵斜面	木炭窯			土師器片、銅鏡(1枚)、 鉄部	8c(鏡製作)
18	太安萬原墓	京、奈良市比叡町	丘陵斜面	木塚			磁器(T27)、真珠、鉄片	8c前
19	高安山第10号墳	京、生駒郡三郷町		木塚	3.0×1.5		土師器片、石巻、銅板、鉛 製部、神出滑石、萬年通書	9c前
20	伏原古窯	京、嵯峨町森原字若尾		炭			須恵系、重書形、灰輪造、 鉄器(磁器?)、八層鏡	9c前
21	奈良市六条西木 塚墓	京、六条西	丘陵南斜面	木塚	墓坑1.5×0.7×0.5 木塚0.7×0.36			8c後半~9c 初頭
22	小治原伏原墓	京、天理市都村甲岡		木塚			磁器	8c前
23	岡本山古窯跡本 塚墓1	大、高槻市岡本町字東山	丘陵南斜面	木棺	墓坑長2.4m、幅0.95 m、深さ0.3m	2.0×0.45m	棺内 土師器部、須恵系丸 板、刀子、骨金具(青銅製 鏡部)、今茅子(土製丸形、 深方、底丸)	平安末
24	岡本山古窯跡本 塚墓2	大、高槻市岡本町字東山	丘陵南斜面	木塚墓			土師器瓦片、鉄釘	9c
25	上野の里遺跡、 墓1	大、藤井寺市道明寺		木棺	墓坑長2.75m、幅1.2 m、深さ0.45m	1.8×0.5m、(棺 内)長2.5m	漆器片、土師器(灰方、丸 形)、土製瓦片、古シ	8c後半~9c 初頭
26	上野の里遺跡、 墓2	大、藤井寺市道明寺		木炭窯		0.7×0.4	須恵系長頸瓶、灰口器、鉄 釘	8c後

3. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成 19 年度発掘調査報告

1. はじめに

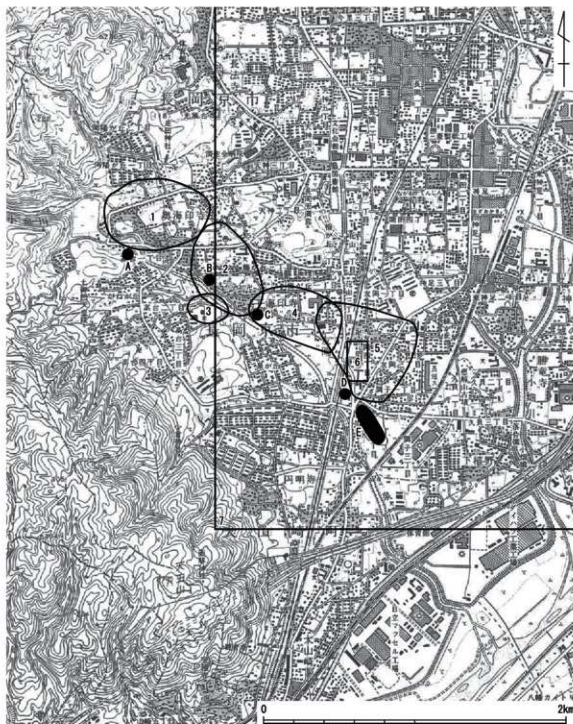
京都第二外環状道路は京都西南部の交通渋滞緩和のため名神高速道路大山崎ジャンクションから京都縦貫道路沓掛インターチェンジまでの高速道路である。この道路の予定地は長岡京跡、下海印寺遺跡、伊賀寺遺跡をはじめとする多くの遺跡を横切る。平野部においては道路計画地点が、⁽⁸¹⁾淀川支流の小泉川に近接することから、遺跡が河川によって破壊されている可能性がある。また、長岡京は 10 年間の都であり、七条や八条地域に条坊が施工されているかが注目される地域でもある。そのため遺構の有無を確認するため、平成 15 年から路線内の試掘調査を先行して開始し、用地買収の進捗にあわせ面的な発掘調査を必要とする地点の調査を実施してきた。本年度は表 1 に示したように 9 地点の試掘調査と 3 地点の本発掘調査を実施した。

発掘調査地点は大きく荒堀地区・尾流地区・上内田地区・下内田地区・友岡地区・調子地区の 6 つの地域に別けられるが、上内田地区・調子地区では複数の調査が行われ、連続して実施されていないものも含まれるが、地域ごとの調査結果を提示したい。また、下内田地区では、縄文時代の集落跡を確認したが、別冊で報告する予定である。なお、本報告で使用している座標は、国土座標日本測地系第 6 座標系による。

荒堀地区は長岡京市奥海印寺荒堀に所在する。旧石器時代から近世までの複合遺跡である奥海印寺遺跡に近接し、律令期の須恵器を焼成した鈴谷窯推定地の近くである。鈴谷窯については須恵器窯として報告されているが、正確な位置が特定されていない。窯跡が連続的に作られていることも稀ではないことから、関連する遺構の検出が期待された。発掘調査は長岡京跡右京第 902 次調査の一連の試掘調査として実施した。

尾流地区は長岡京市下海印寺尾流に所在する調査区で、旧石器時代から近世の複合遺跡である下海印寺遺跡に含まれる。京外に位置しているが長岡京西京極大路と、多数の人面土器や土馬が出土し、長岡京の祭祀場として有名な西山田遺跡に隣接する。今回の調査地南側の長岡京跡右京 851 次調査⁽⁸²⁾では、長岡京期の土馬片が出土した流路跡が検出されていたことから、西山田遺跡と同じく水辺の祭祀が行われた跡が検出される可能性も指摘できた。長岡京跡右京第 902 次調査の一部として実施した。

上内田地区は、長岡京市下海印寺上内田に所在する調査区で、縄文時代から近世までの遺跡である伊賀寺遺跡に含まれる長岡京跡右京七条四坊十二町（旧条坊七条四坊十町）に相当する。平成 19 年度は、長岡京跡右京第 901・902・926・928 次調査として実施した。第 901 次調査は、平成 18 年度に実施した長岡京跡右京第 870 次調査区の西側に接した調査である。第 890 次調査にお



第1図 調査地位位置図 (国土地理院 1/25,000 西南部・淀)

1. 奥海印寺遺跡 2. 下海印寺遺跡 3. 西山田遺跡 4. 伊賀寺遺跡 5. 友岡遺跡 6. 鞍岡庵寺
7. 長岡京跡 (A: 荒堀地区 B: 尾流地区 C: 上内田地区 D: 友岡地区 E: 調子地区)

いて古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出されていたことから、面的な調査として実施した。また、901次調査で検出した遺構の西への広がりを確認するため試掘調査を実施した。試掘調査は長岡京跡右京第902次調査の一環として実施した。この試掘調査によって遺構が確認できたことから、長岡京跡右京第901次調査区と長岡京跡右京第902次試掘調査区との間の面的な調査を実施したの

付表1 平成19年度調査次数一覧

調査次数	調査種別	地区	地区略号	調査面積	概要
901	本掘	上内田	OKD-4	1400㎡	古墳時代初頭の溝
902	試掘	尾流	OOR-6	100㎡	小泉川旧河道
		上内田	OKD-5	200㎡	古墳時代初頭の住居跡
		荒堀	PHR-2	350㎡	土石流の痕跡
		調子	RHK-3	150㎡	流路跡
926	試掘	友岡	NKR-4	200㎡	流路跡
		調子	RHK-4	150㎡	中世の柱穴・溝
		上内田	OKD-6	400㎡	流路跡
927	試掘	岸ノ下	OKT-4	400㎡	小泉川旧河道
	本掘	下内田	OOD-4	800㎡	縄文時代住居跡
928	本掘	上内田	OKD-7	400㎡	古墳時代初頭の住居跡・土坑
	試掘	調子	RHK-5	200㎡	中世の柱穴・土坑

が長岡京跡右京第928次調査である。

上内田地区の遺構の広がりをもさらに確かめるために、長岡京跡右京第901次調査南側と長岡京跡右京第902次調査西側に試掘トレンチを設け遺構の確認を行なった。本稿では調査成果を上内田地区の調査トレンチが隣接することからまとめて報告したい。

友岡地区は長岡京市友岡河原に所在し、長岡京跡右京第926次調査として実施した。長岡京跡右京八条三坊六町・十一町、東三坊坊間小路（旧条坊八条三坊八・九町）推定地にあたる。鞍岡廃寺推定地にも隣接する。

調子地区は長岡京跡右京第902・926・928次調査（試掘調査）として実施した。いずれも長岡京市調子二丁目に所在する。長岡京跡右京第902次調査の調子地区試掘地は長岡京右京八条三坊五町にあたる。第926次調査地は長岡京跡右京九条三坊一町（旧条坊八条三坊三町）にあたる。第928次調査は長岡京跡右京九条三坊一・二町、九条坊間北小路（旧条坊八条三坊三・四町、八条坊間南小路）にあたる。

下内田地区を対象とした第927次調査では、縄文時代の遺構がまとまって検出されたため、整理作業を進め、別報告として次年度に刊行する予定である。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森 正、次席総括調査員辻本和美、主任調査員戸原和人、同増田孝彦、同中川和哉、専門調査員竹井治雄、調査員高野陽子が担当した。報告については各担当者が分担執筆し、文末に文責を示した。今回の調査に係る経費については、国土交通省近畿地方整備局が負担した。現地調査においては、周辺住民の方々および関係諸機関のご協力を得たことと、調査および整理作業に参加していただいたの方々に対して深くお礼申し上げたい。

(中川和哉)

2. 各地区の調査概要

(1) 荒堀地区（7ANPHR-2地区）

今回の調査地は長岡京市下海印寺荒堀地区内に所在し、鈴谷瓦窯跡に推定される地点付近にあり。現地調査は、平成19年5月7日～同年5月30日の期間をあて、調査は調査第2係長森正と専門調査員竹井治雄が担当した。

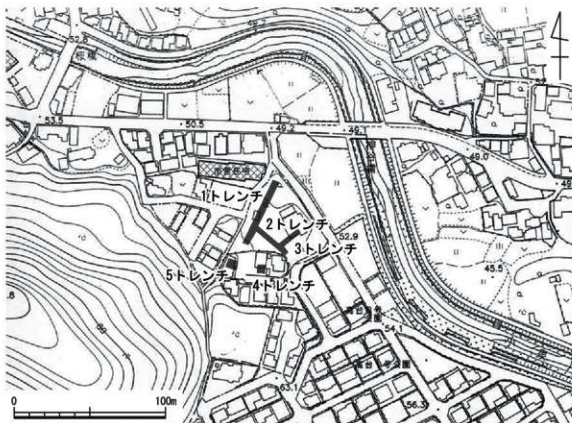
調査地の現況は標高51～57mの緩斜地に位置する宅地跡である。調査は1～5トレンチを設定し、調査面積は350㎡である。調査の結果、大規模な土石流、大阪層群と考えられる堆積を確認した。

1～3トレンチ 調査地斜面の堆積土はおもに厚さ0.5mを測る淡褐色粘質土であり、遺物は近世陶磁器、土師器、瓦器、須恵器片等が出土した。調査地の北東部標高51mの平坦部は造成、整地が認められ、宅地等の土地利用がうかがわれる。大規模な土石流は1・3トレンチの北側斜面、標高51～53mの地点で検出した。堆積状況は、人頭大、拳大の角礫が厚さ1.5mにおよび北西から南東方向に堆積する。出土遺物はなく、時期不明である。地表下1.2mにおいて地山層を確認した。この層は、粘土層、シルト層、砂層の互層からなる大阪層群、あるいはその上部洪積層であり、南北断面では傾斜角は5度、北側が高く傾く。

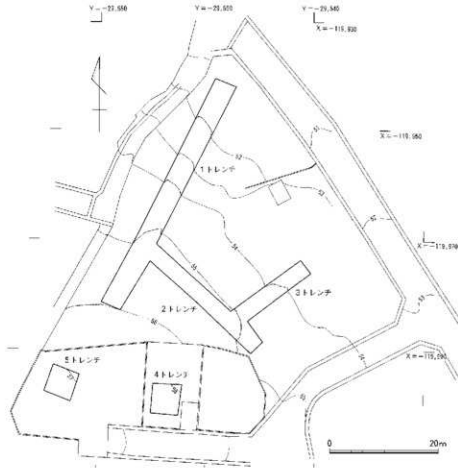
4・5トレンチ 現況は宅地跡である。地表下2m以上まで造成、整地されており、遺構・遺物はなかった。

調査の結果、長岡京跡に関連する遺構・遺物等は確認されなかった。

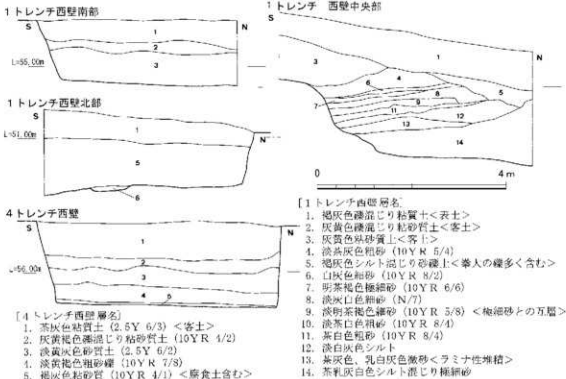
（竹井治雄）



第2図 右京第902次荒堀地区調査地位置図



第3図 右京第902次発掘地区トレンチ配置図



第4図 右京第902次発掘地区1・4トレンチ断面図

(2) 尾流地区 (7 ANOOR - 6 地区)

調査地は長岡京市下海印寺尾流1-1に所在し、字名では尾流と呼ばれる水田である。調査地の北東には段丘崖を接して縄文遺跡として著名な下海印寺遺跡が所在している。

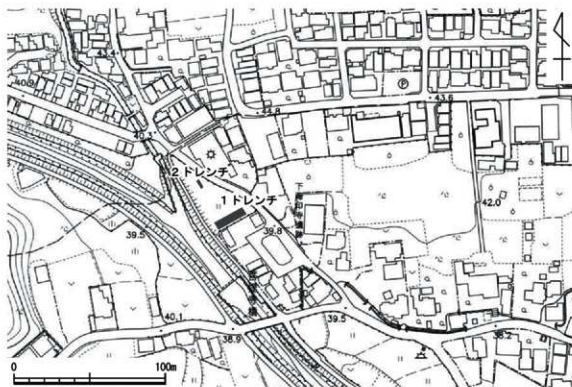
今回の調査は100mを試掘調査として実施した。現地調査の期間は平成19年5月21日～同年6月4日を要した。調査には、調査第2課調査第2係長森 正と同主任調査員戸原和人があつた。

本調査地の周辺では、南東方向に接して、昭和56年度に当時の建設省によって施行された小泉川の改修工事に伴い調査された右京第49次調査と、平成17年度に調査された右京第851次調査がある。

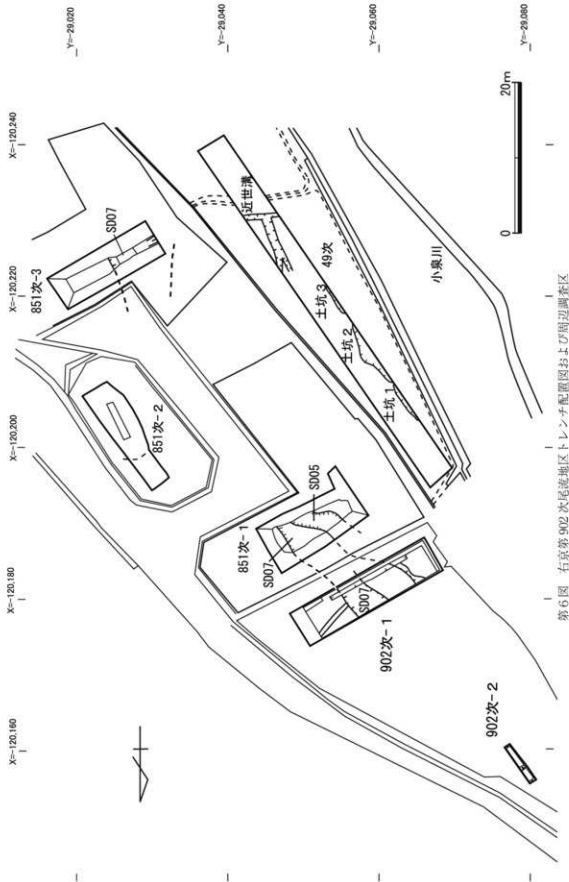
第851次調査では、3か所のトレンチのうち1・3トレンチで、長岡京期の可能性がある流路跡を確認した。西北西から東南東に、幅2～2.5mの規模を有し、深さは約0.6mである。埋土より、須恵器壺底部片、土馬片が出土しており、1トレンチではこの流路の下層でそれ以前の流路幅約5m、深さ1.4mを検出し、内部には砂礫が堆積していた。また3トレンチでも最下面の南端で砂礫を埋土とする流路となっており、出土遺物より古墳時代のもつと判断されている。

今回の調査は第851次調査1トレンチに平行する第902次1トレンチとその西で直交する方向の2トレンチの2か所のトレンチを設定しておこなった。

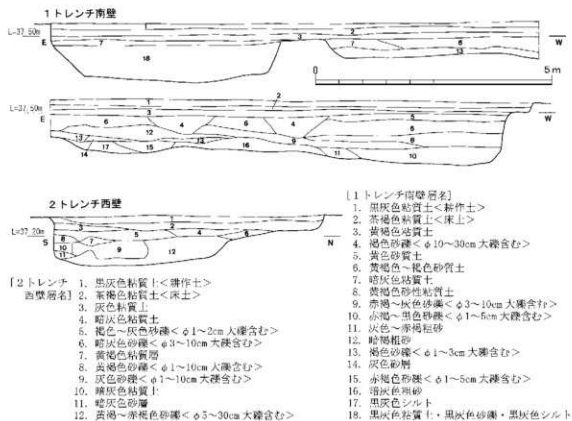
南東に設けた1トレンチでは耕作土と床土の下位で、水田耕作に伴うと考えられる溝S D 01と長岡京期の可能性がある流路跡を確認した。この流路跡は右京第851次調査で検出した溝S D



第5図 右京第902次尾流地区調査地位図



第6図 右京第902次尾流地区トレンチ配置図および周辺調査区



第7図 右京第902次尾流地区1・2トレンチ断面図

05とSD 07にあたと判断し同じ遺構番号を踏襲した。

溝SD 05 西北西から東南東に、幅2~2.4mの規模を有し、深さは0.6mである。砂礫を埋土とする流路である。

溝SD 07 西北西から東南東に伸びており、溝は3~4mの規模まで検出したが、流路の幅は、トレンチ外に延びるため不明である。検出した深さは約0.6mである。腐食質から粘質土で埋まっており、須恵器片、土師器片が出土している。

北西に設定した第2トレンチでは湿地状堆積をなし、下層で南西方向に落ち込む地形を検出した。以下は砂礫の堆積となり顕著な遺構は確認できなかった。

小結

1トレンチで、長岡京期に比定できる可能性のある溝もしくは流路跡2条を検出した。また、水田耕作に伴うと考えられる溝SD 01からは瓦質羽釜の足が出土している。

本調査地の南約140mには、長岡京期の国家的な祭祀場と考えられている西山田遺跡があり、多量の土馬や墨書人面土器、ミニチュア竈等が出土している。今回、その上流地点の調査で同時期の溝SD 07を検出したことと、その溝内から複数の土馬が出土したことは、同様な祭祀が広範囲に執り行われていた可能性を示唆するものである。

(戸原和人)

(3) 上内田地区

調査地は長岡京市下海印寺上内田に所在し、長岡京跡右京七条四坊五町・十一町・十二町にあたる。

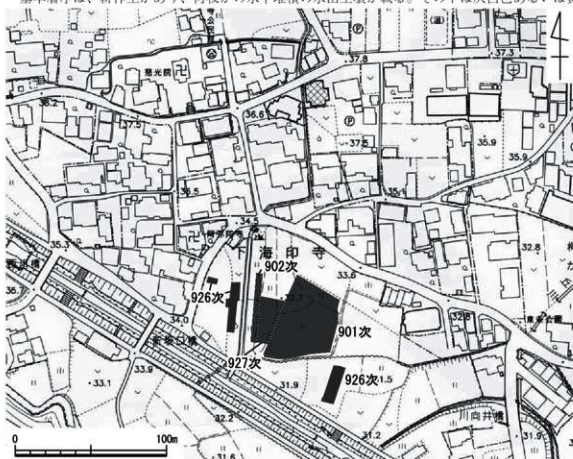
①長岡京右京第901次調査(7ANOKD-4地区)

発掘調査は、調査第2課第2係長森 正・同主任調査員中川和哉・同専門調査員竹井治雄が担当した。現地調査は平成19年4月24日～同年11月26日まで実施した。

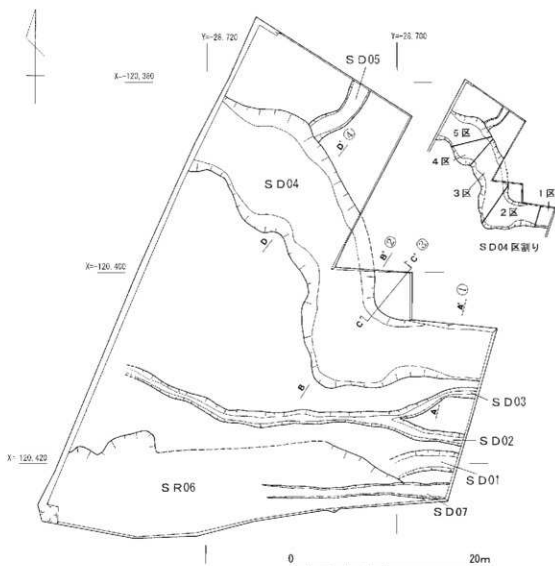
右京第901次の調査地は、平成18年度右京第890次調査に隣接する地区である。右京第890次調査では古墳時代後期の竪穴式住居跡、鉄滓を含む古墳時代の流路跡、中世の柱穴などを検出した。長岡京市教育委員会が発掘調査を実施した右京第162次調査では、ほぼ真北を向く奈良時代の掘立柱建物跡2棟分を検出している。

遺跡の立地する場所は、淀川支流小泉川の左岸である。現在の小泉川は河川改修によって直線に流路を改変されているが、本来は大きく蛇行し、広い氾濫原を持っていた。調査地は小泉川が大きく蛇行する湾曲の内側にあたる。調査地の基盤層は、大阪層群に不整合で重なる河川堆積物である。礫を主体としてラミナ状の堆積や、洪水性の土石流が見られる。河川から離水した時期は、遺構から古墳時代初頭以前であることは明らかである。離水した以後も洪水による土砂の掘り込みがあり、流水の影響を受けたことがわかる。

基本層序は、耕作土があり、何枚かの水平堆積の水田土壌が載る。その下は灰白色あるいは黄



第8図 上内田地区調査地配置図

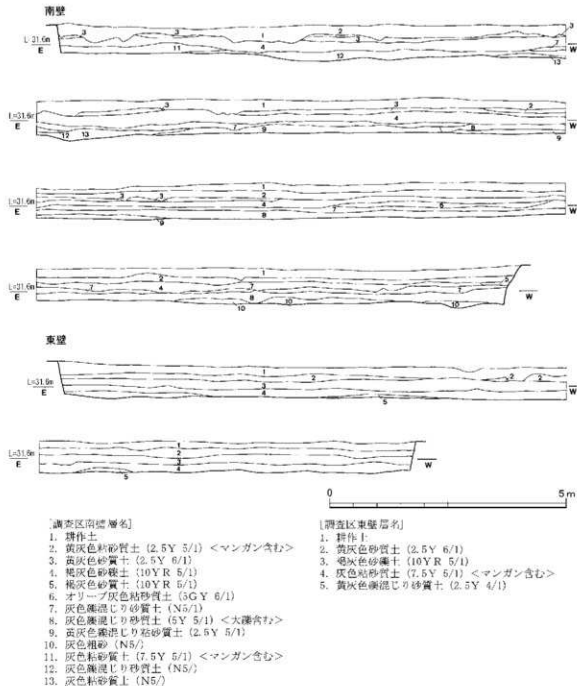


第9図 右京第901次上内田地区遺構平面図

褐色の粘質土、あるいは礫層があり不整合面を形成する。この面は上層の水田面と同じくほぼ水平で、層理面は小礫と遺物が多く出土する。遺物には古墳時代、奈良・平安時代のものもあるが、中世前期の遺物も含まれる。凹凸があると考えられる、複雑な堆積を見せる面が水平であることと、遺物集中層を形成することから、中世前期の土地利用の改変によるものと想定できる。

溝 S D 07 東で北に3度傾くはほぼ東西方向の溝である。遺物は出土しなかった。右京第890次調査で検出した S D 02 と同一のものと考えられる。右京890次調査では、遺構の新旧関係の検討から古墳時代後期以後のものであることがわかった。検出長約20m、幅約1.2mを測る。隣接する右京第890次調査区西部では、溝の痕跡が下層に写ったものであることが想定できたが、今回の溝もまた、断面で明確でなく平面のみで検出できた。右京第162調査で検出された掘立柱建物群と方位を同じくすることから同時代と想定できる。長岡京条坊とは一致しない。

流路 S D 01 調査区南東部で検出できた小礫を主体とする土によって埋められた流路である。西側は削平され続かない。古墳時代後期以降に形成されたと考えられる。右京第890次調査の S

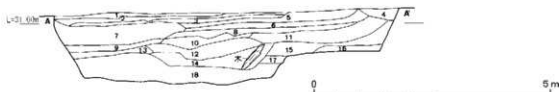


第10図 右京第901次上内田地区調査区断面図

R 36 と同一遺構とみられる。検出長約8m、幅約2m、深さ約0.3mを測る。

流路SD 02・SD 03 右京第890次調査区から続く古墳時代後期の流路跡である。

流路SD 04 調査区域を蛇行して流れる流路跡である。上層にはシルト質の古墳時代の堆積層が載るが、中・下層は古墳時代初頭の遺物のみが出土する。また、中・下層の堆積には砂礫・砂・シルトが互層を為している状態が見られ、一定の水流があったと考えられる。流路内からは甕を中心に土師器が出土しているが、第12図で見るように完形のまま、土圧で破損した状態で検出できた。こうした完形率の高い土器は、人工的な木の組み合わせや木製品の出土した周辺で多く



S D 0 4 土層断面図①

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1. 灰褐色粘砂質土 (10YR 7/1) | 10. 暗褐色粘砂質土 (10YR 5/1) |
| 2. 褐灰色粘質土 (7.5YR 6/1) | 11. 褐色粘砂混じり粘質土 (10YR 6/1) |
| 3. 褐色粘質土 (7.5Y 5/1) | 12. 赤褐色粘砂 (10YR 6/4) |
| 4. 灰褐色粘砂質土 (10YR 5/1) | 13. 赤褐色粘砂 (10YR 5/3) |
| 5. 暗褐色粘砂質土 (10YR 6/2) | 14. 暗褐色粘砂 (10YR 4/1) |
| 6. 灰褐色粘砂混じり粘質土 (10YR 6/2) | 15. 暗褐色粘砂 (10YR 6/3) |
| 7. 灰褐色粘砂 (2.5YR 4/2) | 16. 青灰色粘砂 (10BG 6/1) |
| 8. 灰褐色粘質土 (10YR 6/1) | 17. 青灰色粘砂 (10BG 5/1) |
| 9. 褐色粘砂 (10YR 5/1) | 18. 青灰色粘砂 (10BG 5/1) |



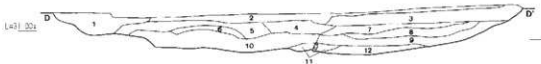
S D 0 4 土層断面図②

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1. 黒褐色粘質土 (5YR 2/2) | 8. 灰色粘混じり粘質土 (10Y6/1) |
| 2. 淡褐色粘砂質土 (5YR 2/2) | 9. 暗褐色粘質土 (N4) <炭化物含む> |
| 3. 淡灰色粘質土 (10Y 6/1) | 10. 明赤褐色粘砂 (5YR 7/3) |
| 4. 淡青灰色粘質土 (10GB 6/1) | 11. 暗青灰色混じり (10GB 3/1) <腐食土混じる> |
| 5. 褐色粘質土 (5YR 6/1) | 12. 灰色粘混じり粘砂 (10Y 6/1) <小礫含む> |
| 6. 淡褐色粘砂混じり粘質土 (5YR 6/1) | 13. 褐色粘砂 (7.5Y 6/8) |
| 7. 褐色粘砂 (7.5Y 6/8) <小礫多く含む> | 14. 灰色粘 (10Y 6/1) |
| | 15. 淡灰色粘砂 (10GB 6/1) |



S D 0 4 土層断面図 (断面) ③

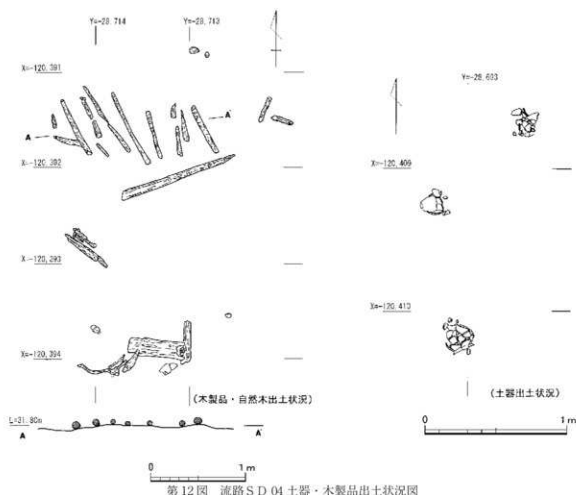
- | | |
|----------------------------|---------------------------|
| 1. 淡褐色粘質土 (5YR 6/1) | 8. 灰白色粘質土 (10Y 6/1) |
| 2. 明赤褐色粘砂混じり粘砂質土 (5YR 5/6) | 9. 淡褐色粘質土 (7.5Y 6/1) |
| 3. 明赤褐色粘砂混じり粘砂質土 (5YR 5/6) | 10. 暗褐色粘砂混じり粘砂 (5YR 5/1) |
| 4. 明赤褐色粘質土 (7.5Y 6/1) | 11. 灰白色粘質土 (10Y 7/1) |
| 5. 淡褐色粘砂質土 (7.5Y 6/1) | 12. 淡褐色粘砂 (7.5Y 6/1) |
| 6. 暗赤褐色粘砂 (6YR 5/6) | 13. 暗青灰色粘砂混じり粘質土 (5B 4/1) |
| 7. 淡褐色粘砂質土 (7.5Y 7/1) | 14. 灰色粘 (7.5Y 6/1) |
| | 15. 暗褐色粘砂 (N4) |



S D 0 4 土層断面図④

- | | |
|----------------------------|--------------------------------|
| 1. 暗褐色粘質土 (5YR 2/2) | 7. 灰褐色粘砂 (5YR 5/2) |
| 2. 明赤褐色粘砂混じり粘砂質土 (5YR 5/6) | 8. 灰褐色粘混じり粘質土 (2.5Y 6/2) |
| 3. 明赤褐色粘砂混じり粘砂質土 (5YR 5/8) | 9. 明赤褐色粘砂 (5YR 4/8) |
| 4. 褐色粘砂 (5YR 5/1) | 10. 暗褐色粘質土 (2.5Y 6/1) <腐食土混じる> |
| 5. 褐色粘砂 (5YR 6/8) <小礫多く含む> | 11. 灰色粘質土 (N4) |
| 6. 淡褐色粘砂質土 (5YR 6/1) | 12. 灰褐色粘砂 (N5) <華人の糞多く含む> |

第11図 流路S D 0 4断面図



第12図 流路S D 04 土器・木製品出土状況図

発見される。第12図は棒状の木製品が8本平行に配列され、その南東側に横方向に板が置かれている。また、柱根状に底部が平らな直径20cm程度の柱が垂直に立って検出できる部分もあった。なお、流路中からサヌカイト製石鏃(図版24-2a)が出土したが、混入とみられる。

流路S D 05 S D 04によって切られる溝状の遺構であるが、人為的であるかについての確証はない。遺構の前後関係から古墳時代後期以前の時期が与えられる。

河道S R 06 人頭大の礫を含む河川状堆積物による流路跡で、埋土から摩滅の著しい土師質の土器片が出土した。深さは断ち割りによって1.8mまで掘り下げたが底は検出できなかった。

小結

今回の調査地では、西隣接地点(右京890次)で確認していた古墳時代後期の遺構の広がりを想定したが、調査の結果、同時期の集落の広がりは認められなかった。

一方、右京第890次調査では、断ち割り調査でほとんど遺物が出土しなかったS D 04から多量の古墳時代初頭の土器が出土した。第890次調査では同時期の土器はほとんど出土していない。今回の調査地に隣接して古墳時代の明確な遺構があるものと予測されたが、同年度に実施した隣接地の第902次試掘調査によって同時期の竪穴式住居跡が検出された。長岡京期の明確な遺構は検出できなかった。

(中川和哉)

②長岡京右京第902次・928次調査（7ANOKD-5・7地区）

右京第928次調査は、右京第902次調査の試掘結果を受け、本調査を実施したものである。右京第902次調査は、右京第901次の調査期間中に実施し、200mを試掘調査した。右京第928次調査は、その東を拡張して調査区を設定し、400mを対象に本発掘調査を実施した。調査期間は、平成19年11月23日～平成20年1月17日である。右京第902次調査は、調査第2課調査第2係長森 正と同主任調査員増田孝彦が担当し、また右京第928次調査は調査第2係長森 正と同調査員高野陽子が担当した。

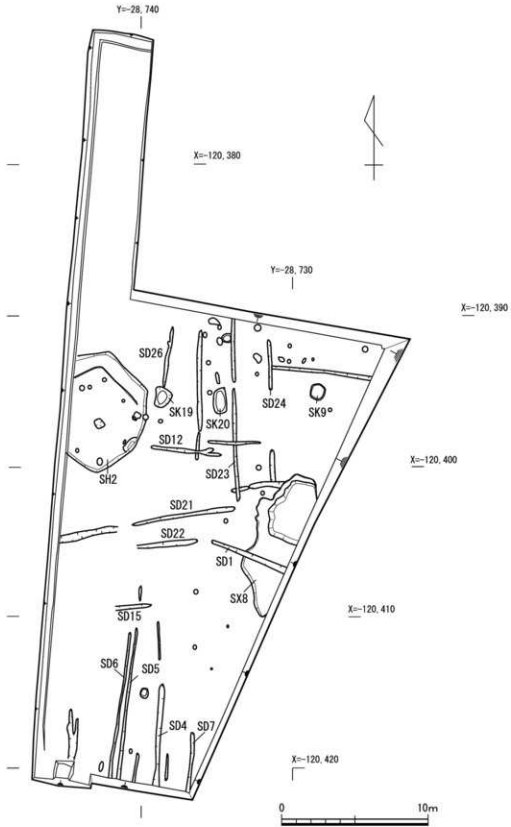
調査地周辺の現地表面は、標高約32.5mを測り、地表下約0.8mで、ベース面となる青灰色粘土層を確認した。基本層序は、耕作土以下、上層から順に褐色粘砂質土、灰色礫混じり砂質土、オリブ灰色粘砂質土の順に堆積する。厚さ約0.2mのオリブ灰色粘砂質土層から近世遺物が出土したため、この面まで重機掘削を行い、その下層を人力掘削によって調査を進めた。

今回の調査の主な検出遺構は、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴式住居跡1基と土坑2基、中世の土坑1基と落ち込み1基、中世以降の素掘り溝群等である。

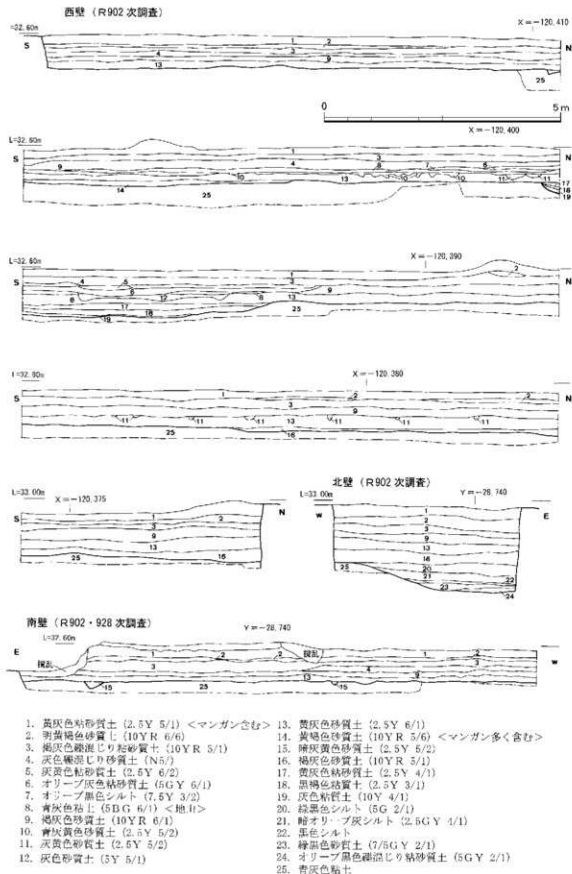
竪穴式住居跡SH2 調査区北西で検出した住居跡である。右京第902次の試掘調査の際に、すでに西側の4分の3以上を検出していたが、右京第928次調査で東側の残り部分を検出した。住居床面の一部は調査範囲外となっているが、住居の平面形はやや歪な六角形に復原することが可能で、いわゆる多角形住居である。住居床面からは8基の柱穴を検出したが、このうち3基（第15図P1～P3）が主柱穴とみられる。調査範囲外の地点の柱穴を復原すると、4主柱で構成される主屋と推定される。また本調査において、試掘部分の精査を行い、床面で北側2辺に平行して幅約1mのいわゆるベッド状遺構とされる高床部を検出した。高床部の本来の高さは約0.15mを測り、この上面で高杯1点が出土した。床面中央では径約0.6mの円形の中央土坑を検出した。炭化物が多く出土し、炉として用いられたものとみられる。住居内土坑としては、南東部の壁際でも土坑を検出した。幅約1.0m、深さ約0.4mを測る。土坑は壁体の隅角に掘削され、隅角と土坑を結ぶライン上の内寄り、長さ0.2m、深さ0.25mの楕円形の小規模な柱穴（第15図P4）を検出した。梯子などの昇降のための施設に伴う遺構の可能性があり、その場合はこの部分が住居入口になると考えられる。また試掘では、住居の検出面で多量の礫が出土しているが（図版第10-1）、いわゆる土屋根に礫が用いられる例があることから、本例の屋根部もこうした構造であった可能性がある。出土遺物は、埋土層から2片のサヌカイト剥片が出土した（図版第24-2b・c）。土器はわずかながら、久御山町佐山遺跡編年で示したおおよそ佐山Ⅱ式前半に位置づけられ、庄内式併行期古相にあたる古墳時代初頭と推定される。

土坑SK20 調査区北部中央で検出した土坑である。平面形は歪な楕円形状を呈する。規模は、約1.7m×0.9m、深さ約0.4mを測り、床面は摺鉢状をなす。土坑内から壺・甕類などの土器とともに砥石が出土した。埋土には、細かな炭化物が含まれていた。出土土器から竪穴式住居にやや先行する弥生時代後期末～古墳時代初頭の土坑とみられる。

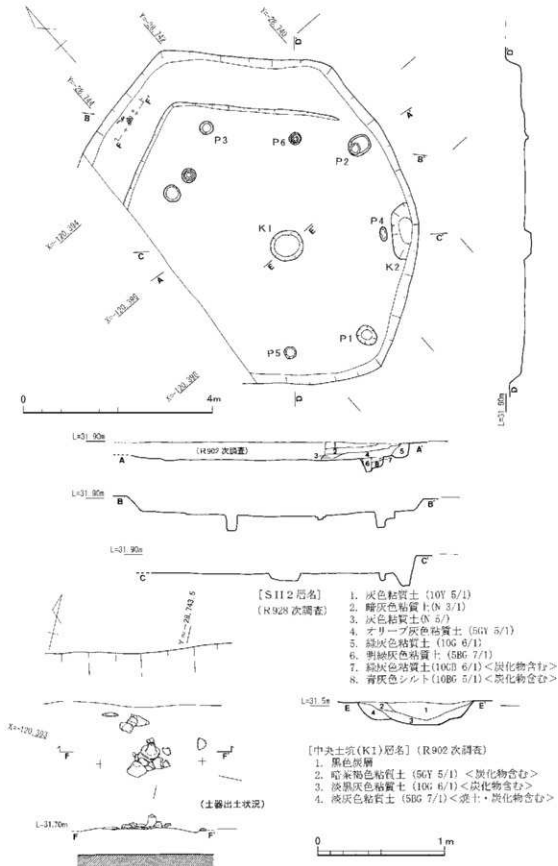
土坑SK19 SH2の東側で検出した不整形の土坑である。直径約1.2m、深さ約0.2mを



第13図 右京第902・928次上内田地区遺構配置図



第14図 右京第902・928次上内田地区調査区断面図

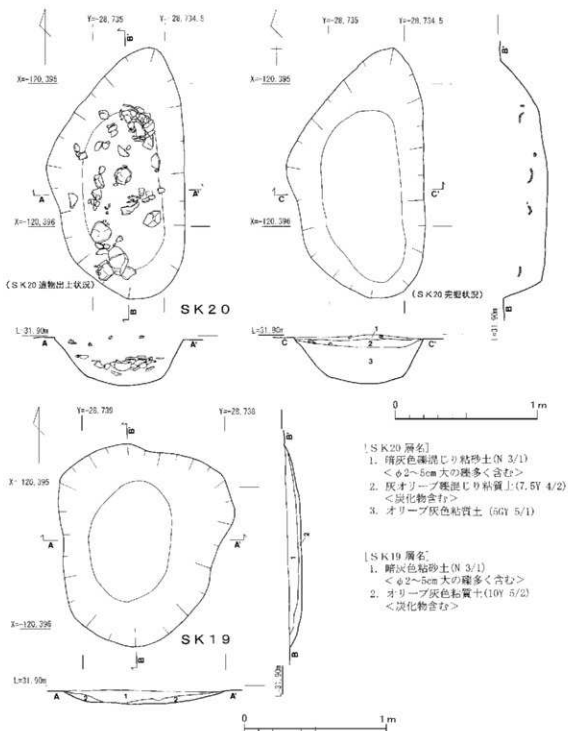


第15図 竪穴式住居跡SH2実測図

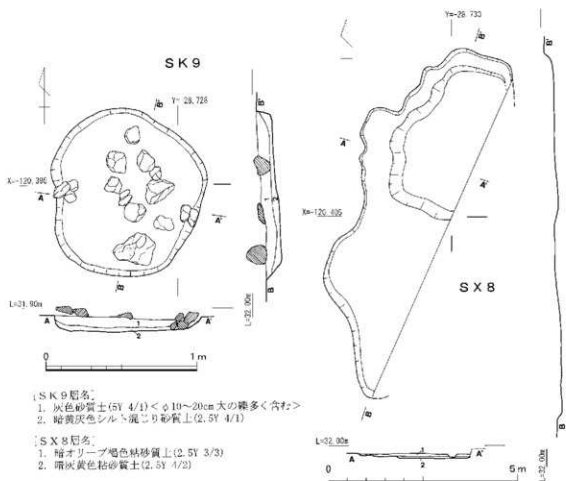
測る。検出状況や埋土からSK 20と同様の時期に帰属するものと考えられる。

土坑SK 9 調査区北東で検出した。直径約1m、深さ約0.1mの円形の土坑である。土坑上面で多くの角礫を検出した。出土遺物は土坑周辺で瓦器片が出土したが、遺構に直接伴うものではない。土坑の埋土は灰色砂混じり粘質土で、埋土の状況などから中世以降の遺構と推定される。

落ち込みSX 8 調査区中央東で検出した不整形の落ち込みである。長さ約9.5m、幅約3.6m以上を測る。北部がやや深く1段深く掘削されており、深さ約0.3mを測る。北部から初鋳



第16図 土坑SK 19・土坑SK 20実測図



第17図 土坑SK9・落ち込みSX8実測図

1368年の「洪武通寶」が出土したことから、中世後期の落ち込みと推定される。

素掘り溝群 素掘り溝群は、近世の包含層によって上層が削平され、検出面での深さは約0.1～0.2mを測る。主軸は、大きく南北、東西の二方向に分かれる。溝SD12・21・22は、東西方向の溝で、重複関係から南北方向の溝群よりも新しく掘削されている。南北方向の素掘り溝SD4～7、SD23・24・26は、平安時代末期から鎌倉時代の瓦器細片が出土し、主に中世の耕作に伴う素掘り溝群と推定される。

小結

今回の調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺構群を検出した。調査地点の北西では、これまでの調査で古墳時代初頭の大規模な流路跡が確認され、小泉川の段丘上にも集落の縁辺部が広がることが判明した。検出した住居跡は、府内で13例の調査例をみるいわゆる多角形住居である。多角形住居はほとんどが後期に属し、円形から方形の住居形態への移行を橋渡する住居形態で、特に後期後葉における住居の床面積の拡大に対応する住居とされる。全国的には150例以上の類例があり、分布は特に東部瀬戸内地域の加古川流域に集中する。播磨・摂津地域の多角形住居には住居内高床部を伴う特徴があり、今回の調査で検出した多角形住居もこうした地域との交流を背景にしたものと考えられる。

(高野陽子)

③長岡京右京第926次調査（7ANOKD-6地区）

今回の調査地は、長岡京市下海印寺上内田地区内に所在する。長岡京跡右京七条四坊十一町・十二町にあたり、伊賀寺遺跡にも含まれる。調査面積は、全体で400mを測る。調査期間は、平成20年1月8日～同年2月28日である。現地調査は、調査第2課調査第2係長森 正と、専門調査員竹井治雄が担当した。

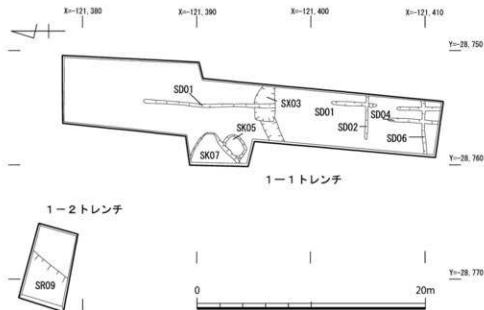
調査地は、現小泉川左岸に隣接し、現況は標高30～32mの水田・畑地である。調査地は、大きく2地点に分かれる。1トレンチは、右京第928次調査地の西側隣接地に設定した試掘トレンチである。1トレンチについては一部追加調査を実施したため、当初のトレンチを1-1トレンチとし、追加した部分を1-2トレンチとした。また、2トレンチは、右京第901次調査の南東地点に設定したものである。

調査の結果、長岡京跡に関連する遺構は検出できなかったが、古墳時代の土坑、平安時代の流路跡、旧小泉川の氾濫、中世～近世の水田・畑地等を検出した。出土遺物は、各トレンチから瓦器、土師器、須恵器、白磁、縄文土器等が出土した。

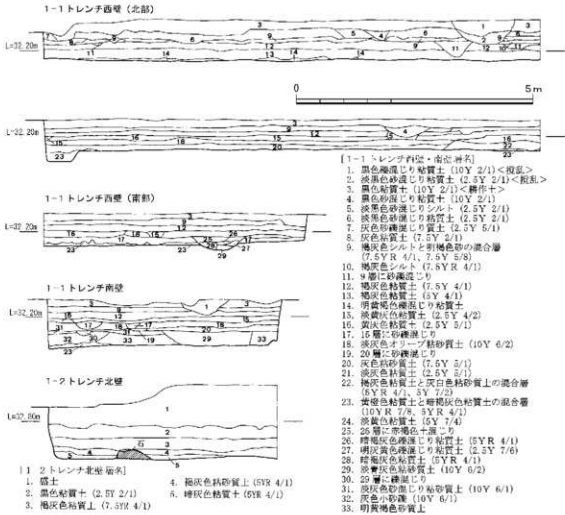
1-1トレンチ（第18図）

溝SD01 はほぼ南北方向の主軸をもつ素掘り溝である。規模は、幅0.25m、深さ0.2mを測る。断面はU字形を呈し、淡灰色粘質土が堆積する。溝内からは瓦器、土師器、須恵器の破片が出土した。時期については、中世に属するとみられるが、トレンチ南半の東西方向の素掘り溝（SD02）の方が新しい。

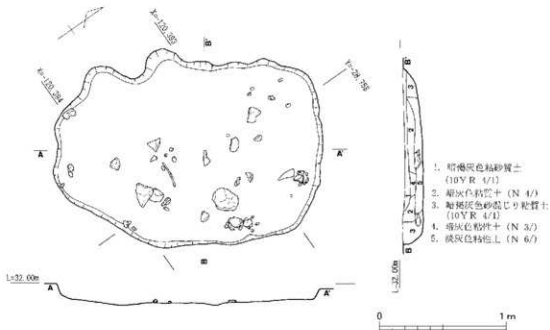
落ち込みSX03 トレンチ中央部で検出した。規模は、幅1m、長さ約3.2m、深さ0.3mを測る。断面碗状を呈し、わずかに湾曲する東西方向の落ち込み状の遺構である。埋土は上層に粘土、粘砂質土、下層に小砂礫、砂が堆積し、流水の痕跡が認められる。瓦器、須恵器片等が出土



第18図 右京第926次上内田地区1トレンチ遺構平面図



第19図 右京第926次上内田地区1トレンチ断面図



第20図 土坑SK 05実測図

している。

土坑SK 05 長辺1.2m、短辺0.7m、深さ0.25mを測る。断面皿状を呈し、底面は激しい凹凸がみられる隅丸方形の土坑である。土坑内には主に暗褐色粘質土が堆積し、古墳時代の土師器、須恵器に混じて木片、炭化した木皮が出土した。

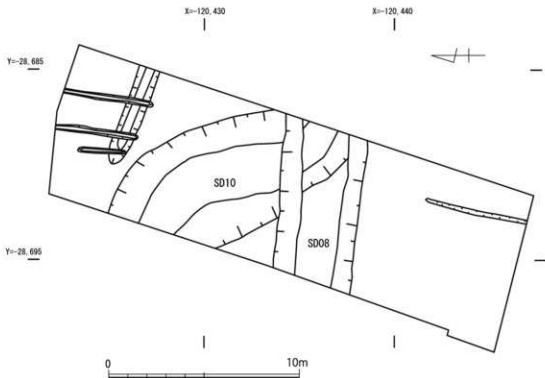
土坑SK 07 土坑SK 05と重複して検出した。一辺3m以上、深さ0.3mを測る。断面逆台形を呈し、底面はSK 05と同様の激しい凹凸がみられる方形の土坑である。土坑内には暗褐色粘質土、灰色砂質土が互層を成し堆積する。遺物は少ないが、古墳時代の土師器、須恵器が出土した。この遺構の性格については、竪穴式住居跡、廃棄土坑等考えられるが、確定するに至らない。

土坑SK 05と土坑SK 07の時期については古墳時代に属するが、SK 07の方が新しい。この両者は、形態、堆積土、出土遺物が類似する点から何らかの関連する遺構として考えられる。

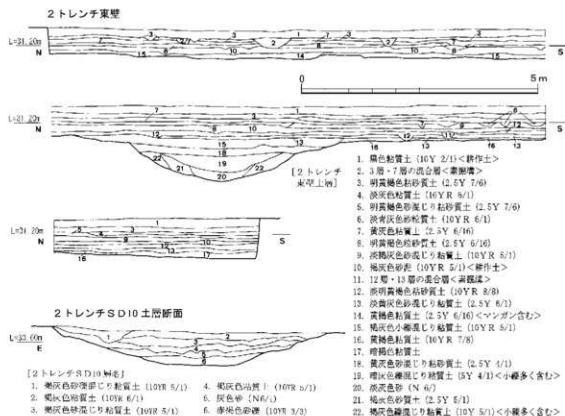
1-2 トレンチ (第18図)

1 トレンチの北西の地点に設定した試掘トレンチである。トレンチの西側で、北東から南西にむかって流れるとみられる流路SR 09を検出した。流路内には、粘土、粘質土、小砂礫が堆積し、人頭大の礫、太い流木が混在していた。遺物は、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器、中世の瓦器等である。

2 トレンチ (第21図)



第21図 右京第926次上内田地区2トレンチ遺構平面図



第22図 右京第926次上内田地区2トレンチ・溝SD10断面図

流路SD08 幅3m、深さ0.5mを測り、断面皿状を呈する西から東方向に流れる流路跡である。時期は流路内からは土師器、須恵器等が出土したことから、平安時代後半と推定される。流路内は粘砂質土、小砂、砂礫が堆積し、流水の痕跡が認められる。流路跡の北肩には拳大、人頭大の礫が幅0.3～0.6m、長さ5mにわたって並ぶ集石遺構があった。一部、南肩にも列状に並ぶ石がある。これは、もともと自然流路ではあるが、護岸用に人工的に造作された可能性がある。

流路SD10 幅5m、深さ0.7mを測り、断面U字状を呈する北西から南東方向に蛇行する自然流路跡である。流路内は粘砂質土、粘質土、砂礫、砂層が堆積する。上層の粘砂質土は人為的な堆積土と思われる。時期は、流路内の上層からは土師器、須恵器、古墳時代の須恵器片等が出土したことから、平安時代後半代には埋没したものと考えられる。

小結

今回の調査の結果では、流路SD08・10の時期については、平安時代後半に属するが、流路SD08の方が僅かに新しい。この両者の流路は、元来自然流路であったが、並存する時期もあったものと思われる。SD08の集石遺構はSD10が埋没し、その機能が消失した後人工的に構築された護岸工事の痕跡であると思われる。長岡京跡に関連する遺構、遺物等は確認されなかった。

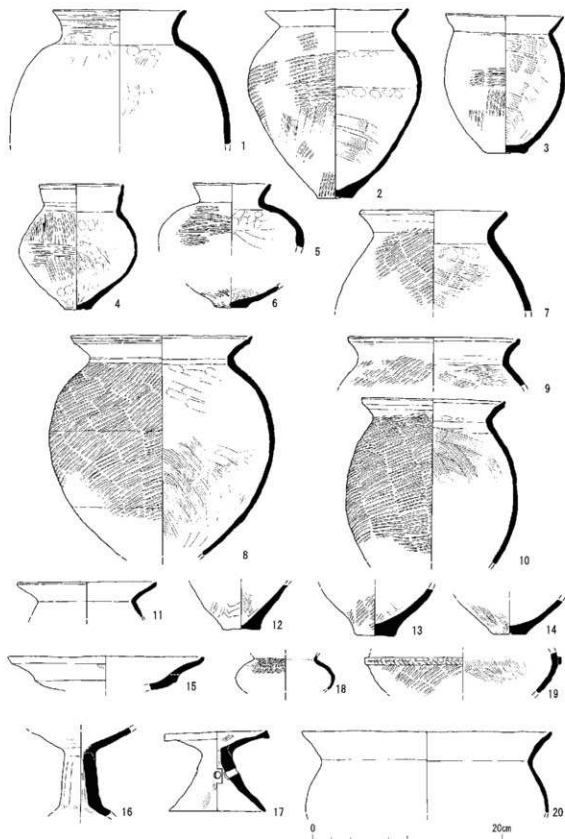
(竹井治雄)

④上内田地区出土遺物（第23～28図）

a. 右京第901次調査

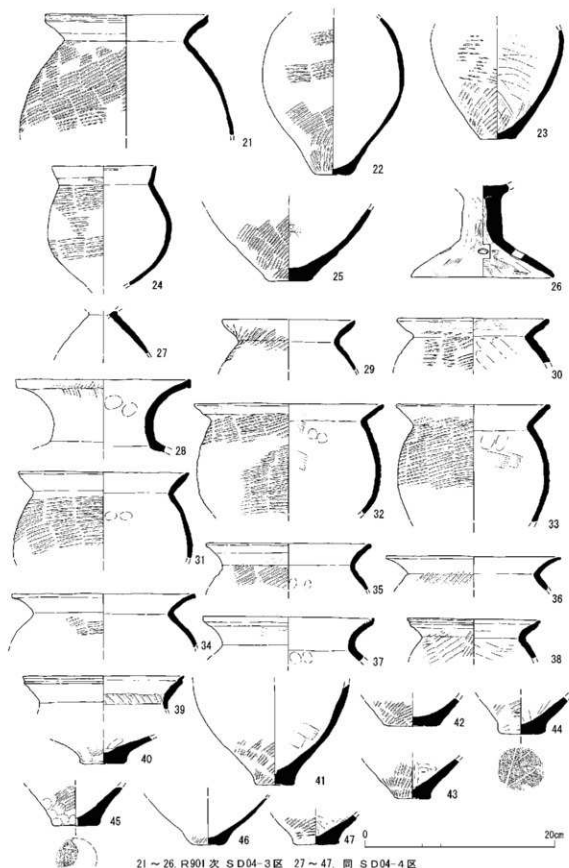
1～98は、右京第901次調査（R901次）で出土した。1～75・76・78～80は、SD04の出土遺物である。地区別に取り上げているため、地区ごとに報告する。1～3（第23図）は、SD04-1区から出土した。1は、口縁部が大きく外反し、肩部が張る特徴をもつ広口壺である。外面は摩耗しているが、一部に粗いハケが認められる。2は、弥生系の外面タタキ成形による甕である。4～17（第23図）は、SD04-2区から出土した。4は、外面に丁寧なミガキを施す小形の短頸直口壺で、5は肩部が大きく張る短頸壺である。7～10は、外面タタキ成形による弥生系甕である。口縁端部を丸くおさめるもの（7）と、端部外面に面をなすもの（8～10）がある。8は、端面にハケ条工具による3～4条の条線が確認できる。内面はいずれもハケ調整を基調とし、一部にナデが認められる。11は、著しく摩耗しているが、角閃石を多く含むいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ河内産の庄内式甕である。15は、二重口縁壺の口縁部である。16は、中空の器台である。17は、受部で大きく屈曲する東海系の小形器台である。18～20（第23図）、21～26（第24図）は、SD04-3区から出土した。18は、波状文と刺突文で加飾する小形甕である。19は、受口状口縁鉢の体部とみられる。突帯下半の外面はタタキ成形により、近江系と畿内系との折衷的要素をもつ。21～25は、外面は弥生系のタタキ成形による甕である。21は口縁端部に面をもつ。24は、小形品で口縁端部を丸くおさめる。26は、裾部が屈曲して開く高杯脚部である。4方向に透かしを穿つ。27～47（第24図）、48～57は（第25図）、SD04-4区から出土した。27は、小形器台の脚部である。28の広口壺は、口縁部形態と櫛状工具による列点文など、文様に近江以東の地域の特色がみられる。29～39は、外面にタタキ成形を施す甕である。口縁端部を丸くおさめるもの（29～34）と、端部を外方に外反させるもの（35・36）、端部外面に面をもつもの（37～39）がある。また29・30・32・33は、口縁外面までタタキ痕を明瞭に残す。38は、端部外面に沈線をもち、内面にケズリを施し、摂津～播磨の土器の特色をもつ。39は、頸部内面の剥離部分に体部外面上端のタタキ成形痕が圧痕としてみられる。41は、外面にタタキ成形、内面に板状工具によるナデを施す。42～47は、弥生系甕の底部である。48は短口縁の甕で、51・52は壺ないしは甕の底部である。49は、有段口縁の北近畿系甕である。内面は摩耗が著しいが、一部にケズリが認められる。53の底部は、底部外面に粘土の付着が認められる。54の鉢は、端部に面をなし、内外面に丁寧なミガキが施される。55は椀状高杯の杯部である。56・57は、低脚の椀状高杯の脚部である。58～62（第25図）は、SD04-5区から出土した。58は、大きく外方に外反する壺の口縁部である。60の甕は、肥厚する端部を特徴とする。61は、窪み底をなす甗の底部とみられる。62の弥生系甕は、外面をタタキ成形し、内面をハケのちナデ調整する。外面には、口縁端部と肩部から底部にかけて炭化物が付着する。以上の土器群の編年的な位置づけは、久御山町佐山遺跡編年で示した佐山Ⅱ型式前半に帰属し、古墳時代初頭に位置づけられる。

63～71・73～75（第25図）は、SD04-2～4区から出土した須恵器である。63は、無



1~3. R901次 SD04-1区 4~17. 同 SD04-2区 18~20. 同 SD04-3区

第23图 上内田地区出土遺物実測図(1)



第24图 上内田地区出土遺物実測図(2)

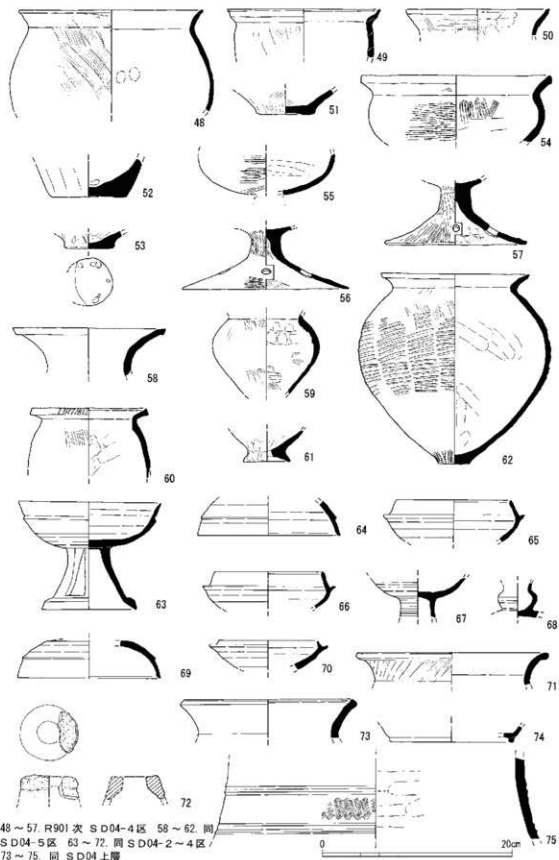
蓋高杯である。脚部には、四方に透かしを穿つ。64は須恵器杯蓋である。口縁端部の内面に明瞭な段は認められない。65・66は、須恵器杯身である。いずれも外面は丁寧なヘラケズリが施され。67は、須恵器高杯である。脚部にカキ目が施される。68は、裝飾付須恵器の器台の一部とみられる。いわゆる手持ち器台の壺を模した部分と推定される。69は、須恵器蓋である。外面には丁寧なヘラケズリを施し、口縁端部内面に段をなす。70の須恵器杯身は、口縁部の立ち上がりは短く、口径は矮小化している。71は須恵器壺の口縁部である。玉縁状の口縁端部をなす。72は、フイゴの羽口の一部である。一部に表面が気泡状となったガラス質の皸滓が付着する。以上、SR 04出土の古墳時代の出土土器の帰属時期は、陶邑TK 47型式～MT 15型式(63)、陶邑MT 15～TK 10型式(65・66)、陶邑TK 209型式(70)と時期幅がある。

73～75は、SR 04上層から出土した土器である。73は、古墳時代後期の須恵器壺の口縁部で、75の須恵器は、器台脚部である。74は須恵器杯Bで、長岡京期に帰属する。

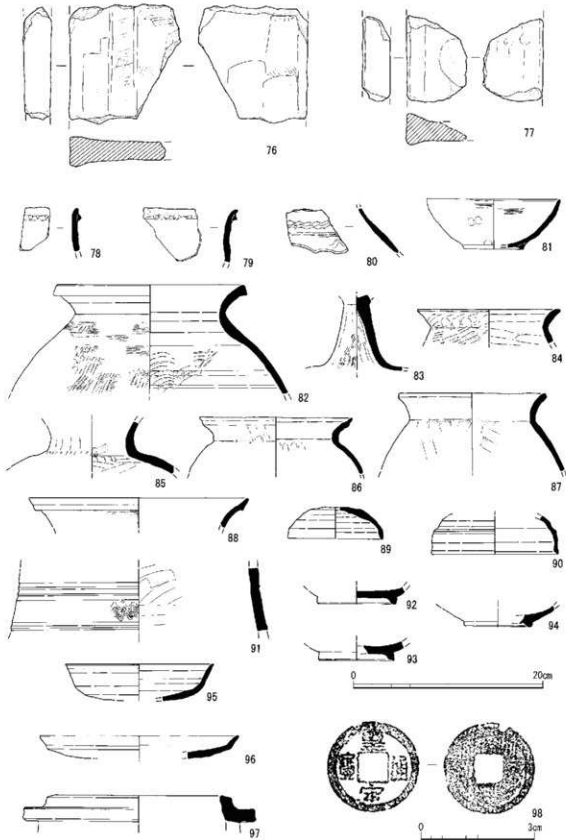
76・77(第26図)は、板状を呈する比熱痕跡のみられる土製品である。中央部がやや薄く、端部にむけて肥厚する。76は、器面の片面に荒いハケやケズリがわずかに観察され、筋状の圧痕が認められる。76はSD 04から、77は南部包含層中から出土し、やや離れた地点で出土している。78・79は、SD 04下層の断ち割り調査で出土した縄文土器深鉢の口縁部である。上端からやや下がった位置に刻み目突帯を付し、縄文晩期の船橋式の範疇で捉えられる。78はいわゆる生駒西麓産の胎土をもつ。80は、近江系壺の肩部とみられる。81は、SD 04の上面精査中に出土した瓦器碗である。82・83(第26図)は、SD 01-2区から出土した。82は、外反する「く」の字口縁をなし、外面に平行タタキ、内面に同心円文タタキを施す。83は、脚部に横方向のミガキを施す高杯である。84は、SD 02から出土した。口縁外面には、粘土の接合痕がみとめられ、ほぼ平行に指頭圧痕が施されている。85～98(第26図)は、いずれも包含層中から出土した。85は、頸部から体部への変化点に刻みを施す。86は、口縁部端面に面をなし、端部をわずかにつまみあげる特徴をもつ。外面は著しく摩耗しているが、わずかにタタキ成形の痕跡を残す。85・86ともに古墳時代初頭とみられる。87は、内外面をハケ調整する古墳時代後期の土師器甕である。89は口径が矮小化したつき杯蓋である。天井部は未調整で、陶邑TK 209型式に相当する。また90の杯蓋は端部内面に明瞭な段をなすもので、おおよそ陶邑MT 15型式に相当する。91は、大形の須恵器器台脚部である。90の須恵器杯蓋とはほぼ同時期に帰属するものであろう。92・93は緑軸陶器である。底部外面は露胎で、貼り付け高台である。近江産とみられる。95は、7世紀後半の須恵器杯で、96は8世紀前半の須恵器皿とみられる。94は、削り出し高台の京都産緑軸陶器である。97の羽釜は胎土に多量の石英・長石を含む。98は、「皇宋通寶」で、鋳上がりは良好である。初鋳年1039年の北宋銭である。輪径24.6mm、輪厚0.95mmを測る。

b. 右京第902次・928次調査

99～133は、右京第902次・第928次調査で出土した。99～105(第27図)はSH 2出土遺物である。99～102は、右京第902次調査(試掘)で、SH 02上層から出土した。当初、落ち込みとして認識されていた段階のものである。103～105は、右京第928次調査時に床面から出



第25図 上内田地区出土遺物実測図(3)



76. R901次 SD04 78~80. 同 SD04 断片 82・83. 同 SD01-2区 84. 同 SD02 77・81・85~98.
同 包含層

第26图 上内田地区出土遺物実測図(4)

土した。103・104の甕底部は、底部外面に指頭圧痕を連続して施し、中央を薄く仕上げる。105は、床面の高床部から出土した器台脚部である。4方向に透かしをもつ。SH2出土遺物は、いずれも細片で、時期を決定づける資料に乏しいが、102の高杯は小形化し、脚柱部が中実化することから、おおよそ佐山II型式前半にあり、庄内併行期古相の古墳時代初頭に帰属する。

106～111(第27図)は、右京第928次調査のSK20から出土した土器および砥石である。106・109・110は、弥生系甕で、口縁端部を丸くおさめる「く」の字口縁をなす。外面は、タタキ調整、内面はハケ調整を施す。法量は、大・中・小と明瞭に分かれる。口縁部は、小形品はやや内湾気味に立ちあがる。112の砥石は砂岩製で、一面に砥面をみとめる。SK20出土土器の帰属時期は、甕の法量分化に新しい要素をみるものの、いずれも肩部は張らず、口径に比して頸部径が大きく、前述したSD04出土土器に先行する資料と言える。おおよそ佐山I-3型式～II-1型式に対応し、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と推定される。

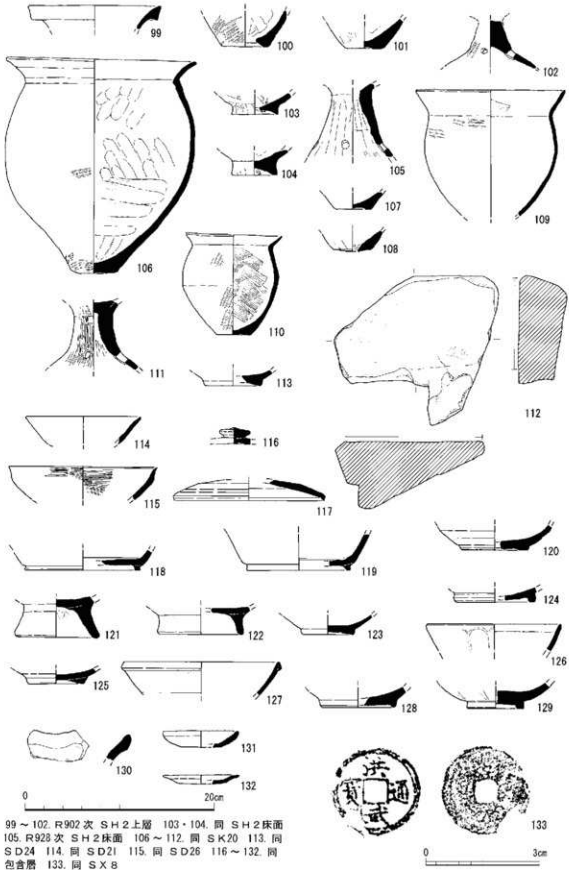
113は、右京第928次調査SP24から出土した京都産緑釉陶器の底部である。削り出し高台をなす。114はSD21から出土した白磁碗の口縁部である。115は、素掘り溝群の一つであるSD26から出土した瓦器碗で、おおよそ12世紀前葉に帰属する資料である。133は、右京第928次調査SX8から出土した「洪武通寶」である。初鑄年1368年の明銭である。鑄上がりは良好である。輪径は23.4mm、輪厚は1.35mmを測る。

116～139(第27・28図)は、いずれも右京第928次包含層中から出土した。116～126・129は、北東部の包含層から出土した土器である。117は須恵器杯蓋の一部である。118・119は高台をもつ須恵器杯Bで、118は貼り付け高台である。おおよそ長岡京期に帰属する。121・122は土師器杯の脚部で11世紀前半の資料である。120・123は、削り出し高台をもつ京都産の緑釉陶器である。125は須恵器壺底部で輪高台をなす。126は、蓮弁の陰刻をもつ龍泉窯の青磁碗の一部である。12世紀前半の資料とみられる。127・128・130～132は、右京第928次中央部包含層中から出土した。127・128は、白磁碗の一部である。127は玉縁口縁をなし、白磁Ⅳ類に属する。時期は12世紀後半に位置づけられる。129は、龍泉窯青磁碗の底部である。130は、魚住産とみられる片口鉢の一部である。12世紀前半の資料である。131・132は土師器小皿で、11世紀前葉の資料である。134の須恵器は、壺などの把手の一部とみられる。側面に、獣脚などにみられる線刻状の刻みが施される。135は、12世紀後半の羽釜である。138は上層包含層から出土した瀬戸・美濃産の天目茶碗で、16世紀後葉～末の資料である。136は京都産緑釉陶器である。137は、白磁Ⅵ類である。139の軒平瓦は、半截花纹を交互に配した段頸の軒平瓦である。おおよそ平安時代後期に位置づけられる資料とみられる。

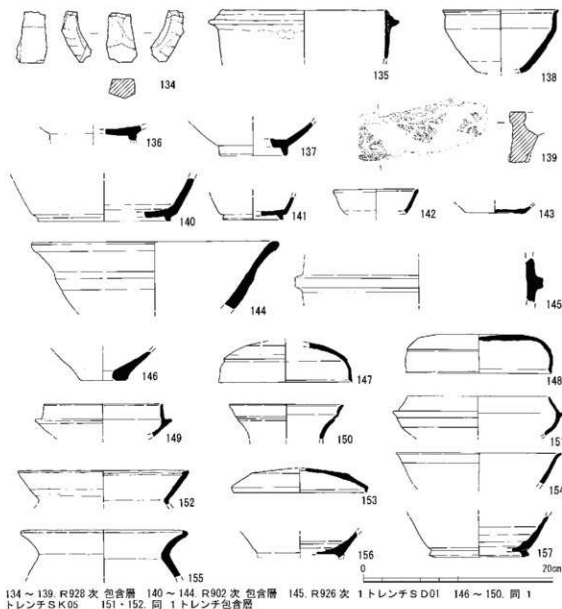
140～144(第28図)は、右京第902次調査の包含層中から出土した。140・141は、須恵器杯Bである。142・143は、いずれも白磁皿である。143は、白磁XI類で、12世紀後半に位置づけられる。144は東海系の須恵器鉢で、口縁部外面に段をなす。13世紀頃の所産である。

c. 右京第926次調査

145～157(第28図)は、右京第926次調査1トレンチSD1から出土した。145は、円筒埴



第27図 上内田地区出土遺物実測図(5)



第28図 上内田地区出土遺物実測図(6)

輪の一部で、直径約25cm前後に復原できる。断面台形状のタガの突出はやや低く、器壁は摩耗し、調整は確認できない。直径が小さく、形象埴輪の可能性もある。川西編年Ⅲ期後半～Ⅳ期に位置づけられる。146～150は、同SK05から出土した。147・148の須恵器杯蓋は外面に明瞭な稜をなし、口縁部内面にも段を残す。149の杯身の立ち上がりは高く、口縁部内面にわずかに段を残す。以上、須恵器はいずれも陶邑MT15型式新相～TK10型式古相に相当し、時期は6世紀前半とみられる。152は、1トレンチから出土した布留式甕である。布留式中段階に位置づけられる。153～155は、2トレンチSD08から出土した。153は須恵器杯B蓋である。154は、白磁埴V類の口縁部である。155の土師器甕は口縁部端部が肥厚するもので、8世紀前半の資料とみられる。156はSD14から、157はSX04から出土した須恵器壺の底部で、8世紀後半～9世紀前葉に属する。

(高野陽子)

(4) 友岡地区 (7ANNKR-4地区)

調査地は長岡京市友岡4丁目地内に所在し、長岡京跡右京八条三坊六町にあたる。現況は標高18mの水田である。調査は、幅8m、長さ25mの試掘トレンチを設定し、調査面積は200㎡である。調査の結果、井戸、土坑、地境(水田)、素掘り溝を検出した。

井戸SE01 直径4mの円形掘形を呈し、深さ2mを測る。井戸側は断面筒状を呈し、拳大以上の長円礫を小口積みする井戸である。底部は太さ20cmの角材を六角形の井桁状に組み、枕木として石積みの基礎とする。堆積土は上層では黒色粘質土、下層では灰色泥砂である。遺物は土師器、近世陶磁器等が出土しているが、最近まで野井戸として使用されていたとみられる。

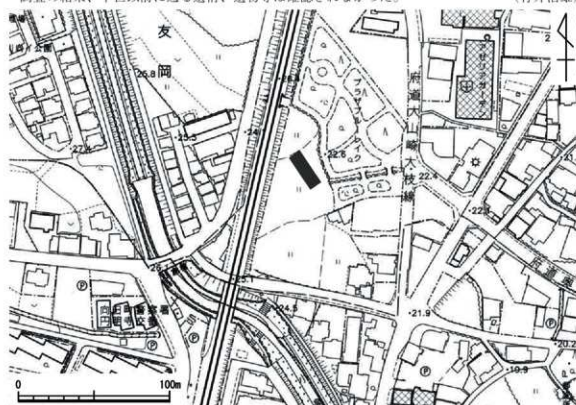
土坑SX02 トレンチ中央部で東西5m、南北14m、深さ0.2mを測り、堆積土は単一の灰黄色砂層である。底面は平坦、固く絞まっており、人為的な造作が考えられる。出土遺物はなかったが、井戸SE01より古いと、近世に属するものと思われる。土坑SX02の遺構の性格は何らかの基礎部分にあたるものと思われるが判然としない。

溝SD03 水田・畑地に伴う素掘り溝である。時期は近世に属する。

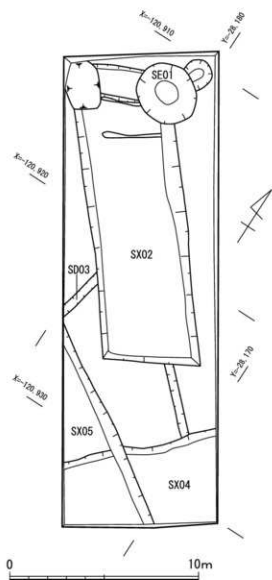
落ち込みSX05 西北西方向線を境として西南西側に落ち込み遺構である。堆積土は主に黄灰色粘質土、砂質土である。この土質は水田、畑地跡と思われる。出土遺物はなかった。

落ち込みSX04 SX05の下層から検出した北東方向線を境にして南東側に落ち込む。堆積土は黄褐色砂層、砂質土、砂礫層の互層、自然堆積が認められた。出土遺物はなかった。堆積状況から自然流路跡であり、SX05は水田等の土地改良に伴う造成、盛土の跡と思われる。

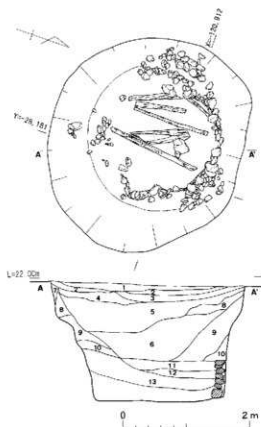
調査の結果、中世以前に遡る遺構、遺物等は確認されなかった。(竹井治雄)



第29図 右京第926次友岡地区調査地位位置図

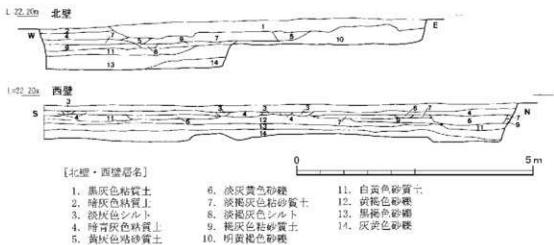


第30図 右京第926次友岡地区遺構平面図



第31図 井戸SE01実測図

1. 青灰色粘質土 (10BG 5/1)
2. 淡茶灰色シルト混じり中砂 (5Y 5/4)
3. 淡灰色粘質土 (5Y 6/1)
4. 淡灰色砂混じり粘質土 (5Y 6/1)
5. 淡灰色シルト混じり砂礫 (10YR 5/1)
6. 暗褐色シルト混じり砂礫 (10YR 4/1)
7. 灰黄色粘質土 (10YR 6/6)
8. 灰黄色泥混じり粘質土 (10YR 6/6)
9. 黒褐色粘質土 (10YR 3/1)
10. 灰黄色砂混じり粘質土 (10YR 7/4)
11. 跡喰
12. 淡灰色泥混じり粘質土 (5Y 5/1)
13. 淡灰色粘質土と赤褐色粘質土の混合層 (5Y 5/1, 2.5Y 4/6)



[北壁・西壁部名]

- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 黒灰色粘質土 | 6. 淡灰黄色砂礫 | 11. 白黄色砂質土 |
| 2. 暗灰色粘質土 | 7. 淡褐色粘砂質土 | 12. 黄褐色砂礫 |
| 3. 淡灰色シルト | 8. 淡褐色シルト | 13. 黒褐色砂礫 |
| 4. 暗青灰色粘質土 | 9. 粘灰色粘砂質土 | 14. 灰黄色砂礫 |
| 5. 黄灰色粘砂質土 | 10. 明黄褐色砂礫 | |

第32図 右京第926次友岡地区調査区土層断面図

(5) 調子地区

調査地は長岡京市調子八角に所在し、長岡京跡右京九条三坊一・二町にあたる。

①長岡京跡右京第902次調査（7ANRHK-3地区）

調査地の現況は標高17m前後の住宅跡であり、3か所に試掘トレンチを設定した。調査面積は、150㎡である。調査の結果、流路跡2条、旧小泉川の河道、中世から現代に至る水田・畑地の堆積状況等を確認した。

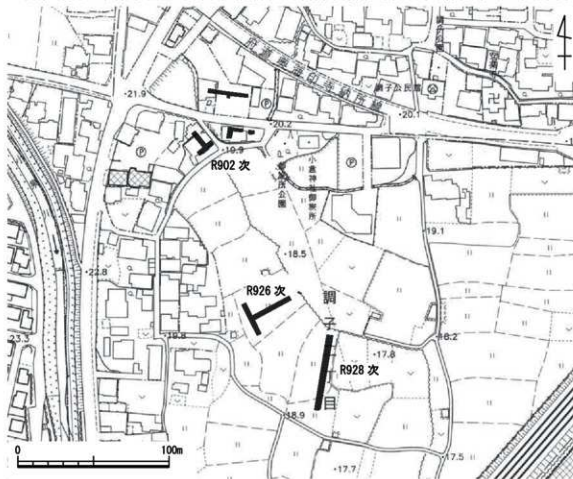
流路SR01 1・2トレンチにわたって検出され、幅5m、深さ0.5mを測り、北北西から南南東方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、青灰色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、近世陶磁器が出土した。

流路SR02 おおむね北から南方向に流れる自然流路である。時期は中世に属し、a～c期にわかれる。小泉川旧河道の最終末の流路跡である。

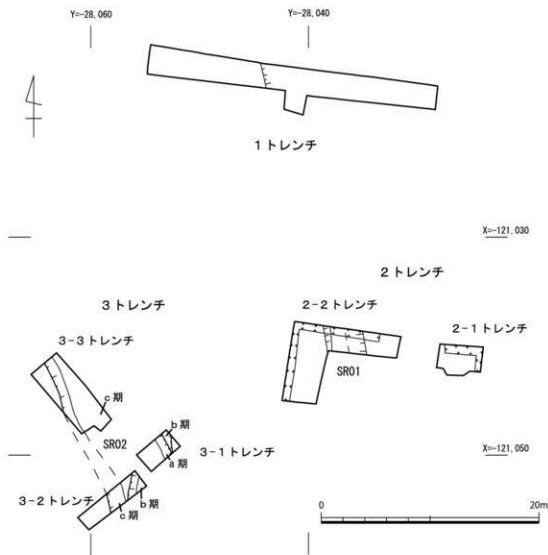
a期は幅2m、深さ0.4mを測り、北北東から南南西方向に流れる。断面は椀状を呈し、堆積土は淡緑灰色砂質土である。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

b期は幅2m、深さ0.7mを測り、北から南方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、灰黄色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、瓦器椀が出土した。

c期は幅5m、深さ0.9mを測り、北北西から南南東方向に流れる。断面形状は皿状を呈し、



第33図 調子地区調査位置図



第34図 右京第902次調子地区遺構平面図

灰黄色粘質土、砂粒が堆積する。遺物は土師器、瓦器碗、須恵器が出土した。

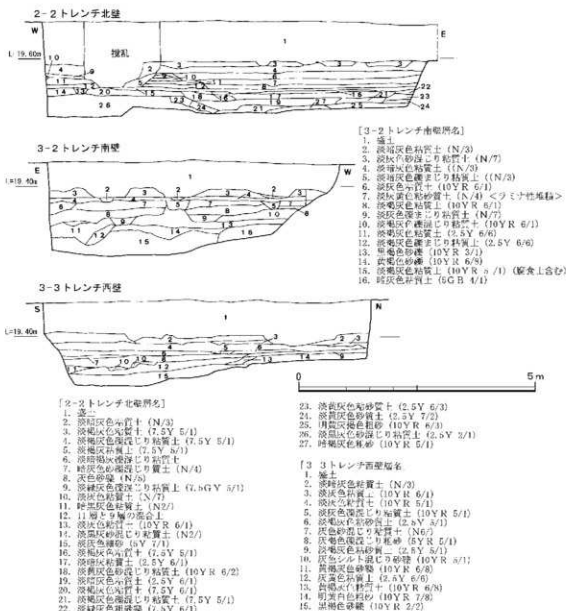
流路跡上層の水田・畑地跡は耕作土・床土以下、8層ほど確認できた。水田面とみられる層位の上面に砂層・砂粒が堆積し、氾濫の痕跡である洪水砂がみられた。時期は、中世、近世、近代の各時代で確認できた。
(竹井治雄)

②長岡京跡右京第926次調査(7 ANRHK-4地区)

調査地は京都府長岡京市調子2丁目に所在する。調査地の現況は標高15mの水田である。調査は、幅3m、長さ50mのT字形のトレンチを設定した。調査面積は150㎡である。調査の結果、畦畔の痕跡(地境)、素掘り溝、流路跡等を検出した。

溝SD 04 幅0.6m、深さ0.3mを測る北東方向の素掘り溝である。水田を区画する地境溝である。時期は近世に属する。

落ち込みSX 06 北西方向線を境にして南西側に比高差0.3mを測る自然の落ち込み状遺構(旧小泉川の河道の窪地)である。堆積土は灰黄色粘質土、砂質土、粘質土であり、水田を拡張



第35図 右京第902次調査地区断面図

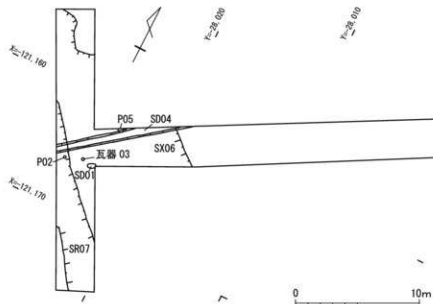
するために人為的に埋められたものと推察される。水田跡は、3時期確認でき、時期は瓦器碗、土師器等が出土することから中世に属する。

流路SR07 SX06の下層から検出した。幅2.0m、深さ0.5mを測り、断面U字形を呈する。堆積土は砂層、小砂礫、粘土層が互層をなし、流水の痕跡が認められる。小泉川の旧河道の最終の痕跡を示し、自然流路である。時期は平安時代後期に属するものである。

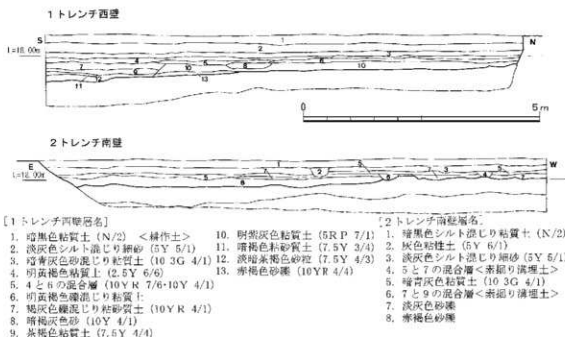
溝SD01 落ち込みSX02の下層から検出した水田あるいは畑地に伴う素掘り溝である。幅0.3m、深さ0.2mを測り、東西方向の溝である。遺物は、ほぼ完全なかたちの瓦器碗がまともに出土した。

小結

調査の結果、長岡京跡に関連する遺構、遺物等は確認されなかった。



第36図 右京第926次調査地区調査遺構平面図



第37図 右京第926次調査地区トレンチ断面図

溝SD 01・04は水田に伴う素掘り溝であり、中世から現代まで洪水に遭いながらも、継続して営まれたものである。

流路SR 07は旧小泉川の河道の終末期の痕跡である。落ち込みSX 06はこの地に水田を営むために、中世から近世にわたり、造成・盛土を行ったものと推定される。

旧小泉川の河道の範囲は今回のトレンチ内では確認できなかった。時期については流路SR 07とはほぼ同時期とみられる。

(竹井治雄)

③長岡京跡右京第928次調査（7 ANRHK-5地区）

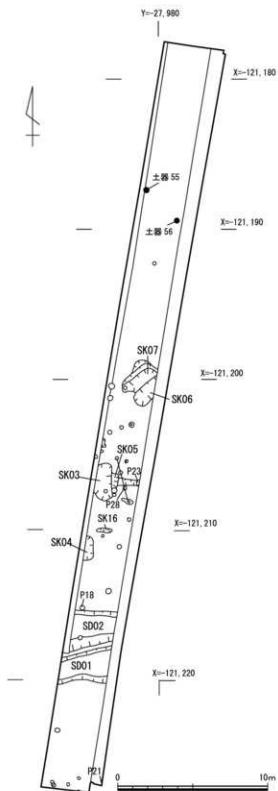
調査地は、長岡京市調子二丁目地内に所在し、旧字名では調査地の南端部の一段高い田畑が「カンノン堂」で、堂があったとの伝承があり、北の一段低い田畑が「藪の下」となっている。調査は200㎡を試掘調査として実施した。現地調査の期間は平成20年2月4日から同年2月29日を要した。調査には、調査第2課調査第2係長森正と同主任調査員戸原和人があたった。

調査地の基本的な層位は、地表から第1層は暗灰色粘質土（耕作土）、第2層は灰色粘質土小礫混じり（床土）、第3層は黒灰色粘質土炭混じりで溝やピットの埋土、第4層は暗灰色粘質土、第5層は灰色粘質土（溝やピットのベースとなっている）、第6層は黄褐色～赤褐色粘質土となり、以下第7層から第13層では、砂又は砂礫・礫の河川性堆積の状況を示しており、現在調査地の西を流れている小泉川水系の堆積によるものと考えられる。

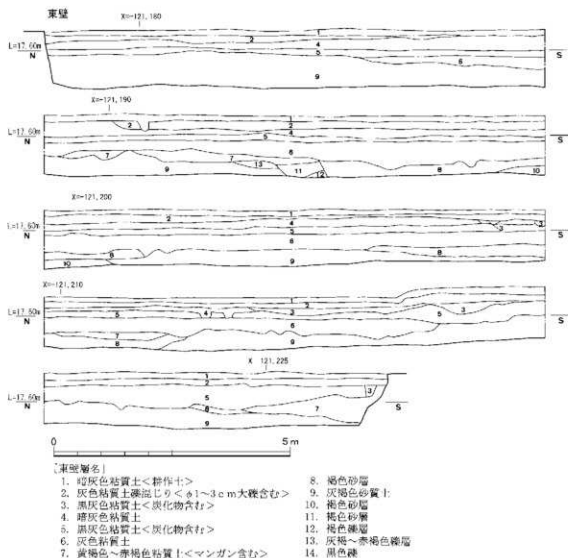
調査によって上層の床土直下では、水田耕作に伴う素掘り溝群を検出し、第5層の灰色粘質土の上面では溝2条、土坑5基、ピットなどを検出した。各遺構から土師器皿、瓦器椀、白磁などが出土した。

溝SD01 調査地の南よりで検出した東西方向の溝である。幅1.6～2.3mを測り3.5mにわたり検出した。溝内より瓦器椀が出土している。水田の造成土と考えられる。

溝SD02 SD01の北で検出した東西方向の溝である。幅2.0～3.0mを測り



第38図 右京第928次調子地区遺構平面図



第39図 右京第928次調査地区トレンチ断面図

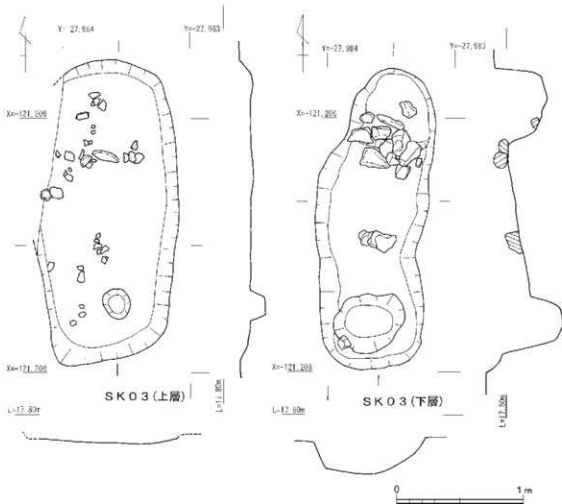
3.0mにわたり検出した。土師器甕片等が出土しており、一段低い水田裾部の水抜きの様相を呈している。

土坑SK 03 調査地の南半部で検出した。平面の幅0.7~0.9m、長さ2.37mを測り深さ0.2m程の断面舟底状を呈する。土坑の両小口には直径・深さとも0.4~0.6mの穴を穿っている。土坑内からは焼土と炭に混じて土師器皿、瓦器椀、白磁などが出土した。

土坑SK 04 調査地の南半部で検出した。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅0.7m以上、長さ1.6mを測り、深さ0.2m程の断面舟底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じて大小の土師器皿、白磁などが出土した。

土坑SK 05 土坑SK 03に西辺を接して検出した。切り合い関係は明確でなく、東側は東西方向の溝状となる。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅0.4m以上、長さ1.0mを測り深さ0.1m程の断面舟底状を呈する。土坑内からは大小の土師器皿が出土した。

土坑SK 06 調査地の中央部で検出した。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。



第40図 土坑SK 03実測図

平面の幅1.0m、長さ2.2m以上を測り深さ0.1m程の断面平底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じて瓦器碗が出土した。

土坑SK 07 土坑SK 06に東辺を接して検出した。切り合い関係はSK 06が新しい遺構である。黒灰色の焼土炭混じり層によって埋まっている。平面の幅1.2m以上、長さ2.5mを測り深さ0.1m程の断面舟底状を呈する。土坑内からは焼土と炭に混じて土師器碗が出土した。

小結

今回の調査では、平安時代前期から後期の遺物が土坑、ピット、溝内から出土した。調子地区内ではじめて検出した焼土と炭混じり層を埋土とする土坑を検出した。この土坑からは土師器の皿が重ねた状態で出土し、周辺で検出した小ピットにも同様の状況が見られるものがある。また、調査地の北よりでは掘形は確認できないものの瓦質の壺や黒色土器、土師器が並べられた状態で出土する等、調査地周辺で何らかの儀礼や信仰に関わる営みがあった可能性が考えられる。また近接する調査地南端の一段高い地形の水田は、字名や地元の伝承から草堂等の建築遺構が遺存している可能性が考えられる。

(戸原和人)

④調子地区出土遺物（第41・42図）

1～4は右京第902次調査として行った2・3トレンチ、5～21は右京第926次調査として行った1トレンチで出土しており、22～66は右京第928次調査で出土した遺物である。

a. 右京第902次

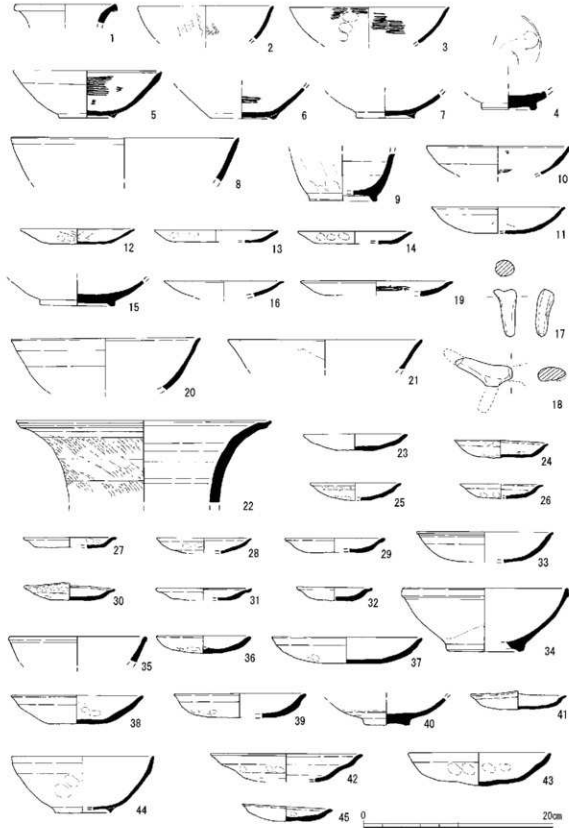
1は、2トレンチ包含層中で出土した。陶器壺の口縁部で口径10.6cmを測る。2は、灰軸陶器碗で内外面下半に飾描きを施す。12～13世紀の所産である。3は瓦器碗で、4は青磁碗である。

b. 右京第926次

5～7は1トレンチ溝SD 01で出土した瓦器碗である。5は口径12.0cm、器高1.3cm、6は高台径6.6cm、残存高3.3cm、7は高台径6.0cm、残存高2.6cmをそれぞれ測る。これらの遺物により溝SD 01の埋没時期は12世紀後半と考えられる。8～18は1トレンチ包含層中より出土した。8は須恵器鉢で、9は須恵器の壺もしくは鉢である。10・11は土師器皿もしくは碗である。10が口径15.0cm、11が口径14.0cmを測る。12～14は土師器皿である。12は口径12.0cm、器高1.5cm、13は口径12.4cm、器高1.3cm、14は口径12.0cm、器高1.3cmをそれぞれ測る。15・16は緑釉陶器である。15は内外面に濃緑色の釉を施す碗の底部で、高台径8.0cm、残存高2.7cmを測る。16は内外面に濃緑色の釉を施す皿の口縁部で、9～10世紀の所産である。17・18は土馬の脚片と下半身臀部から尾にかけての部分である。19は無軸陶器皿で口径16.0cm、器高1.5cmを測る。20は須恵器碗、21は灰軸陶器碗である。2～4は3トレンチ包含層中より出土した。

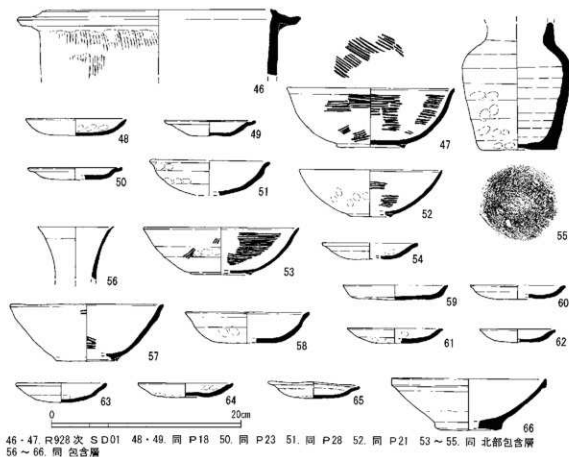
c. 右京第928次

22～35は土坑SK 03内で出土した。22は須恵器壺口縁で口径27.0cmを測る。23～32は土師器皿で、30～32は口縁部にわずかに段をもち端部をつまみ上げる。おおよそ口径9.5～10.5cm、器高1.5～1.8cmのものを主体とするが、32は口径8.0cmとやや小さいものもある。11世紀中頃から後半にかけての所産である。33は土師器皿、34・35は白磁碗である。33・34は12世紀前半の所産である。36～40は土坑SK 04内より出土した。36～39は土師器皿である。36は口径9.6cm、37～39は、口径14cm、前後を測る。40は白磁皿である。高台径4.8cm、残存高2.4cmを測る。41・42は土坑SK 05内で出土した土師器皿である。43は土坑SK 07内で出土した土師器皿である。44は土坑SK 06内で出土した瓦器碗で、口径15.0cm、器高6.0cmを測る。45は土坑SK 16内で出土した土師器皿である。口径9.5cm、器高1.8cmを測る。46・47は溝SD 01の埋土中で出土した。46は土師器の羽釜である。口径23.6cm、残存高7.0cmを測る。47は黒色土器B類である。内外面及び内底面に丁寧な平行ミガキ目を施し、口径17.6cm、器高6.3cmを測る。10世紀後半～11世紀の所産である。48・49はビットP 18から口縁部を上に乗って出土した土師器皿である。48は内湾する口縁で口径10.4cm、器高1.8cm、49は口縁部に段をもち端部をつまみ上げる。口径9.5cm、器高1.6cmを測る。50はビットP 23から出土した口縁部に段をもつ土師器皿である。口径9.8cm、器高1.5cmを測る。51はビットP 28から出土した土師器鉢である。底部から内湾して立ち上がり口縁端部を外方に引き出す器形で、口径12.4cm、器高3.7cmを測る。11世紀の所産と考えられる。52はビットP 21から出土した瓦器



1~4. R902 次 包含層 5~7. R926 次SD01 8~18. 同 1 トレンチ包含層 19~21. 同 2 トレンチ包含層
22~35. R928 SK03 36~40. 同 SK04 41~42. 同 SK05 43. 同 SK07 44. 同 SK06 45. 同 SK16

第41図 調子地区出土遺物実測図(1)



第42図 調子地区出土遺物実測図(2)

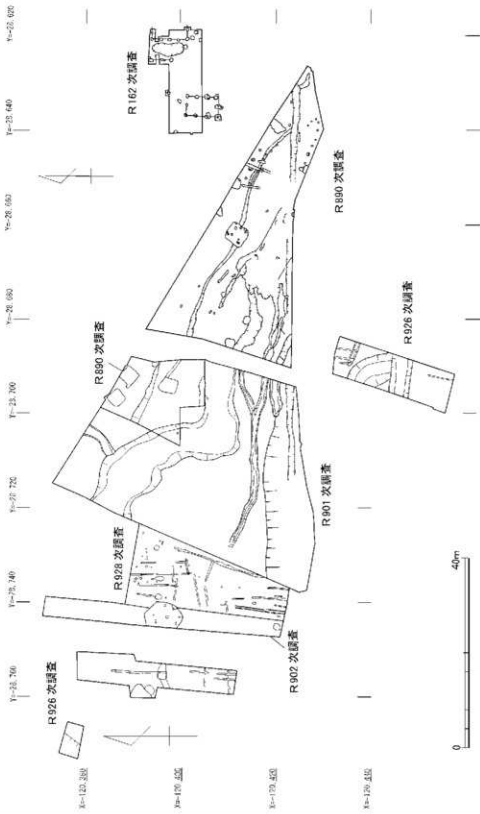
碗である。3～55は北部包含層中よりまとまって出土した。53は伏せた状態で出土した黒色土器B類の碗である。内面に丁寧な平行ミガキ目、外面には斜め方向のミガキ目を施す。10世紀後半の所産である。54は口縁部を上にし、置かれた状態で出土した土師器皿である。55は立位で置かれた状態で出土した、瓦質の壺で口縁端部を欠く。10世紀後半の所産と考えられる。56～66は包含層中から出土した。56は白磁壺の口縁で、口径8.0cmを測る。57は瓦器碗で、12世紀の所産と考えられる。58は土師器鉢で、59～65は土師器皿である。口径は9.5～10.0cm、器高1.5cm前後のものを主体とする。12世紀の所産である。

(戸原和人)

3. まとめ

平成19年度の発掘調査では、9地点の試掘調査と3か所の本発掘調査を実施した。別途報告する第927次調査を除くと、試掘調査では右京第902次調査の上内田地区、右京第926次調査の調子地区、右京第928次調査の調子地区で遺構を検出した。そのほかの試掘調査では、遺物を含む遺構が存在しないか、もしくは河川堆積物、近現代の遺構しか検出できなかった。

右京第902次調査の上内田地区試掘調査では、古墳時代初頭の多角形住居を検出した。この時期の遺構としては下内田地区では、初めての検出事例である。これまでの調査の結果からは、古



第43図 上内田地区遺構平面図

墳時代初頭の集落の広がりを確認することができない。右京第890次調査では古墳時代初頭の土器がほとんど発見できなかったことから、右京第898次調査北側または西側に広がる可能性があるが、西側について右京第926次調査では当該期の遺構を確認することはできなかった。

古墳時代後期の集落は、溝SD04の北側に広がるとみられる。遺物量も右京第890次調査1トレンチで多く西に行くほど多いことから、集落の中心は右京第890次調査北側と考えられる。

溝SD04は流路として機能していたが、古墳時代初頭には人工物と考えられる木組みや、橋脚柱とも考えられる柱もあり、人工的に改変されている可能性も指摘できる。またこの川の中からは、表皮のついた木が出土しており、中には幅が70cmを越すものも存在している。加工痕等は特になく自然物と考えられるが性格は不明である。

右京第901次調査では、縄文時代晩期の船橋式の突帯土器が出土しており、周辺に縄文時代の集落の存在の可能性が指摘できる。

調子地区では2か所の試掘調査で、遺構を検出した。平成18年度以前の調子地区の試掘調査では、建物跡などの明確な遺構があまり検出できていなかったが、右京第926次調査では、瓦器を含む溝SD01を検出した。

右京第908次調査では、土師器や白磁碗を含む土坑を検出した。こうした中世前期の遺構の発見によってこれまでの試掘調査では遺物の存在のみで明確ではなかった、調子地区の遺構の広がりを確認することができた。

平成20年度調査地内においては、長岡京跡に関連した遺構は検出できなかった。長岡京城南部が未開発であったという説と齟齬しない結果となった。(中川和哉)

調査参加者 (順不同)

調査補助員 杉江貴宏・木村悟・黒慶子・木村涼子・阿保悠稀・大本明弥・藤井宏光・川崎友裕・藤原希・溝淵直也・坪野茉莉恵

整理員 内藤チエ・長谷川マチ子・井上聡・茶園矢壽子・大島弘子・藤芳多江子・太田早苗・小塩三佳

注1 「右京第104次(7ANOND地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1983

「右京第104次調査概要(7ANOND地区)」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984

注2 長岡京跡右京第851次・下海印寺遺跡第22次・伊賀寺遺跡「京都第二外環状道路関係遺跡」(京都府遺跡調査概報)第124冊-1(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注3 高野陽子「(3)土器編年」(『佐山遺跡』「京都府遺跡調査報告書」第33冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注4 福島孝行「平面多角形の堅穴住居についての検討」(『考古学に学ぶ-遺構と遺物-』同志社大学考古学研究室) 2000

圖 版



(1) 調査地全景（伐採後、南から）



(2) 調査地全景（遺構検出後、空中写真、東から）



古墳・台状墓検出状況（東から、空中写真）



(1) 5号墳全景 (南東から)



(2) 5号墳埋葬施設ST 05-1 (西から)



(1) 5号墳土器棺墓1 (東から)



(2) 同上 (南から)



(3) 同上 (西から)



(1) 5号墳土器棺墓2 (口縁部分、東から)



(2) 同上 (北西から)



(1) 5号墳埋葬施設ST05-2出土土器(墓壇上、東から)



(2) 5号墳埋葬施設ST05-2(北から)



(1) 経塚検出状況（5号墳丘上、北から）



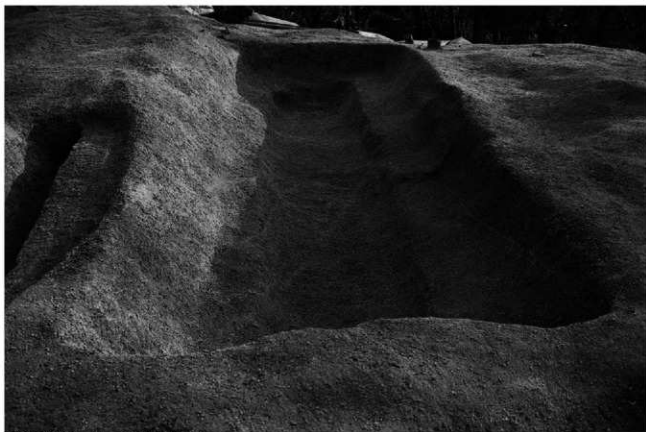
(2) 同上（東から）



(3) 埋納土器・石製品



(1) 6号墳埋葬施設（東から、空中写真）



(2) 6号墳埋葬施設・小土抗（北から）



(1) 6号墳土器溜り (南から)



(2) 6号墳土器溜り、複合口緑壺 (北西から)



(1) 7号墳埋葬施設（西から、空中写真）



(2) 7号墳埋葬施設ST 07-2（東から）



(1) 8号墓検出状況 (南西から)



(2) 同上 (東から)



(1) 8号墓棺上土器



(2) 8号墓棺内鉄鍍



(3) 8号墓埋葬施設ST08-1 (北から)



(1) 8号墓埋葬施設ST 08-2 (北から)



(2) 8号墓埋葬施設ST 08-3 (南から)



(1) 8号墓・9号墓 (東から、空中写真)



(2) 9号墓埋葬施設ST 09-1・ST 09-2手前 (南から)



(1) 9号墓埋葬施設ST 09-1、中間断面（南から）



(2) 9号墓埋葬施設ST 09-1 墓室内出土弥生土器（南から）



(1) 9号墓埋葬施設ST 09-1 (北から)



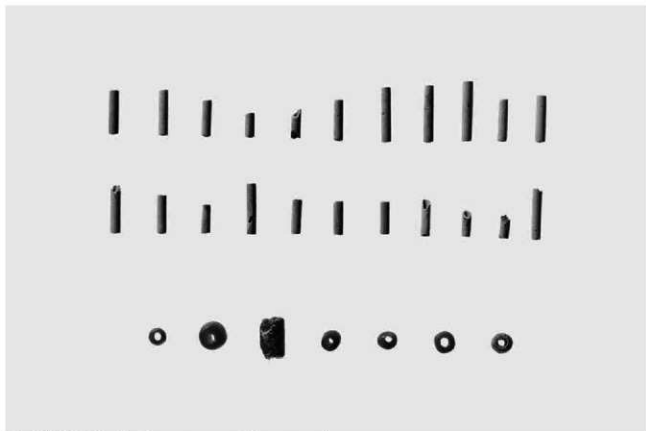
(2) 9号墓埋葬施設ST 09-2 (東から)



5号墳土器棺墓1・2、ST 05-2出土土器（番号は挿図 No.）



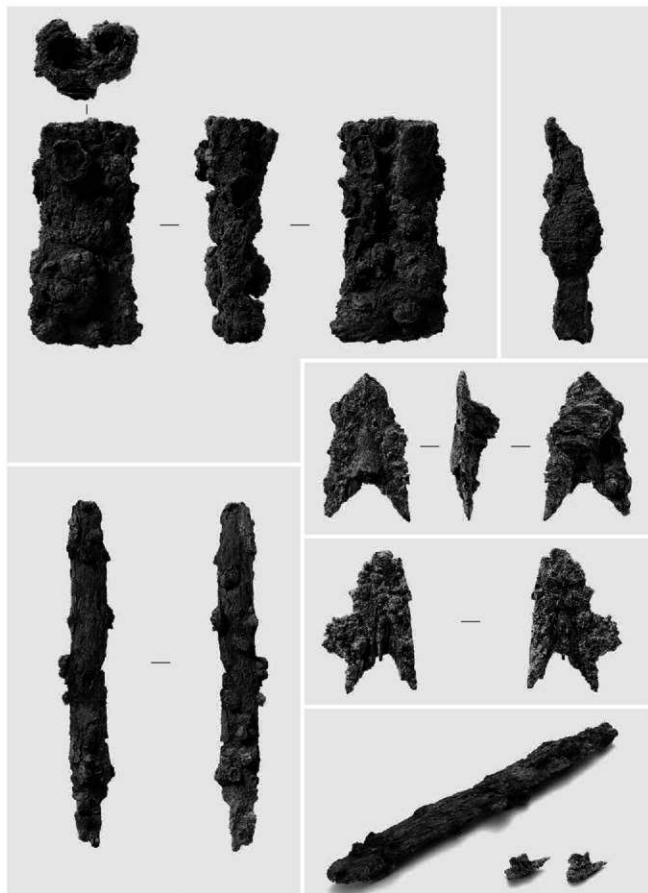
経塚および6号墳土器溜り出土遺物（番号は挿図No.）



(1) 8号墓出土玉類 (上2段ST 08-1、下段ST 08-2)



(2) 8号墓出土弥生土器 (左ST 08-1、右ST 08-3)



6・7号墳および8号墓出土鉄製品

(1) 鹿背山瓦窯跡第 2 次調査地遠景
(北西から)



(2) 第 2 次調査地遠景 (南東から)



(3) 第 2 次調査地全景 (左上が北)





(1) 第 2 次調査地東部全景 (左上が北)



(2) 通路 SF 27・SF 28 東部と鹿背山 1 号窯・2 号窯 (左上が北)

(1) 掘立柱建物跡 S B 35 全景
(南西から)

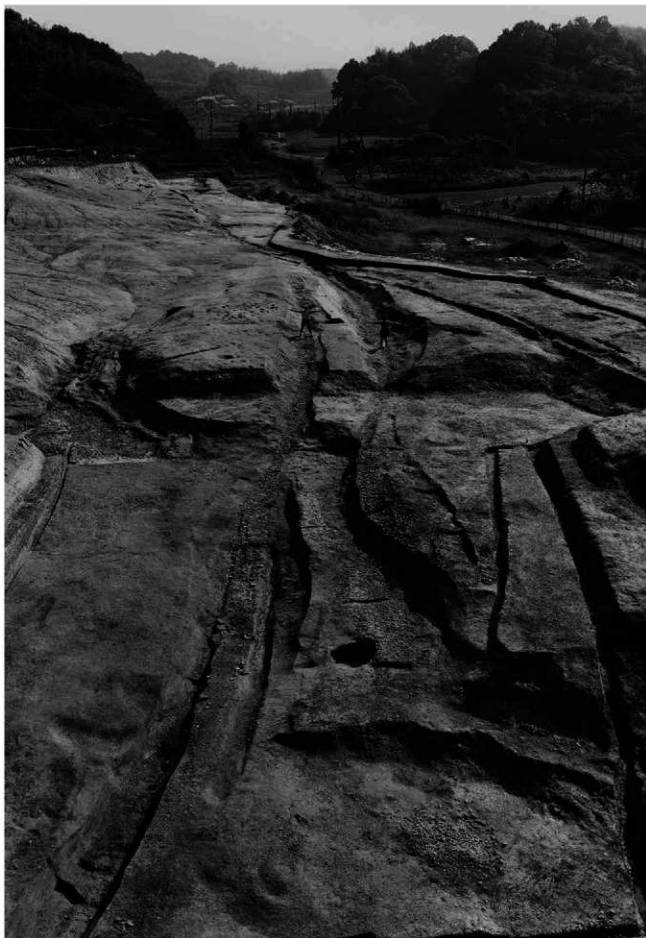


(2) S B 35 全景 (西から)

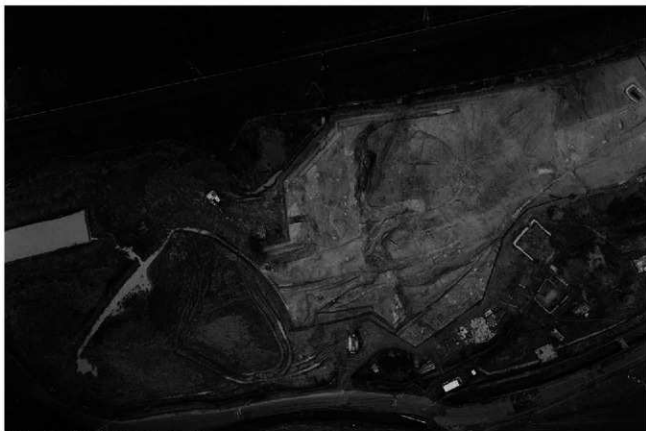


(3) 溝 S D 23 東部遺物出土状況
(北東から)

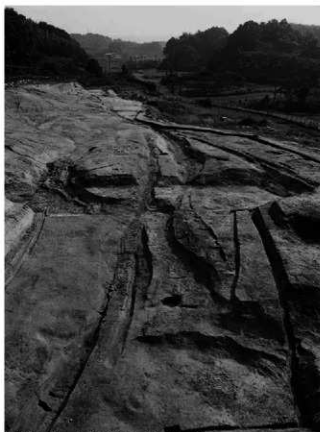




通路遺構 SF 27 (左)・SF 28 (右) 全景 (西から)



(1) 第 2 次調査地西部全景 (左上が北)



(2) S F 27・S F 28 全景 (北西から)



(3) S F 27・S F 28 全景 (南東から)



(1) S F 27・S F 28 検出状況 (北西から)



(2) S F 28 B-B' 地点埋土断面 (北西から)



(3) S F 27 D-D' 地点上下路面石敷き断面 (北西から)



(4) S F 28 石敷き鞆調査状況 (北西から)



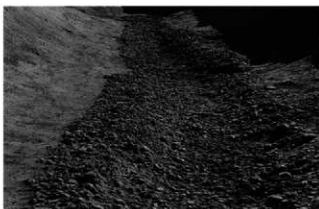
(5) S F 27 東端部 (東から)



(6) S F 27 西端部 (北東から)



(7) S F 28 石敷きの轍 (東から)



(8) S F 28 石敷きの轍 (北西から)

(1) 粘土採掘穴遺構 S X 39・
S X 45 (北西から)



(2) S X 45 の壁面に残る
粘土検出状況 (北西から)



(3) S X 45 内もっこ出土状況
(北西から)





(1) 土坑 S K 16 遺物出土状況
(南西から)



(2) 土坑 S K 19 遺物出土状況
(南東から)



(3) S X 26 検出状況 (南から)



(1) 土坑 S K 30 焼土・
遺物出土状況 (南東から)



(2) 土坑 S K 41 遺物出土状況
(南から)



(3) S K 32 検出状況 (南西から)



(1) 丘陵部 S X 38 周辺遺物
出土状況 (南から)



(2) 土坑 S X 38 遺物
出土状況 (南から)



(3) 近世墓 S X 24 (東から)

(1) 溝 S D 21 北部遺物出土状況
(北西から)



(2) S D 21 内集水溝 S X 44
(北から)



(3) S D 21 内軒丸瓦出土状況
(北から)





古窯 S X 18 全景 (南から)



(1) S X 18 調査状況 1 (南から)



(2) S X 18 北部埋土断面 (南から)



(3) S X 18 調査状況 (南から)



(4) S X 18 木郭・棺内遺物出土状況 (東から)



(5) S X 18 棺内北小口遺物出土状況 (南から)



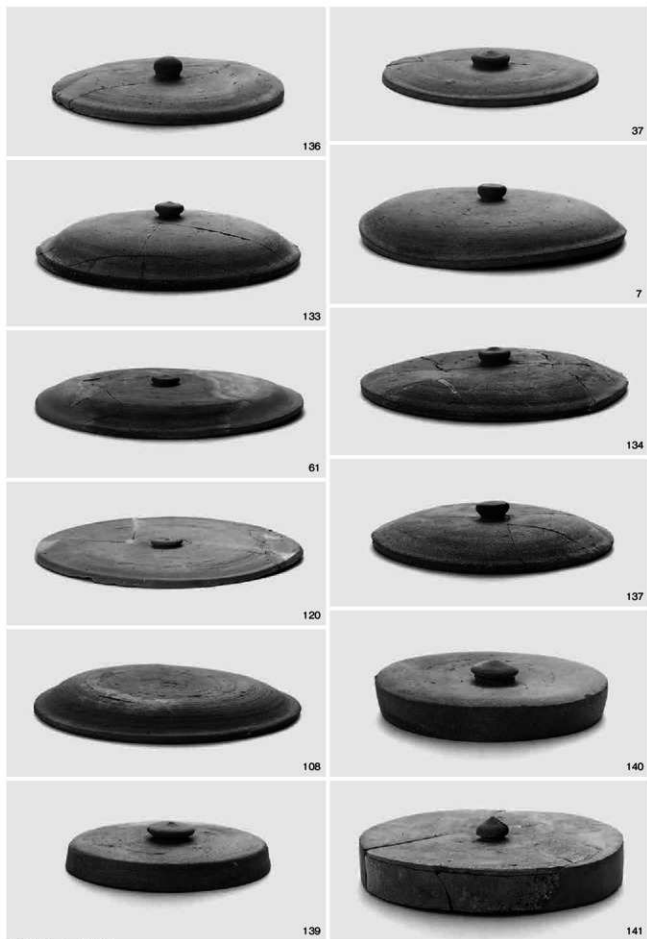
(6) S X 18 棺内南小口遺物出土状況 (北から)



(7) S X 18 木棺北小口部東側墓壇掘形断面 (南から)



(8) S X 18 中央西側墓壇掘形断面 (南から)





65



46



143



83



12



84



121



160



85



156



150



168



164



31



174



176



171



170



234



233



235



238



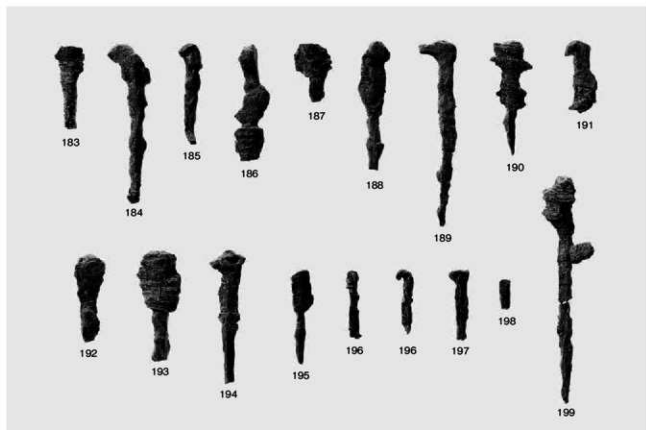
237



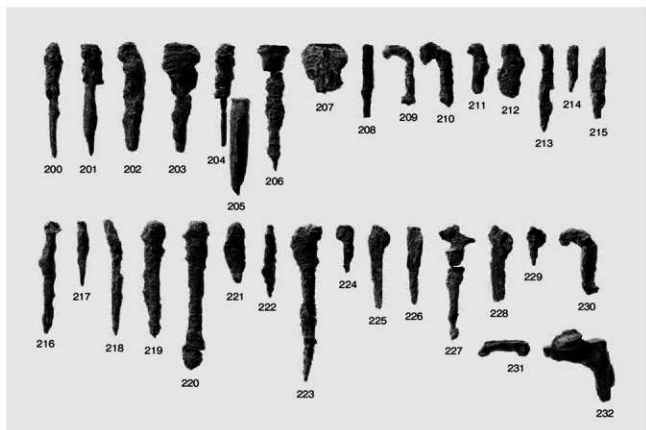
240



243



(1) S X 18 出土釘 1



(2) S X 18 出土釘 2

馬場南遺跡



(1) 馬場南遺跡調査前 (南西から)



(2) 馬場南遺跡調査前 (西から)



(3) 馬場南遺跡全景1 (南西から)



(4) 馬場南遺跡全景2 (東から)



(5) 第7・第8・第10トレンチ全景 (南から)



(6) 第1トレンチ全景 (西から)



(7) 第2トレンチ全景 (西から)



(8) 第3トレンチ全景 (西から)

馬場南遺跡



(1) 第4トレンチ全景 (東から)



(2) 第6トレンチ全景 (東から)



(3) 第8トレンチ全景 (東から)



(4) 第8トレンチSR 01土層断面 (北西から)



(5) 第10トレンチ全景 (西から)



(6) 第10トレンチSR 01検出状況 (南西から)



(7) 第11トレンチ全景およびSD 02 (西から)



(8) 第12トレンチ全景 (南東から)

馬場南遺跡



(1) 第13トレンチ全景 (南東から)



(2) 第14トレンチ全景 (北から)



(3) 第15トレンチ全景 (東から)



(4) 第16トレンチ全景 (北西から)



(5) 第16トレンチSR01 (右下が北)



(6) 第16トレンチSR01 (北から)



(7) 第16トレンチSR01 木簡出土状況 (北西から)



(8) 第16トレンチSR01 三彩出土状況 (南西から)

馬場南遺跡



(1) 掘立柱建物跡 S B 01 (左上が北)



(2) S B 01 (南西から)



(3) S B 01 柱穴 P 11 柱根検出状況 (南東から)

馬場南遺跡

(1) 井戸 S E 01 井戸内堆積土断面
(南東から)



(2) S E 01 井戸内堆積土中層下面
(南東から)

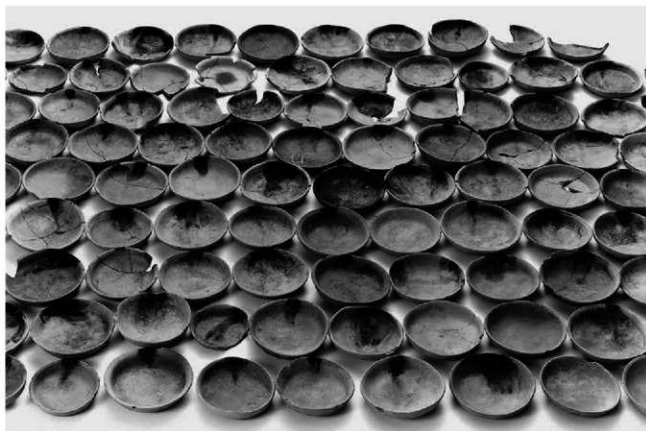


(3) S E 01 井戸内三彩壺頸部
出土状況 (北から)





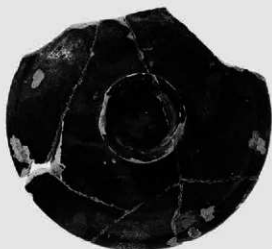
(1) 出土遺物 1 (須恵器・瓦)



(2) 出土遺物 2 (灯明皿)



109



101



104



101



119



113



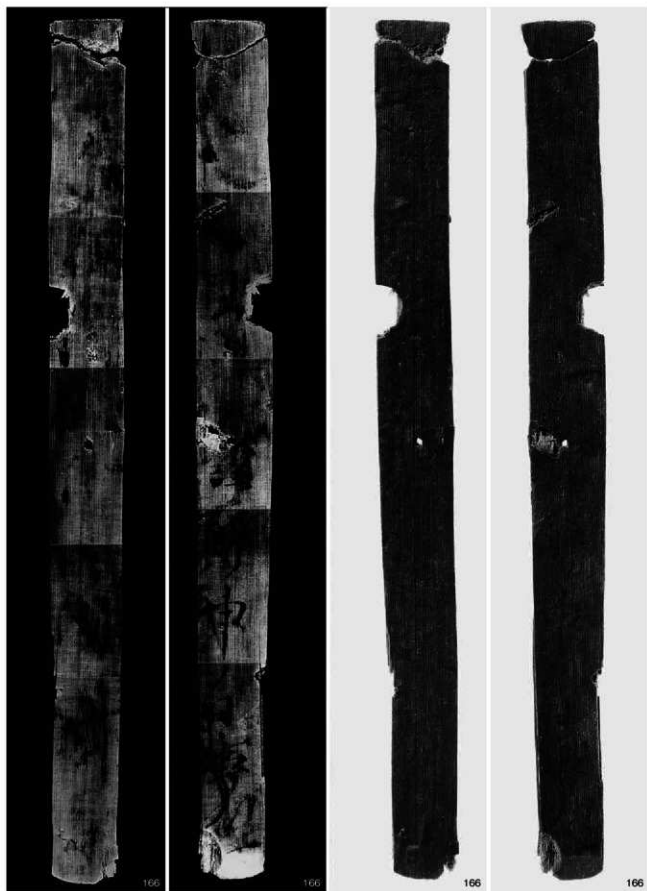
119



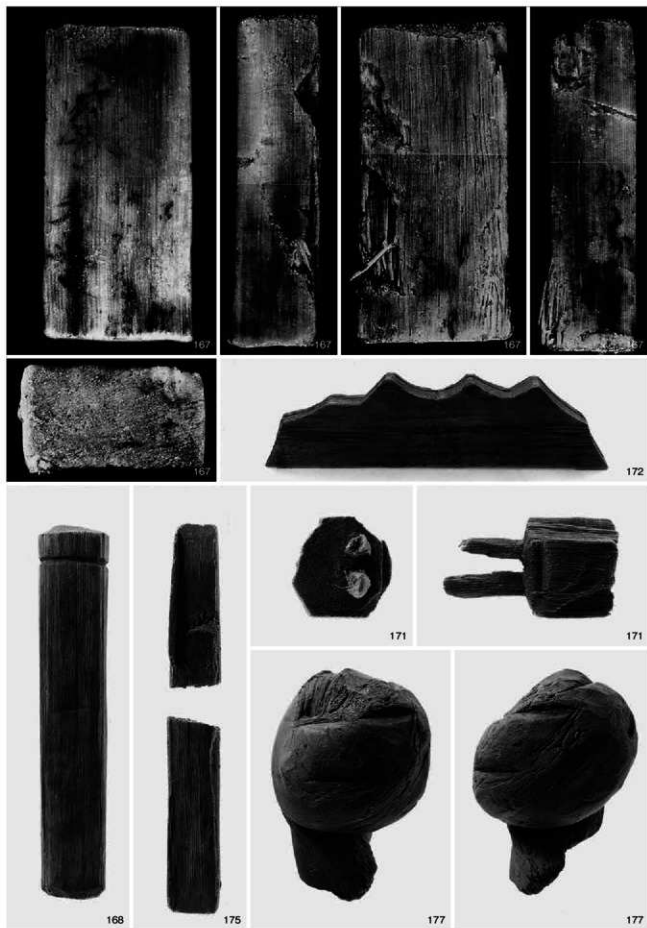
119



出土遺物 4 (墨書土器)



出土遺物 5 (木簡)



出土遺物 6 (木簡・木製品)



上内田地区<長岡京跡右京第 901・902 次> 調査地遠景 (東から)



(1) 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
調査前全景（東から）



(2) 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
1 トレンチ全景（北から）



(3) 荒堀地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
4 トレンチ全景（西から）

(1) 尾流地区
<長岡京跡右京第 902 次>
1 トレンチ全景 (北から)



(2) 尾流地区
<長岡京跡右京第 902 次>
1 トレンチ流路跡 SD 05・
SD 07 (南から)



(3) 尾流地区
<長岡京跡右京第 902 次>
2 トレンチ (北東から)





(1) 上内田地区<長岡京跡右京第 901 次> 調査地近景 (北西から)



(2) 上内田地区<長岡京跡右京第 901 次> 調査区全景 (上が東)

(1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901・902 次>
調査地近景 (西から)

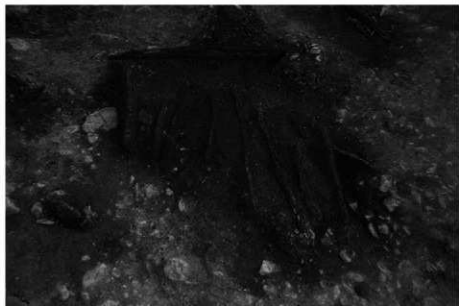


(2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901 次>
調査区西壁土層 (東から)



(3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901 次>
流路 S D 04 - 2 区西部土層断面
(南東から)





(1) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路 S D 04 木製品・自然木
出土状況（北西から）



(2) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路 S D 04 木製品出土状況
（上が南）

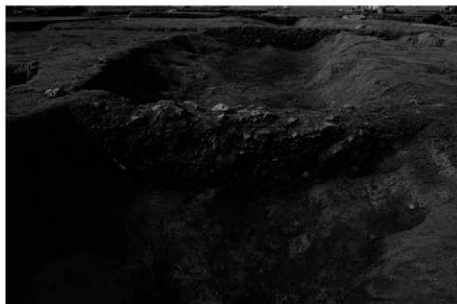


(3) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 901 次＞
流路 S D 04 土器出土状況
（上が西）

(1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901 次>
流路 S D 04 木柱検出状況



(2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901 次>
溝 S D 02 土層断面 (東から)



(3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 901 次>
作業風景 (東から)





(1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 928 次>
調査前風景 (南西から)



(2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 902 次>
トレンチ全景 (南から)



(3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 902 次>
トレンチ北壁土層 (南から)



(1) 上内田地区<長岡京跡右京第928次> 調査区全景(北から)



(2) 上内田地区<長岡京跡右京第928次> 竪穴式住居跡SH2(北東から)



(1) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
竪穴式住居跡 S H 2
上層石材検出状況（南から）

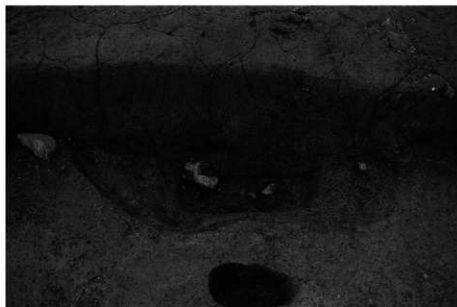


(2) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
竪穴式住居跡 S H 2（東から）



(3) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
竪穴式住居跡 S H 2
中央土坑 K 1（南から）

- (1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 928 次>
竪穴式住居跡 S H 2 土坑 K 2
(北西から)



- (2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 928 次>
竪穴式住居跡 S H 2
土器出土状況 (上が北)



- (3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 928 次>
土坑 S K 20 (東から)





(1) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
土坑 S K 9（東から）



(2) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
落ち込み S X 8（北西から）



(3) 上内田地区
＜長岡京跡右京第 928 次＞
調査区南壁土層（北から）

(1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
1-1 トレンチ全景 (南から)



(2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
1-2 トレンチ全景 (西から)



(3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
2 トレンチ全景 (北から)





(1) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
1-1 トレンチ土坑 S K 05・
S K 07 (北東から)



(2) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
1-1 トレンチ土坑 S K 07
土器出土状況 (上が南)



(3) 上内田地区
<長岡京跡右京第 926 次>
2 トレンチ溝 S D 08 全景
(西から)

(1) 友岡地区
<長岡京跡右京第 926 次>
調査前全景 (南東から)



(2) 友岡地区
<長岡京跡右京第 926 次>
トレンチ全景 (北から)



(3) 友岡地区
<長岡京跡右京第 926 次>
井戸 S E 01 (南西から)





(1) 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
調査前全景（西から）



(2) 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
1 トレンチ全景（東から）



(3) 調子地区
＜長岡京跡右京第 902 次＞
2-1・2 トレンチ全景
（西から）

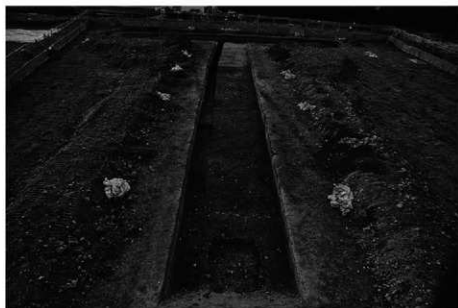
(1) 調子地区
<長岡京跡右京第 902 次>
3-1・2・3 トレンチ全景
(南東から)



(2) 調子地区
<長岡京跡右京第 926 次>
調査前全景 (南から)



(3) 調子地区
<長岡京跡右京第 926 次>
トレンチ東部全景 (北東から)





(1) 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ西部全景（北西から）



(2) 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
トレンチ中央断ち割り
（北西から）



(3) 調子地区
＜長岡京跡右京第 926 次＞
溝 S D 01 土器出土状況
（上が東）

(1) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
調査地全景 (南から)



(2) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
溝 S D 01 (東から)



(3) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
溝 S D 02 (南から)

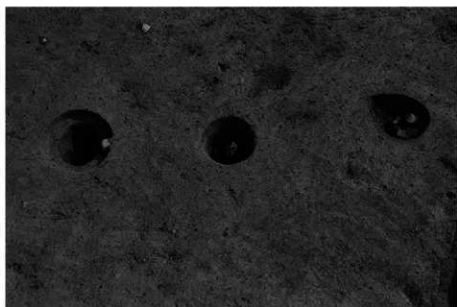




(1) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
土坑 S K 03 (西から)



(2) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
土坑 S K 06・07 (南西から)



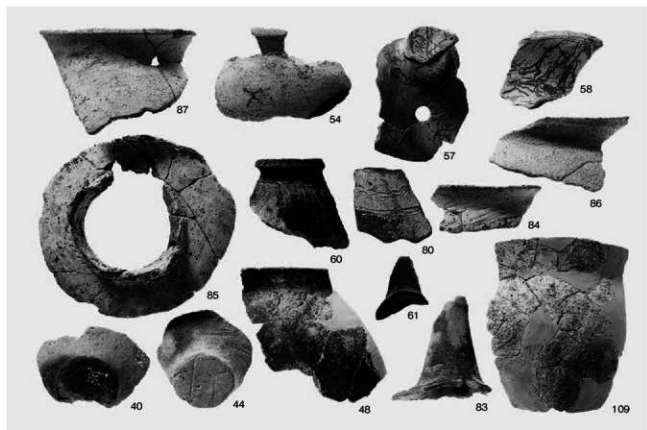
(3) 調子地区
<長岡京跡右京第 928 次>
柱穴 P 10・11・12 (北西から)



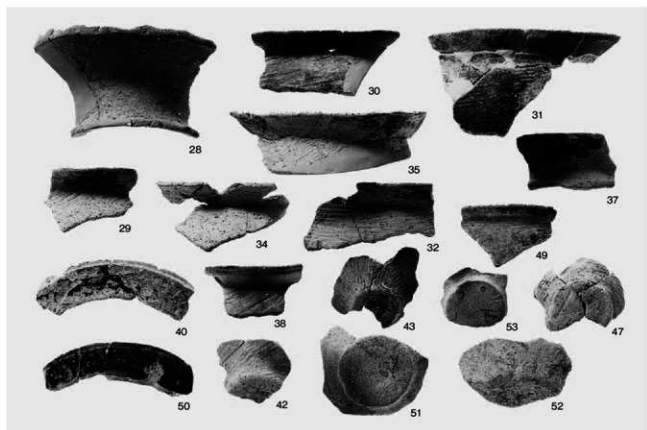
上内田地区出土遺物 (1)



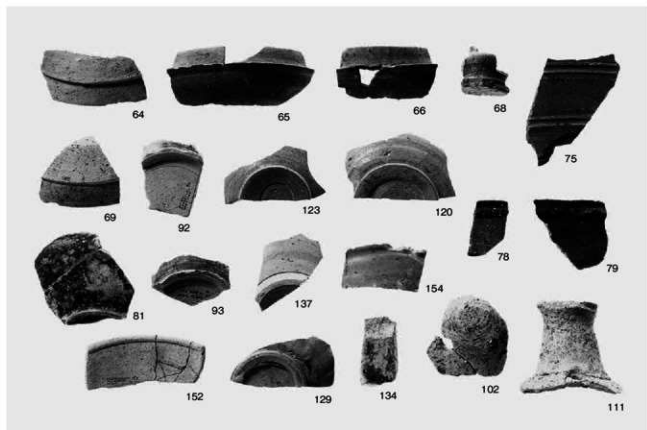
上内田地区出土遺物 (2)



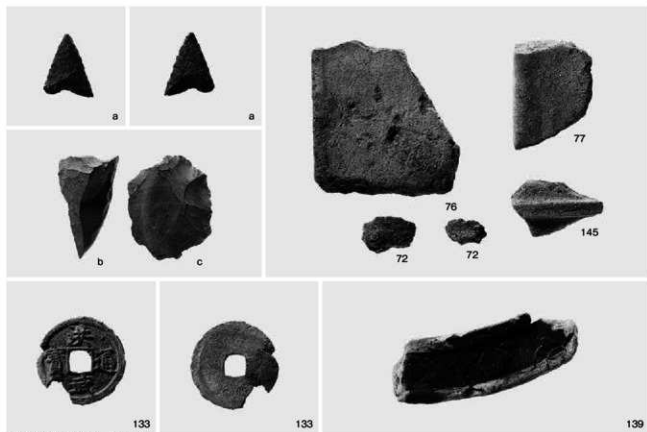
(1) 上内田地区出土遺物 (3)



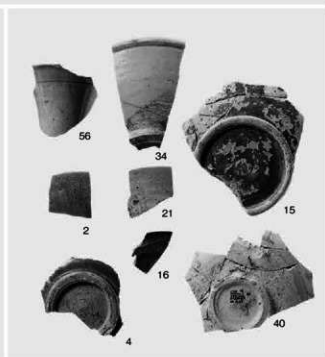
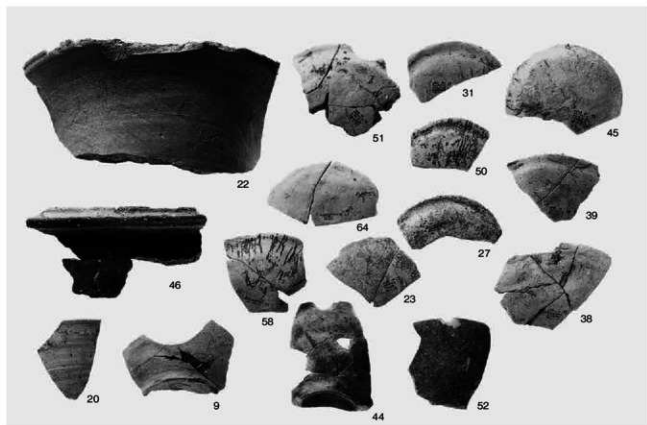
(2) 上内田地区出土遺物 (4)

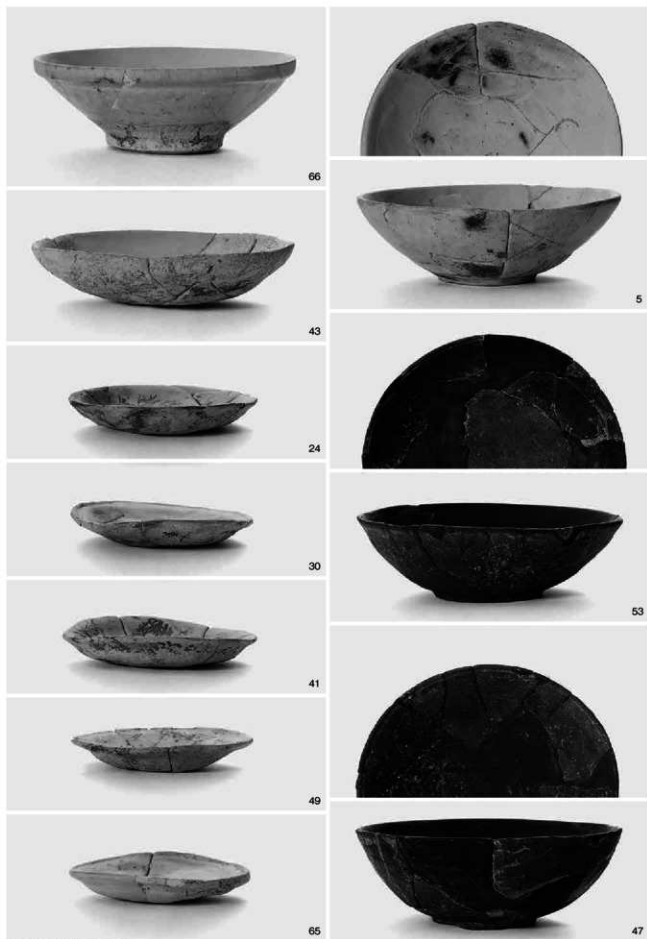


(1) 上内田地区出土遺物 (5)



(2) 上内田地区出土遺物 (6)





調子地区出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集							
シリーズ番号	第131冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2009 年		3 月		31 日			
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ちやうすがたけ こふんぐん	きょうたんごし くみはまちよう はしづめ					20071029 ～ 20080130	610	道路建設
茶臼ヶ岳古墳群	京丹後市久美浜 町橋爪	26212	278	35° 35' 27"	134° 55' 59"			
かせやまがよう だいにじ	きょうとふきづ がわしおおあざ かせやまこあざ					20070424 ～ 20080226	4,800	土地区画 整理
鹿背山瓦窯 (第 2次)	京都府木津川市 大字鹿背山小学 須原	262145	4	34° 44' 21"	135° 50' 19"			
ばばみなみいせ き (ぶんまわりい けいせき) 馬場南遺跡 (文廻池遺跡)	きょうとふきづ がわしおおあざ かせやまこあざ すはら					20071009 ～ 20080222	1,800	土地区画 整理
ながおきょう あとうきょうだ い901じ・いがじ いせき	ながおきょう ししもかいじん じかみうちだ					20070424 ～ 20071126	1,400	京都第二 外環状道路 建設
長岡京跡石京第 901次・伊賀寺遺 跡	長岡京市下海印 寺上内田	26209	46・97	34° 55' 00"	135° 58' 00"			
ながおきょう あとうきょうだ い902じ・いがじ いせき	ながおきょう ししもかいじん じおりゅう・か みうちだ、おく かいじんじあら ほり、ちようし にちようめ					20070424 ～ 20071019	100 200 350 150	京都第二 外環状道路 建設
長岡京跡石京第 902次・伊賀寺遺 跡	長岡京市下海印 寺尾流・上内 田、奥海印寺荒 畑、調子二丁目	26209	46・97	34° 55' 10" 34° 55' 03" 34° 55' 17" 34° 54' 42"	135° 40' 45" 135° 40' 57" 135° 40' 25" 135° 41' 25"			

ながおかきょう あとうきょうだ い926じ	ながおかきょう しともおか・ ちょうし・しも かいいんじかみ うちだ	26209	46	34° 54' 46" 34° 54' 38" 34° 54' 30"	135° 41' 20" 135° 41' 26" 135° 40' 56"	20071119 ～ 20080228	200 150 400	京都第二 外環状道路 建設
ながおかきょう あとうきょうだ い928じ	ながおかきょう ししもかいいん じかみうちだ・ ちょうし	26209	46・97	34° 55' 03" 34° 54' 36"	135° 40' 57" 135° 41' 27"	20071123 ～ 20080229	400 200	京都第二 外環状道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
茶臼ヶ岳古墳群	古墳	古墳時代前期 弥生時代後期 平安時代末		方墳 方形台状墓 経塚		土師器/弥生土器/鉄斧/ 鉄鏃/鉄剣/玉類 須恵器 石製品	壱棺墓の卓 越する古墳 と台状墓に おける破砕 土器供献	
鹿背山瓦窯 (第2次)	瓦窯・古墓	奈良/平安		掘立柱建物跡/粘土探掘穴/通 路/溝/土坑/古墓		瓦/須恵器/灰輪陶器/鉄 器/石器	官営瓦工房	
馬場南遺跡	集落/寺跡	奈良		掘立柱建物跡/井戸/溝		瓦/須恵器/土師器/施軸 陶器/墨書土器/木簡/木 製品/弥生土器/石器		
長岡京跡右京第 901次・伊賀寺遺 跡	集落跡	古墳時代初 古墳時代後期		流路跡		縄文土器/須恵器/土師器 /瓦/加工木	上内田地区 本発掘調査	
長岡京跡右京第 902次・伊賀寺遺 跡	集落跡	長岡京期か		流路跡		須恵器/土師器	尾流地区 試掘調査	
	集落跡	古墳時代初 中世		竪穴式住居跡 素掘り溝		須恵器/土師器	上内田地区 試掘調査	
	集落跡	なし		なし		なし	荒堀地区 試掘調査	
	集落跡	近世		流路跡		陶磁器等	調子地区 試掘調査	
長岡京跡右京第 926次	集落跡	近世以降		井戸/土坑		陶磁器等	友岡地区 試掘調査	
	集落跡	中世/近世		溝/流路		土師器/須恵器/瓦器	調子地区 試掘調査	
	集落跡	古墳時代後期 平安時代		土坑/溝/流路		土師器/須恵器/瓦器	上内田地区 試掘調査	
長岡京跡右京第 928次・伊賀寺遺 跡	集落跡	古墳時代初 中世		竪穴式住居跡/土坑/ 素掘り溝		弥生土器/土師器/須恵器	上内田地区 本発掘調査	
	集落跡	平安時代/近世		土坑/溝		土師器/瓦器/白磁椀	調子地区 試掘調査	

茶臼ヶ岳古墳群の調査では、丘陵尾根上において弥生時代後期の方形台状墓2基、古墳時代前期の方墳3基を検出した。各々から木棺を納めた埋葬施設や壙棺、破碎土器供獻とみられる土器溜りなどを確認した。さらに平安時代の経塚1基を検出した。

鹿背山瓦窯では、昨年度に瓦窯跡2基を検出しており、その瓦窯に関連して調査を進めたところ、瓦窯に関連した掘立柱建物跡1棟、粘土取り穴、通路2条を検出した。これらの遺構の検出により、瓦生産工程が明らかとなるとともに、出土瓦の検討から平城宮へ瓦を供給した官営瓦工房であることが明らかとなった。

馬場南遺跡は遺跡の範囲とその性格を確認するための試掘調査であり、この調査の結果、掘立柱建物跡1棟のほか、溝を検出した。溝内からは施釉陶器のほか、「神雄寺」と墨書された須恵器が出土し、奈良時代の一般集落と異なる性格の遺跡と想定される遺跡である。

第901次調査では、古墳時代初（庄内期）の流路跡を確認し、流路内から良好な状況で土器が出土した。また、包含層中から縄文時代晩期の凸帯文土器も出土した。

第902次調査では、上内田地区において庄内期の竪穴式住居跡の一部を確認した。その他、試掘調査地では、本発掘調査につながる顕著な遺構遺物の検出は無かった。

第926次調査では、上内田、調子地区において古墳時代の土坑や平安時代の溝などの遺構を確認した。

第928次調査では、上内田地区において第902次調査試掘調査で確認していた竪穴式住居跡を面的に広げ、庄内期の多角形住居跡であることが判明した。また、調子地区では、平安時代後期の土坑を確認した。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査報告集 第131冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141